醜美千秋

遍駆羽御

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
醜美千秋

【Ｎコード】
Ｎ１８７２Ｚ

【作者名】
遍駆羽御

【あらすじ】
志垣（しがき）アリアは自分を受け入れたただ、一人の人物である遊休紗英（ゆうきゅうさえ）と別れる日がやってきた。紗英はアリアにハートの絵柄が印象的な裁縫箱を贈った。その裁縫箱がいつか、二人の再会を導く目印になると信じた。
だが、アリアは同じ八歳の女の子　霜澤（しもざわ）秋（あき）に殺されてしまった。火傷を負った秋を助けようとしたのに彼女は殺されてしまったのだ。アリアの持っていた裁縫箱を駆使してアリアの皮膚を身体中に貼って、金髪の髪をカツラにして被った。何処から眺めても少女の身体

には火傷の跡などなかった。

出逢い――――死が出逢い――――死を呼ぶ。

衝撃のグロ小説。醜悪な美は千の落ち葉を散らす。

醜美千秋。

プロローグ　ある少女の人生の一幕

プロローグ　ある少女の人生の一幕

＞一＜

八歳の少女、志垣アリアは思った。どうして、私達は別れなければならないのだろうか？　最初は目の前にいる遊休沙英の姿を洞窟内で見かけた時、自分の聖域に無断侵入したと怒り、情け無用に近くにあった石を投げつけた。暗闇に溶け込んだ石はアリアでさえも見分けがつかなかった。透明と同等と成り果てた石の様子を見て、アリアの怒りは波が海へと帰るように引いていった。避けてと叫ぼうとするが、それよりも早く石が紗英のおでこに命中して

「あっ」

と声を立てて動かなくなった。しばらくしてから、

「ああ、痛かった」

と呟いた。

それがアリアと紗英の出会いであり、この洞窟が二人の秘密基地になった瞬間だった。

その光景を思い出した瞬間、アリアはお腹を抱えて笑い出した。その笑顔は普段よりも分かり易かった。何せ、辺りは暗く、友達の紗英が失敬してきた花火の時に使う蝋燭の灯りでアリアと紗英の身体と周囲だけを朱色に染め上げていた。紗英には漫画のように、アニメのように、特殊な心を読めちゃう能力はないのでただ、同調するようにゆっくりと笑窪を作り、可愛らしい声をあげる。

その様子を見て、アリアは自分の悩みに再び、対面する。どうして、私達は別れなければならないのだろうか？　児童養護施設の先生が考えている際によく、眉間に皺を寄せているのを思い出して、

それをやれば先生と同じ英知が手に入ると眉間に皺を寄せた。けれども、そこで考えているのは八歳の天涯孤独の少女、アリアだった。ただ、目の前のお友達を手放したくなかった。いや、違う。アリアは紗英で、紗英はアリアなんだ。手放せないのに。そう思っているのに。どうして？

「アリアちゃん、泣かないで」

「泣いてないよ。私にはあんた以外にもお友達は沢山いるんだから」

「嘘、お姉ちゃん、知ってるよ。アリアちゃんは児童養護施設の子と遊ばないで、一人で遊ぶのが大好きな紗英お姉ちゃんとしか遊ばないって。前に施設の先生に聞いたよ」

紗英はアリアの濡れた頬をペンギンの縫いぐるみの掌で拭った。毛糸の感触がくつぐったくてアリアは泣きながら笑った。

「ペン様は紗英と違って優しいね。良い子、良い子」

ペン様と呼ばれた縫いぐるみはいつもと同じ誇らしげな寛大な表情で幼い掌に撫でられてやるのを許した。

洞窟内にはコウモリ一匹とていない。この事実に聖域らしさを求めていたアリアは感激した。建築会社の廃材置き場からもう、使えない廃材を持って来ては様々な家財道具を組み立てた。特に白いクローゼットは力作だった。黒一色の洞窟で紗英が間違わないように全て、白一色にした。それを決めた二年前がまるで一分前のように再生できる。白い箪笥には紗英が縫った二人の洋服がぎゅうぎゅうに詰められている。それを思うと、アリアは胸が痛んだ……。終わってしまう！

白いテーブルにアリアはケーキを二人分、置いた。だが、二人分のケーキにしては歪で側面が凸凹していたし、面積が小さかった。本当は一人分のケーキを用意したかった。だが、一歳の頃、公園に捨てられ、親も親戚も不明なアリアには自由にできるお金がなかった。そこで頭を使ってみた。昨日、自分に出されたおやつのケーキをこの日の為に取って置いたのだ。こんなに知恵を絞っても、恥ずかしかった。駅前のケーキ専門店　スザのケーキよりも数倍劣って

いる。やっぱり無理だ。どうしようもなく、フォークを紗英に渡そうとする手が震えていた。
「クリームが口の中で溶けるね。スザのケーキよりも美味しいよ。ありがとう、アリア」
「本当はね、苺もそのケーキの上に乗っかっていたんだけどね」
その言葉を聞いた紗英はここに？　とケーキのクリームが禿げて生地が見えている箇所を指さした。そこは月のクレーターのようだ。もしくは一丁目の鶴田じいさん（アリアの創作上の人物）の禿頭のようだ。
「食いしんぼ　アリアちゃん、ここに在りだね。最後に食いしんぼ伝説に追加されたね」
頬をもぐもぐと動かしていたが、途端に止まった。見る見るうちに枯れたはずのアリア湖から水が溢れ出す。
「最後は嫌」
とぼそっとアリアは顰めっ面して言った。
「ほら、ほら、泣かないで。ひょっとしたら、親戚と相性が悪くて私もアリアんとこの施設の仲間入りになるかもしれないよ」
軽い口調でそんなことをさらりと言えてしまう紗英は紗英なんだ。繋がりのある人間がいなくなる痛みをきっと、紗英は知らない。夜、何度も両親の夢を見るのに顔を見ようとしてもぼやけている。いつも、白い霧みたいのが邪魔をする。きっと、それを知らない。急に怒り込み上げてきた。貴女はこっちへ来てはいけない！
「そんな事ないよ！　外人の私を受け入れてくれたのは施設の人間でもなく、先生でもなく、学校も年齢も住む所も違ったただ、偶然自由研究の甲虫観察日記に必要な甲虫を捕りに来て、洞窟に迷い込んだアホな紗英だった」俯いて、紗英を見ないようにしていた。早口で言葉を並べたので息が続かなくなった。胸を大袈裟に上下させて、咳き込んだ。紗英が心身と泣く声が洞窟内に反響しているのを知らんぷりした。「そんな優しい私の親友が新天地で上手くやっていけないなんてことないよ。ほら、泣かない」

紗英の頭を撫でようと爪先だけで立とうとするが、バランスを崩して転びそうになった。何度も試すが、背が届かない。無理すれば、転びそうになる。溜まらず、アリアは地団駄を踏んだ。

そんなアリアの手に半ば、無理矢理木箱の取っ手が握り締められる。その木箱にはハートの絵が描かれていた。それ以外は飾りもなく、質素な木箱だ。それは紛れもなく、いつも紗英が大切にしている裁縫道具だった。

見上げた紗英の顔には陽気な表情が浮かんでいた。黒い目は強い意志の光に満ちていた。今までの紗英とは別人みたいに凛々しかった。周囲の冷たい空気がアリアにそれを教えてくれた。

「私達、いつか再会しましょう。その目印の為にその裁縫箱をずっと、大切に閉まって置いて欲しい。父さんが死んだとき、時間が戻ればいいって思った。でも、時間は戻らないから父さんと過ごした時間も、アリアちゃんと過ごした時間も解れて切れそうになったら、縫い合わせるんだ。いつまでも忘れない絆の為に」

「詩人だね」

アリアは紗英の言葉には完全に同調できた。繋がりのある人間がいて、天涯孤独ではないと知ったから。絆がある限り。

紗英との別れは始まり、新しいアリアと紗英との始まりと言い聞かせながら、力いっぱい知恵いっぱいに遊んだ。紗英に裁縫を教わった。出来上がった縫いぐるみはペン様二世と名付けた。滑り台似の嘴が特徴的だった。アリアは紗英にドッジボールの必勝法を伝授した。その必勝法は取れないボールは見逃せ、取れるボールを確実に拾うという何気ない事だった。

この一幕はきっと、二人の少女を大人へと近づけさせたのだろう。同時にそれは時間を知る万物の逃れられない命の火の消耗でもある。それを自覚せずにアリアと紗英は洞窟を抜け出すと互いに無言のまま、アリアは児童養護施設　子猫の子へと歩み、紗英は駅前にあるマンションへと歩む。二人の背中は違う。カールした金色の後ろ髪がワンピースの生地を太陽の陽から守っているアリアの背中、背筋

がきっと伸びているのが目視できる汗ばんだ薄い生地のTシャツに包まれている紗英の背中。これから施設のみんなが遊んでいるのをじっと見るアリア、これからマンションの床を磨く紗英。そう、彼女達は背中だけではなく、違うのだ。それをアリアは今日、知った。

第一章　無邪気な初恋

第一章　無邪気な初恋

＞一＜

人はどれだけ、生きた時間を重ねれば、後悔しないようになれるだろうか。六十歳にもなって私はそんな事をいつも、考えていた。むしろ、年を重ねれば重ねるほど、心に泥を被るように後悔は増えていく。ああ、自分の肌はその醜さを示すようにシワシワだ。まだ、美しかった十二歳の頃、私は初めての後悔の元になる出逢いをする。そして、その後悔ももうやり直せない彼方へと消えたのを警察の届けてくれた遺書によって知った。今、私は一人、静かに遺書を握り締めて思い出に耽る。それが千冬の遺書とは信じられず、遺書の入った封筒の形が拳の中で変わっていくのでさえも何処か、現実味が無かった。

当時、私は父親の仕事の都合でニューヨーク市へと引っ越してきた。まだ、カラーテレビは一般に普及していなく、白黒の映像でしか異国を覗けなかった。そんな私の目の前に堂々と多くのビルが建ち並んでいた。それは十二歳の私にとっては恐怖そのものだった。今にも倒れてきそうな気がした。それだけではない。周囲にいる人々は子どもでも私よりも背が高かった。

十二歳の私が一人で歩いているのを心配した警察官がゆっくりと近づいてくる。太った白人の警官はまるで赤ちゃんを怖がらせないように無理矢理、笑みを作っているようだ。私はアイスキャンディーを舐めた。ひんやりして美味しい。だが、このアイスキャンディーは二人分くらいありそうだ。

「可愛いお嬢ちゃん。君のベビーシッターは何処だい？　こんな場所にいると誘拐されちゃうよ」

なんてゆっくりした英語の発音。小さな子にはゆっくりと、丁寧に話す文化は世界共通なのだろう。私はせいいっぱいの睨みを利かせて、警官を追い払おうとした。

「私は十二歳。三歳児じゃないの。もう、補助輪付きの自転車だって乗っていないし、後四年経ったら、ドラッグ、酒、煙草、男に溺れる予定よ」

流暢な日本語で捲し立てた。

「は？　何、言っているの？　お嬢ちゃん？　宇宙と交信しているのかい？　ピー、ピー」

気軽に私の鼻を摘んでピーともう一度、言ってから警官は器用に眉毛を動かして見せた。私はそれで見事、渇いた笑いを浮かべた。

私が宇宙人と話しているのよとうんざりした顔で唾を道端に吐いた。風邪気味で口の中に鼻水が侵入していたのだ。まだ、ぬるぬるする。嫌な気分。

警官の袖をぎゅっと掴む私よりも背の高い日本の中学校の制服、セーラー服を着た少女が日本人離れした英語で話しかける。

「すいません、ナイスガイなポリス。うちの妹がお世話になっていて」

「駄目じゃないか。こんな小さい子を一人しちゃ。最近、児童売春を目的とした誘拐事件が多発しているんだ。目を離しちゃ駄目だよ」

そうその少女に注意を促してから警官はパトカーに乗って颯爽と走り去っていった。

後に残されたのは謎の少女と、その少女の後ろでぴょんぴょん跳ね回る女児、そしてアイスキャンディーを舐めるのに忙しい私だ。

「ねぇ、姉、こいつ知らないよ」

思い出したように女児は言った。

「うるさいですよ、妹。言葉遣いは丁寧にって言ったでしょ？　お馬鹿さん」

「痛い。馬鹿」

そう二人は言い合って無言のままに睨み合う。少女は女児の頭を

撫でる振りをして、殴った。殴られた箇所を押さえながら、もう一方の手で姉のスカートを引っ張る。
突如、始まった姉妹喧嘩に一瞬、観戦の姿勢を示していたが、周囲の人々が一瞥をくれてるのに気が付いた。
「喧嘩は止めましょう」
しばらく、姉妹戦争観戦の後、姉の方が霜澤千冬、妹の方が霜澤不吹とそれぞれ自己紹介してくれた。私達は公園へと移動しつつ、途中、スーパーマーケットで大きな板チョコを一枚購入した。それを仲良く、三人で分けていたのだが、不吹が眠いと愚図りだして今は千冬の膝の上で寝ている。
私も公園にいる子ども達の楽しげな声を子守歌に眠りたくなった。目が重くて、何度も瞼を擦る。
「学校、まだ行っているはずの時間だよね。午後一時って」板チョコを囓って私に手渡した。「私は熱を出して休んでいたんだけど、妹が私もお姉ちゃんと一緒が良いって休んでね。それなら良いんだけど急にお外に行きたいって言い出して」
「私は……。嫌になったのよ。無理矢理、平等っていう檻に入れられて勉強するのがさ」
教室に入ると親しみ慣れた日本語は聞こえずに世界共通語と世界から注目されている英語が私の耳にばかり入ってきた。単語が飛び交う度に私は苛立った。単語の意味は辛うじて解るが、心がそれを理解するのを拒絶する。単語の意味なんて関係なく、苛々するから、同級生がおはようと挨拶してくれても素直にはなれなかった。ただ、むすっとした顔で席に着く。みんなはまだ、席に着かず、会話に花を咲かせている。私はその世界には登場したくはなかった。私のいるべき世界は日本だ。その想いが募りに募っていつの間にか、ニューヨーク市を彷徨い歩いていた。だが、何処にも私の世界は無かった。
はぁ、と溜息を一つ吐く。板チョコを囓る。この甘さが全世界共通のように、アメリカも日本も何も変わらなければ住みやすいのに。

「壊せばいいでしょう」乱暴な言葉に私ははっとして、千冬の方へと視線を送る。私が見ているのを確認すると得意げに唇の片端を吊り上げた。「日本と違ってこれが幅を利かせているんだし」
千冬が服の中から取りだしたのはリボルバー拳銃だった。その銀色のボディーが死に神に見えた。見えない弾丸を脳天に撃ち込まれたように眠気は散っていった。実物を初めて見る。見た感じはとても、人をこれで殺せるとは思えない。玩具のようだ。だから、冷静に私は言えた。
「危ないよ、こんなの」
「護身用よ」
そう日本語ではっきりと言った千冬と、その千冬の膝でぐっすり眠る不吹との出逢いがアメリカ生活成功を導いてくれた。日本という意識世界を共有する仲間はこの後、人種、宗教の垣根無しに増えていった。それは後悔していない。
大学を日本の大学にしようと決めた時、霜澤姉妹との連絡方法を密にしなかった自分に後悔している。そうすれば、少なくとも四十年間という時間を彼女たちと共有できたはずだ。
もう、思い出に浸るのを止めなければ。夫が思湖、子ども達も出掛ける支度が終わったから新しい家族、霜澤秋ちゃんを迎えに行くぞとわざとらしく張り切る声が聞こえる。千冬の残した娘はかつての千冬のように私を受け入れてくれるだろうかと胸がどきどきしていた。

＞二＜

少年は母と父の表情を見て、これから行く場所が家族にとって大きなターニングポイントを迎えるだろう事を察した。踵を鳴らしていつものように軽快なリズムを取る。取っている本人は全く、それには意識を注意せず、自分と姉、荻須あざみの真ん中にある特等席をいぶかしげに眺める。特等席はよく、車のＣＭなんかで赤ちゃん

がにこにこ、ぱちりんこ笑顔で座っている席に似ていた。だが、名前が出てこなくて唸る。

その間を縫うようにあざみの膝の上にあるネットブックパソコンからニュースが聞こえてくる。

「昨夜、行方不明になっていたアリアちゃん　八歳が翼町の側溝に引っ掛かっている所を近所に住む主婦が発見し、通報致しました。警察では遺体の損傷が著しく激しく、悪戯された形跡のない事から殺人快楽者による犯行という方向で捜査を進めています」

「翼町？　大丈夫かしら。うちの生徒さん達は。心配だわ、二学期には全員の顔が拝めるかしら」

「あざみお姉さん。ピンク色のワンピで教師みたいな事言っても恰好がつかないですよ」

「ん、荻須葉楼　十七歳の高校二年生君」仕事（高校教師、しかも葉楼の担任）の用件絡みの電話を取った父、荻須梅之助みたく渋い声でこちらを振り向く。あざみは外跳ねした髪を弄びながら、「日頃のお姉ちゃんの広大な愛に対する感謝の言葉と認めたよ。ならば、それは愛を持って返礼されなければならない。その身を持って」

あざみが女性とは思えない男性的な思い切った口の開き方で両手を挙げている。口内にある金歯を嫌々ながらも視線に入ってしまい、葉楼はもう、この人、三十なのにこんな獰猛で良いんですかねぇと苦笑いした。

三十代独身あざみは十歳以上年が離れた弟をどう虐めようか？虎視眈々と隙を窺うが、舌なめずりして余裕綽々な所をわざと童貞野郎に見せつける。

「止めなさい。ここはサバンナじゃないんだ。確かに車とは思えないくらい、走行音しないけど。さすが、日本製！　ってとこだけど。それにどうせ、勝つのはライオンの方に決まっているだろう？　ねぇ、母さんや」

前髪を後ろへと追いやった灰色の髪は微かに開いた窓から入り込んでくる風によって徐々に滅茶苦茶にされていく。それでもすっか

り、朝寝坊してしまいました髪になっているのも気にせずにサングラス越しから愛しい荻須思湖を見つめる。
思湖は車中、ずっと俯き加減で終始、無言だった。
「貴方？」
「何、愛しい思湖ちゃん」
「貴方、煙草臭い。昨夜、あれだけ言いましたよね。私には亡き親友　千冬の愛娘　あったんを良き育児環境ですくすく育てる使命があるんです」
そう力強く言う思湖の言葉には何やら、決意が漲っている。だが、葉楼の見解ではそれはもう、既に空回りしている。葉楼は特等席のシートに積んであるビニール袋の中身を覗いた。中には姉と母の提案で葉楼が無理矢理、コーディネートした普段着が入っていた。その普段着はノースリーブの子供用ドレスで、サンダーソニアが咲き乱れていて蝶が元気よく羽ばたいていた。これを眺める度につくづく、自分もこの両親の子どもなのだ、遺伝って怖いなと思い知らされる。
「僕も空回りですね、ちょっとないだろう。あ、これ、チャイルドシートか。六十歳夫妻、空回りすぎですよ」
そう呟く葉楼の頭にライオンの魔手が忍び寄った。
「お前、もう死んだ」
葉楼は姉ににゃーと猫声で答えてから、家族全員に一枚ずつ配られていた秋ちゃんの写真を覗き込んだ。そこには自分の世界には無かった憂い目の姫君がいた。
シルクのようにスベスベな肌。それは触ることの許されない無邪気さの楽園だ。だが、その楽園はかつて栄えたであろう陽を失っていた。楽園の象徴であろう青い瞳は枯れ果ててしまい、翳りのある風景と化している。それなのに信じがたい好意の吸引力を持っている。葉楼は吸い寄せられていく……。さらさらなお人形みたいに下へと伸びていく金髪、その黄金の美しさとは対を成すケチャップや、ゲロで汚れた無地のTシャツ。そのシャツが八歳の女の子の境遇を

語っていた。両親はただ、葉楼やあざみには両親から虐待を受けた霜澤秋ちゃんは、両親が自殺した為、うちで引き取ることになった。秋ちゃんの母親　千冬の遺書にも娘を宜しく頼む旨が書かれていたそうだ。隠し事無しという家訓を持つ荻須であったのでこれも例外無しに葉楼やあざみにも公開された。だが、葉楼はそれを拒絶した。

「ねぇ、あざみお姉さん。可愛がりましょうね、秋ちゃんの事。馬鹿な死んで当然の両親に愛されなかった分まで」

「童貞。愛っていうものを国宝みたいな完璧で尊いものだと想っているでしょ？」

「いけないですか？」

葉楼の頭にはその言葉しか浮かんでこなかった。だって、家族の愛は決して壊れないものなのだから。葉楼は仲睦まじい自分の両親の会話に耳を傾ける。

「くそっ、消臭剤スプレーをレザーパンツに散布しなかった。それで今日、煙草を吸っていたのがばれてしまったわけか。君の優秀な頭脳の勝利だ、愛しい思湖」

「まぁ、相変わらず渋い声で素直に自分の非を認める。そういうとこ、好きよ。でも、貴方、秋ちゃんに会う前にスプレー、しゅーしゅーね」

スプレーをレザーパンツに散布する真似をする思湖はまるで二十代のうら若き乙女のような輝かしき笑顔だった。その笑顔に応えるように梅之助は頷く。そこには見えない信頼関係がある。葉楼はこれこそが愛だと頷いた。その愛は当然、家族を包み込んでいる。家族はそのメンバーにとっては安らげるオアシスだ。例え、社会という砂漠がどんなに過酷であっても、決してオアシスは背を向けはしない。

「だから、童貞なのよ」

そう耳元で囁くあざみの声は自分の愛に関する知識の土台を揺らがせる。だが、それには追求せず、考えないようにした。それでも、耳元に吹いていた姉の微風は不安にさせる。

三十分もしないうちに、荻須家一行を乗せた自動車は駐車場へと停車する。
葉楼が自動車から降りて気付いたのは自宅のある住宅街とは違い、人の声が全く皆無だという事だった。まるで人を寄せ付けないような静けさに眉を潜めた。
「父さん、ここの近くに本当に古びた洋館があるですか？」
「ない」
「じゃあ、なんでこんな寂れた場所なんかに車を止めるんですか？」
葉楼は駐車場に敷かれていた砂利を踏んづけ弄んだ。
ライターを大袈裟に取りだし、煙草に火をつけようとした所を思湖に煙草を奪われた梅之助は頭を掻いて葉楼に応える。
「正確にいうとあったが正解だ」
その言葉のとおり、五分程、歩いた箇所には炭化した物体が無数に転がっていた。何が何だか区別がつかない物体はここであった悲惨な火事を備に物語っていた。荻須家は火の勢いで割れた硝子の破片を踏みしめた。同じ音を奏でながら、向こう側からスーツを着た男性が歩み寄ってくる。
「どうも、荻須さん。刑事課の尾査です」
梅之助の前まで来ると立ち止まって、深くお辞儀をした。その顔色は何処か、優れない。
「これはご丁寧に尾査さん。秋ちゃんの姿が見えないようですが？」
「それがですね、ちょっと目を離した隙に何処かに消えちゃいまして。しょうがないでしょう。あの子、突然、お腹すいたから何か買ってこいって言うんだから。僕なんて梃子でも動かないあの子のおかげで昨日からずっと徹夜なのに。なんだって言うのさ」
優男らしい弱々しい口調で駄目な台詞を吐いた。

＞三＜

職務遂行能力が限りなく疑わしい刑事さんの言い訳をそこそこに

受け流してから荻須家は秋ちゃんを探すべく、散り散りになった。葉楼は燃え滓と成り果てた屋敷の奥に生える森が視界に入って隠れるならば、森が最適だろうと考えた。

森の中に入ると無数の木陰ができており、体感温度が一度くらい下がった気がした。鳥や虫の声が穏やかに生命の歌を歌っている。なんて、涼しげなんだろう。

ある考えが胸に過ぎって葉楼は立ち止まった。自分のように森を良心的に解釈できるだろうか？　もし、自分が秋ちゃんだったとしたら、秋ちゃんは遊びにいっていた為、火事から逃れて無傷だ。だが、その心は焼け爛れている。じっと、火災の現場から動かなかったのは両親の無事を信じて待っていたに違いない。いいや、何を考えているだ。あの子は両親に虐待されていたんだ。いわば、木を無造作に伐採する人間みたいな害虫に違いないあの子の両親は。

「秋ちゃん出ておいで！　迎えに来たんだよ」

同じ言葉をもう、何遍も言った。だが、何遍言おうと諦める気にはなれなかった。不思議とこの先にいるような気がした。自分が秋ちゃんと同じ年頃に姉と大げんかをして姉とは顔を合わせるのが気まずくて、家出したことがあった。一晩中、人気のない森に隠れていた。一人で心細かった。まるで世界が自分一人のものになってしまった孤独感に襲われた。冬だったにも関わらず寒さは平気だった。それよりも別の冷気が自分を震わせていた。

だから、葉楼は叫ぶ。自分も時には孤独を味わった事がある、と。

「独りでいるのは寂しくないか？　おいでよ、甘えて良いんだよ。今日から君は僕の家族の一員なんだから」

「ねぇ、それは本当？」

そのビクついた声と一緒に毛布を抱え込んだ少女が大木の影からちょこんと現れた。右上と左上に小さなリボンのように結わえられた髪が喉を動かす度に微かに震えた。写真で見た時よりも少女はずっと白く透き通った肌をしている。一筋の光に照らされた埃の粒子までもが少女の美に影響されて一つの少女を守護する言霊のように

思える。それは少女の美に対して世界が賞賛する声の集合体なのかもしれない。
見つめられているのに気が付いた少女、秋は恥ずかしそうに口元を毛布に覆った。その仕草で自分はなんて可哀相な事をしたのだろうと赤面した葉楼はそれを帳消しにすべく何事もなく会話を進める。
「うん、本当だよ」
「ねぇ、ねぇ、秋がパパに無視されちゃうような、ママに悪い子って叩かれちゃうような子でも家族の一員になれるの？」
毛布に口をくっつけたままの少女の声は聞き取り辛かったが、元の性質なのか、少女の声は何処か高く弾んでいた。
「そい」
自分が言おうとした事は流石に拙いと思った。パパとママはきっと、君の事を家族なんて思っちゃいない。自分には都合の悪いペットだったに違いない君の存在は。なんて、知らない方が良い。
ふいにいつも、笑顔で笑っている父や母、あざみの顔を葉楼は心に思い描いた。否定できない、家族を。
「ん？　ねぇ、なれるの？　目の下に格好いい傷のあるお兄ちゃん？　その傷、どうしたの、秋が縫ってあげようか。秋、ペンギンの縫いぐるみ、直すの得意だよ」
警戒心を完全に解いた秋は首疲れないのかな？　と思うほどに見上げて葉楼の反応を窺おうとする。青い眼は自分を可愛がってくれときらきらと輝いている。
「なれるよ、秋ちゃん」
秋の目が合うように葉楼はしゃがんだ。それに気を良くしたようで、秋は毛布の中から裁縫道具を取りだして葉楼へと近づけた。
「ねぇ、痛くないの、その傷。秋が直してあげるよ、これで」
その裁縫道具は何の変哲もない木箱でハートの絵が描かれている。とても、人間の肌を完全に修繕できるようなびっくりアイテムには見えない。少女の思いやりに溢れた自分を心配する言葉なのだろうと理解してお礼に頭を撫でてあげた。

「直せないんですよ。後が残ってしまうのは致し方ありません」
「嘘だよ、そんなの。秋、パパとママを直してあげる予定なんだよ」
「そうか、凄いね、秋ちゃん。そんな事ができるんだ。魔法使いさんもびっくりですね」
秋の力強い言葉はそれを可能にしてやるとでもいう意欲に富んでいたが、せっかくの初対面に秋の自分への印象を最悪にしたくなかった。できないとは言えない。
人は縫いぐるみや、衣服や、ハンカチと違う。血の通った生き物だ。

＞四＜

秋と手を繋いで葉楼が家族との集合場所に決めていた駐車場まで行く道中、風に乗ってくる秋の汗臭い体臭に気が付いた。さっそく、帰ってすぐに秋を風呂に入れさせようとした。
秋の両脇を抱え上げる。そのまま、雨漏りしている洗面所へと移動する。秋はどうして、抱え上げられているのか、解らない様子でしきりに首を傾げる。だが、首を傾げる事自体が面白くなったようで可愛らしい奇声をあげて葉楼に甘える。
「さて、秋ちゃん。綺麗にしようね。君はお姫様なんだから」
「うん、綺麗、綺麗になるよ」
足をバタバタと揺らして喜びを表現する。目はしきりに葉楼の顎を見つめている。その幼い仕草を目の当たりにして、あざみはしたり顔をする。さっそく、葉楼の服の袖を引っ張って突然な葉楼と秋の信頼関係に口を挟む。
「これから遊園地にでも行くようなはしゃぎよう。アトラクションは何かな？　お兄ちゃんとお風呂でいちゃいちゃ？　それともお兄ちゃんとお風呂できゃぴきゃぴ？」
「父さんがよく言ってるじゃないですか。常に身の回りを清潔にしておく事が心の安息に繋がるんだって。それを僕は実行するんです。

そんな茶化さないで下さいよ」
「至って真面目にその子の反応を見たら、西傘のお嬢さんに申し訳ないって思わないのかな？」
あざみの言葉を受けて、葉楼は秋の幼い顔を覗き込む。青い眼はこれからの生活に対するわくわく感で輝いている。その秋と西傘厘と何の因果関係があるのだろうか？　とあざみの嫌そうに眉根を潜めた顔を一瞥する。
秋は急にお人形のように身体を動かすのを止めてただ、葉楼の瞳を見つめようとするがその必死さが怖くて葉楼は何度もそれを避けた。
「西傘っていう雌豚はどんな豚なの？　あざみお姉ちゃん」
幼い舌足らずの声は耳を疑うような汚い、どぎつい言葉をさらりと吐いた。
「女の恐ろしさを知らない童貞葉楼様のお彼女でございます、姫」
恭しい口調で言うあざみに葉楼は声を出さず、盗み聞きしていたんですかと口を開いた。勿論、あざみはそれを華麗にスルーした。
「あざみお姉ちゃん、偉い、偉い」秋はあざみの髪を撫でてあげる。優越感に浮かれた表情さえも無垢な愛らしさに満ちていた。その表情でさらりと嘘を吐く。「葉ちゃんは、秋は葉ちゃんのお姫様なんだって。豚さんよりもランク上だね」
「こら！　秋ちゃん、豚さんって人の事を言っちゃいけないんです」
「なんで？　豚さんのお肉は美味しいよ。ぶーぶーぶひん！」
けらけらと笑う秋には全く反省の色はなかった。このくらいの幼い女の子は自分優先主義なんだと葉楼は自分に言い聞かせて洗面所の扉を開く。
ぽつん、ぽつんと洗面台へと落ちていく水の音と、秋の衣服を剥ぐ音が混ざり合って一瞬の緊張感を生む。その緊張感に毒されて、葉楼は秋の黄ばんだパンツを握り締めながら、生唾を飲む。自分に言い聞かせる。この年代くらいの少女が父親とお風呂に入るなんて有り得るシチュエーションだ。

きめ細やかな白い肌を目で追っていくとそこには現実があった。アニメや漫画では括れがはっきりとした少女が半ば、記号的に出てくる。秋の身体には括れがなく、かといって子どもの体型にありがちなお腹が出ているわけでもない。貧相という言葉も、華奢という言葉も当てはまる体型だ。そっと、その肌に触れると信じられないくらいほっとした温かみを感じる。あ、これが温もりか。

秋は寂しそうに胸板にしがみつく。しがみつく瞬間に葉楼が目にしていたのは薄黒さと淡いピンクの入り交じった何とも不可思議な色合いの乳首だった。

触れてみたい！　心からの叫びが生じた。それと同時にその考えに冷たい戦慄を覚えた。「ママと小さい頃にお風呂に入ったきりで、いつもひとりぼっち」

「寂しかった？」

そう聞きながら、葉楼はお風呂の扉を開けた。タイル張りの部屋は時間さえも息絶えているように思えた。だから、その言葉は口から生じた。もう、触れてみたいという欲望は消えていた。

「うん、お風呂は広いし、声が響くんだもん」

確かにお風呂場へと歩み寄った秋の声は響いていた。石鹸やシャンプー、リンスは決して秋のママの代わりに愛情を注いでくれはしない。きょろ、きょろと不安げに見慣れない他人の家の風呂場を眺めている。急にタイルにお尻をくっつけるとそのまま、泣き叫んだ。

「ママ！　ママ！　逢いたいよ。秋、独りは嫌だよ。秋を置いていかないでよ！」

解っていたんだこの子は決して、自分ではママやパパを直せないって事を。それでもその存在を欲し続ける。自分にしてあげられる事はないか！　ないか！　そんな苦悩の言葉の羅列が幼い秋の身体を目の当たりにして卑猥な感情を持っていたはずの心にどっと押し寄せる。

気が付いたら、葉楼は秋をぎゅっと、抱きしめて頬と頬を擦り寄せていた。秋の頬から涙の熱が葉楼の頬へと伝う。その熱は八歳の

霜澤秋の象徴だ。だから、葉楼は自分を責めた。何故、触りたいなんて考えたのだろう。上歯と下歯を強く噛み合わせる。
「涙を拭いて。僕と君は家族だって言ったでしょう。僕のお姫様」
秋はその言葉を聞くと安心して、葉楼の両肩をいっそう、強く握り締めた。その圧力が秋の良心だった。

＞五＜

「あわあわ。あわ光線！」
秋はお風呂場での泡遊びでは飽きたらず、葉楼の静止を振り切って風呂場からそんな叫びと共に飛び出した。秋に付着した泡達はとても、気の良い奴らだった。少女の胸部や陰部を隠してくれたのだ。それでも葉楼は教育本を出版している母、思湖に見つかったら怒られると考え、秋の後をすぐ追った。
「こら、待ちなさい。すっぽんぽんだと風邪を引くぞ」
秋の腕を掴んで、持ち上げる。自分の胸部に付着していた泡を葉楼の唇に擦り付けて抵抗するが、指一本さえも力が緩まない。
「うわ、離してよ。まだ、みんなにあわ、あわしてない！」
半ば、諦め半分に秋が叫んでいた所にあざみが騒ぎを耳にして、呆れた顔で姿を見せた。あざみは舌打ちすると、葉楼に詰め寄った。
「おい、おい、象さん」
「あ、あざみお姉さん。秋を叱って下さい、廊下をこんな泡の足跡だらけにして」
その言葉を無視して、二人の間をそそくさと通り過ぎる。急いで戻ってきたあざみの手には青色の湯桶が握り締められていた。そっと、情けを掛けるようにあざみが葉楼にその湯桶を差し出す。
妙な空気を察知して、驚いた表情を浮かべて股間へと注目する。葉楼は我ながら立派だという感想は持てずに恥ずかしそうにあざみを見つめた。
あざみは葉楼の耳元に囁いた。

「これ、装備しろ。守備力が二もアップするんだぞ」
素直にうん、と頷き、秋が葉楼の股間に興味を持ちだして触れようとしたのを見事、湯桶で払いのけた。そして、その湯桶を股間へと装着する。
ふぅと安堵の息を吐いたのを見計らったように、玄関の扉が開いた。涼しい風が外界より侵入してきた。その風に敏感に反応して、秋はくしゃみをする。葉楼はまだ、全裸の秋を気遣って、いっそう秋の身体をぎゅっと、自分の胸板へと押しつけた。羽毛のように手触りの良さそうな金髪が秋の存在を知らしめていたし、脇に当たる息が生暖かい。
その温もりを帳消しにするように、葉楼の視線の先には一人の少女が勢いよく、玄関へと雪崩れ込んできた。
「こんにちは！　荻須家のみんな。葉ちゃんの婚約者　厘ちゃん登場。なんちゃって、なんちゃって！」
「こんにちは、厘ちゃん」と軽快なあざみの声。葉楼は思った、見捨てましたね！　数ある弟軽視イベントの中でも最悪の部類ですよ、と。「ぶー」と秋は突然の闖入者に豚さんの泣き声で応じる。葉楼は思った、可愛いけどそんな場合ではない。でも、可愛い、と。「やぁ、厘」
と二人の声に続いて、葉楼が玄関先にいる西傘厘に爽やかな笑顔を見せる。気持ち、白い歯を覗かせてみせる。
ぽかーんと、秋と葉楼を交互に指さす。誰にでもその仕草の意味は語らずとも解る。男子高校生が年端もいかない子を抱いている図。あれれ？
「ちょっと待って下さい。えーと」と恐ろしく低い声で言い、ジーパンのポケットから携帯電話を取りだした。とんでもなく、正確な指運びで番号を押していく。俯く姿には普段のほんわかした羊さんオーラがなく、獰猛な狼さんオーラが漂っていた。数秒も間もなく、耳に掛かった髪を掻き上げてから、携帯電話を耳に当てた。「もしもし、刑事さんですか。知り合いが金髪の可愛い女児を襲っていま

す。リピート　アフター　ミー。もしもし、刑事さんですか、知り――」

「通報は勘弁して」

弱々しい葉楼の声を遮るようにあざみの胸の谷間に居座っている携帯電話から軽快な音楽が流れてきた。それはよく、放課後に放送室から流されるG線上のアリア（作曲者、バッハ）だった。その緩やかな曲調は葉楼の終わった感をいっそう、フォルテした。

＞六＜

あざみが携帯電話で厘に説明すると、葉ちゃんはお馬さんがおひとやかな子なのに落馬して器用にも柵に顔を打ち付けちゃう間抜けだものねと普段と変わらないのんびりした口調で話した。

葉楼は目の下にある傷跡をなぞった。

あざみと思湖の二人は秋を歓迎すべく、腕によりを掛けて豪華な料理というよりも子どもの好きそうな料理を調理していく。今はハンバーグの匂いが部屋中に充満している。二人が奮闘しているのを余所に手持ちぶさた葉楼、秋、梅之助は神経衰弱に興じていた。今は梅之助が引く番にあたる。先程から葉楼の腹部に顔を埋めてだらしなく、椅子と椅子をくっつけて自分の椅子に秋は両足を投げ出していた。両手はしっかりと葉楼のTシャツを握っている。それだけならば、慣れない環境下ではしゃいだから疲れたのだろうとしばらく、放っておくのだが、秋は奇妙にも鼻息を荒くしていた。

「どうしたの？　具合悪いんですか？」

「ううん。葉ちゃんの匂い嗅いでるの。お肉の嫌な匂いじゃなくて、お花の香りがするんだもん」

可愛い顔をこちらへと見せずに秋曰く、素敵な香りを葉楼から摂取し続ける。不思議に思った葉楼はくんくんと空気を嗅いでみた。別段、嫌な匂いはしない。首を傾げようとしたが、一つの答えが閃いた。迂闊としか言いようがない。秋の両親は火事で焼け死んだん

だ。そんな境遇にいる子の近くで肉のゆっくりと焼ける音や、上手そうな動物性の油の匂いなんか嫌悪すべきものだろう。
梅之助は息子が言わんとする事を察して、先に言った。
「今日は肉って気分じゃないな。私は年寄りだから、血をさらさらにしておかないと。腸だって若者と違って元気じゃない。但し、今でも私が外見的に衰えずいるのは何故、だと思う？　秋ちゃん」
「しぶといから？」
「ノン。ノン」今もって同じ体勢である秋には見えないと知っていながらも、梅之助はお茶目に片眼を閉じたまま、人差し指を振る。
「私はいつも、朝食にスペシャルな料理を口にしてるからだ。それを秋ちゃんに喰わせてあげよう」
秋の返事を待たずに逃げるようにして、梅之助は厘と思湖のいる台所へと駆けていった。おそらくは思湖と厘に料理の変更を要求しにいったのだろう。
それからまもなくして、換気扇の力のおかげでお肉の匂いがしなくなった台所で秋はサラダとヨーグルトを元気よく、頬張っていた。それに気をよくした思湖は秋に自分の分のヨーグルトまで食べさせた。
「今日のご飯はこれでおしまい。美味しかった」
空気でお腹を膨らませて、秋は嬉しそうに葉楼に耳打ちした。よく食べたなぁと感慨を持って、殻の皿を摘み上げた。サラダのドレッシングすらも残さないのは感心できるが、そのドレッシングを吸い上げる為に舌をしきりに動かしていた姿は感心できなかった。
秋のお腹に触れながら、葉楼は秋の言葉を訂正する。
「え？　秋ちゃん。これ、昼ご飯だから後、夕ご飯がありますよ」
「そんなの可笑しいよ。一食だよ、普通は」
何、馬鹿な事を言っているのと言う代わりに秋は嬉々とした大笑いをした。葉楼はその大笑いに賛同できない。ただ、自分の真正面に座る梅之助に意見を乞いたいと強い目線を送る。梅之助は頷くとスプーンを置いて廊下へと出て行った。秋を自分の膝の上ではなく、

しっかりと隣の席に座らせる。
秋がむっとして、葉楼の背中を睨みつける。当然、葉楼には背中に目がある訳ではないので女の子の小さな願いには元来、無頓着である性質も手伝って秋はお行儀良く、座っていられるだろうと判断した。
葉楼は廊下に出る際に甲斐甲斐しく、小さな姫様を世話をする思湖と厘の声を聞いた。
「ここでは沢山、食べれますから遠慮無く食べなさい、秋」と弾んだ声の思湖。
「秋ちゃん、これも食べて？　私、お腹いっぱいなんだ。それにダイエット中だし」と善良な葉楼の彼女、厘。
廊下に出て、梅之助の後を追って書斎へと入る。書斎には天井に着くほどの本で連なったタワーが幾つも崩れずに存在感を見せていた。さっそく、葉楼は書斎の椅子に座り、煙草を取ろうとしかけた梅之助に疑問をぶつける。
「どういう事ですか？　あの子、家は貧乏ではないですよね。食事がままならない程に貧乏ではないはずです」
「確かにあの洋館を買い取れるほどにはお金があったようだ。だが、あの洋館はいわく付きで値段としては田舎のマンションの一室程度くらいの値が付けられていたんだよ。そのいわくって言うのが、殺人現場だって事。なんでも、不倫を発見した妻が夫と不倫相手を滅多刺しに刺し殺したそうだ。誰も人が殺された怨念渦巻く、場所で暮らしたくはない。けどね、霜澤家の人間は違うんだ」
「そんな憎々しげに。母さんの親友である霜澤千冬さんも否定したことに」
「気に入らなかったんだ千冬が。思湖はきっと、俺達を仲の良い友人だと今でも思っているだろう。葉楼、世の中で健康に生きたいなら、嘘を吐かなきゃならんよ。嫌いだと態度に表した瞬間、敵を一人作る事になる。本音で言えば、霜澤秋は虫が好かない。何処か、欲しいものは全部、手に入れなければならないって姿勢の母親　千

冬に似ている気がする」
「秋ちゃんはとても、良い子ですよ、父さん。例え、虐待されたからって人の本質を変えるなんて困難です。人の魂は決して犯されない聖域なんですよ」
「若いよ、葉楼。理想論だ。良いか、人間の本質は教育によって形成されるんだ。あの子には虐待という教育が身体の隅々まで行き渡っている。霜澤秋には何処か、残忍な影を感じるんだ。人間とは思えない強い意志を感じる……化け物じみた。いや、忘れてくれ。おかしな事を言った」
そう言うと梅之助は笑い飛ばそうとする。だが、笑い飛ばせずにしばらく、沈黙を自分に課した。当然、その沈黙に耐えられなくなり、葉楼は漠然とした不安を感じつつも、台所へと戻った。すぐに駆け寄ってきた秋の青い瞳には冷たい輝きが宿っていた。だが、それも一瞬間の事だった。爽やかな青い色へと変わっていた。
不安は別の形で的中した一週間ほど、秋は熱を出して寝込んでしまった。葉楼がすぐ近くで本を読んであげたり、手を握り締めてあげたり、汗ですっかり濡れてしまった身体を拭いてあげたり、と介抱した甲斐もあり、身体は健康体になった。同時に葉楼の後をくっついて歩くような甘えん坊になっていた。
朝起きると、秋がいつの間にか、葉楼の布団に潜り込んでくるなんていうのは序の口だった。

＞七＜

八月が終わりに近づき、蝉の鳴き声は生を紡ぐ逢瀬の時が残り間近だと断末魔の悲鳴を所狭しとあげていた。だが、その悲鳴も熱さで苛立っている秋の感情を逆撫でするだけだった。無理もない、秋は先程から葉楼の姿を探し回っていた。秋は初めて自分のものになるかもしれない存在にご執心なのだった。母からいつも、悪い子だと殴られる度に教訓を幾つか、与えられた。その中の一つが、自分

の本当に欲しいものは力づくで奪え。
普通の八歳児よりも頭の回転が速い秋は自分の愛らしさが最大の武器になると考えていた。
葉楼が階段から降りてくるのを発見すると、秋は子ども用のドレスの皺を直して、急いでストレートにしていた金髪が可笑しくないか、触って確認した。こっそりと探検した葉楼の部屋のベット下にあったエッチな漫画には今の秋と同じ年代の少女が登場するものばかりだった。その中でも金髪ストレートの少女が登場するエッチな漫画のページは折り目が付くほどに熟読の後が見受けられた。その情報分析の成果が今、明白になる。それだけで秋の心は柳のように嵐に吹かれて撓っていた。
トイレの扉を開けようとする葉楼の腕を掴んで、秋はできる限りの間抜けな顔で葉楼の黒い瞳を仰ぎ見た。動きを止めた葉楼が自分に興味を示すのはお見通しだった。
「秋ちゃん、今から僕、トイレに行くんだけど」
「嫌。葉ちゃんは秋とソファに一緒に座って、夏休みアニメスペシャルを見る」
本当は夏休みアニメスペシャルなんて見たくなかった。話の内容が悪い子だからだ。五人で宝物を探すなんて間違っているし、敵を殺さないなんてもっと、間違っている。
秋は母の言葉を心の中で反芻しながら、葉楼の表情を見た。予想したとおり、骨抜きにされただらしない笑顔だ。しかも、髪まで撫でてくれた。これで確実に今日も葉楼と過ごせると勝利のスキップをしようとした。
だが、それは思わぬ来訪者の声の為、実行には移されなかった。秋はその来訪者を憎悪の感情で射るように睨む。だが、それも長くは続かなかった。
「勝った……。秋のお肌は新鮮だし」
と秋は呟く。その呟いた言葉が失敗だと思い、すぐさま弁明するべく、葉楼を見上げた。

だが、葉楼の目は豚さんの方を向いていた。豚さんは白いワンピースを着ていたが、日に焼けた黒い肌には似合っていなかった。秋は白い生地に包まれた豊満な胸を葉楼の耳に入らないように鼻で静かに笑った。

「やほぉ、葉ちゃん、いる？」

豚さんは鈍足らしく、床をゆっくりと歩いてくる。

「どうしたの？　こんな朝早くから珍しいね」

葉楼が豚さんへと歩み寄ろうとするのを秋は自分の手を離さないで、その場から動かない戦略で止めた。

「実は葉ちゃんと一緒に映画を見ようと思ってね。これ、胸がきゅんとなるお話なんだ」

若い男女が楽しげに自転車に跨って、草原を走っているパッケージを葉楼に見える位置の掲げる。当然、秋は背伸びしてそこに書いてあるタイトルを読み取ろうとした。ＬＩＶＥ　ＭＯＯＮと書かれているのを漸く、確認できたが読めなかった。溜息を吐こうとした時、爪先がぐらついた。それに気付いた豚さんが既にパッケージは葉楼に渡して空いた手で秋を支えようとした。だが、その手を秋は身体を捻って避けた。

「ふーん、面白いのかな？　これ」

と呟いていた葉楼はさり気なく、秋の身体を自分の方へと寄せた。そのおかげで秋は床に倒れなかった。

「気に入るよ、きっと。さっさ」

階段をうるさい音を立てて上がって、葉楼を手招きした。

「秋も一緒に見るぶー姉ちゃん」

「駄目。八歳の女の子仕様じゃないんだ、ごめんね」

泣きそうな表情を浮かべた秋と、そんな子なんておいてこっちへ来なさい視線を送る厘を交互に見た後、葉楼は秋の両脇をいつものように持ち上げた。

「葉ちゃん、彼女が遊びに来ているんだよ。秋ちゃんだってもう、赤ちゃんじゃないんだから。たまには一人で過ごさせないと我が儘

な子になっちゃう」
「はい、解りました。秋ちゃんごめんね、しばらくは母さんと一緒にテレビ見ていてね。その前にトイレタイムで良いんですか？　洩れそう」
そう言うと秋の耳元に御免ねと囁いてから、秋をゆっくりと降ろした。
葉楼がトイレに行き、厘が葉楼の部屋へと行ったのを確認すると地団駄を踏んだ。
「邪魔すぎるよ、豚さん……」
唇に小指を突っ込んで舌で舐め回す。それは赤ちゃんのやるような愛らしい行動ではなかった。秋の目には怒りに燃えたぎる感情が宿っていた。そっと、指を離す……。その指にはべっとりと唾液が付着していた。唾液の匂いを嗅ぐと、パンケーキの匂いがした。

＞八＜

八月三十一日、葉楼は朝早くから秋と一緒に海沿いにある商店街に出掛けていた。秋の背には注文したランドセルが背負われていた。ぴかぴかのピンク色のランドセルで葉楼の腰を押しては喜んでいた。
「さて、と次は体操着を取りに行かなければならないのか。えーと、スポーツ専門店　藤巳布屋か」
「秋ちゃん、歩き疲れた」
唐突に秋はそう言って、商店街の道のど真ん中に座り込んだ。顔は退屈だとばかりに歪んでいる。早くもランドセルに飽きてしまったらしい。葉楼は溜息一つせず、お姫様を抱っこする。ランドセルの重さも加わり、いつもよりもしんどい。
自然と歩みはゆっくりとしたものになった。それが秋の機嫌を良くした。秋はお馬さん、お馬さんとしきりに言っていたが、いつの間にか、葉楼の頬に自分の頬をくっつけながら小さな寝息を立てている。

「本当に子どもだな」
そう、本当に子どもなのだ。その子どもに真っ当な教育を施さなかった親がいる。その事実を思い出しただけで葉楼の視線は鋭くなった。その視線の先には地元で一番評判が悪い定布中学校の男子生徒達がいた。ゲームセンターの入り口にあるキャッチャーマシンに寄り掛かって堂々と煙草を吸って仲間達とお喋りをしている。真っ当な教育を受けているのにこんな奴らもいると腹立たしくなった。秋が真っ当な教育を受けていれば、既に心優しい仲間に囲まれていただろう。幾ら、秋という少女の本質が勉強大好きな子だとしても、仲間を作るには他者が必要だった。
普段ではそんな事しないのに葉楼は彼らを説教しようと歩を進めようとした。その時、急に掌に圧力が加わった。びっくりして、葉楼は振り向いた。
「止めておいた方が良いよ。あれは他人でしょ、葉ちゃん」
掌を握る細い指先達を辿って行くとその持ち主である西傘厘に辿り着いた。
「随分と冷たいんだね」
「葉ちゃんは説教しようって目していないよ。まるで憎いって顔している。知ってる？　怒りと導きは同じ意味じゃないんだよ。怒りは一番、原始的な感情だから誰にでもすぐに解る」
厘に言われて葉楼は自分の過ちに気付いた。あの中学生の為じゃない！　自分の感情の中には今朝、葉楼の前で今日は御願いしますと言って頭をぺこりと下げた秋だけが映っていた。その普通の境遇を活かせないなら、秋にまわせ！
一呼吸、置いて落ち着いた声で言う。
「何でも解るんだね、僕の事」
「まぁ、ねん。つきあい始めて一年！　恋い焦がれて八年！　もう、葉ちゃんマニアだよ。私の事、好きでしょう？」
「ああ、好きだよ」
葉楼は相手の薄く塗ったリップクリームを眺めてそう嘯いた。も

う、一年も嘘を吐き続けているので葉楼の心は痛まなかった。それよりも、彼女である事が自然になっていた。
だが、時折、考えてしまうのだ。それでは本当の恋ってあるのだろうか？　今も考えている。秋の小さな口から涎が垂れて、Tシャツを汚された。だが、嫌な感じはしなかった。不思議な高揚感を感じた。もっと、汚してもいい。
葉楼の唇を厘の唇が塞いだ。生柔らかい感触が嫌いで避けていたが、不意を突かれた。腕で唇を拭おうと思ったが、秋のお尻を支えていたからそうはできなかった。
「どうしたの？」
「ああ、周りは僕らと同年代のカップルで溢れかえっているなと思いましてね」
事実、周りには高校生くらいのカップルが手を繋いだり、女の子が男の子の肩に顔をくっつけたりと自分達の世界を築いていた。それを年配の主婦達がひそひそとやぁねぇと囁いていた。天然パーマの主婦の鎖骨から白いブラの紐が顔を出していた。葉楼は思わず、顔を背けた。背けた時、秋の真ん丸と見開いた青い眼をまじまじと見てしまった。小さな唇が頬に一瞬、触れた。
「秋、寝てた？」
「ああ、寝てたよ、ぐっすりと」
「やほぉ、秋ちゃん？　これから葉ちゃんと何処に行くのかな」
葉楼のTシャツをタオル代わりにごしごしと唇を拭っていた秋にそう聞くが、知らんぷりをして今度は乾燥してカサカサになった涎を拭い始めた。口元が微かににやっとしているのを葉楼は横目でちらっと確認した。
「秋、お姉さんが何処に行くんですか？　って聞いてるよ」
秋を降ろして咎めるように見据えた。何故、そんな風に見られているのか、理解できないと嘯いている秋は当然のように小指を口の中に入れて、ぼけっとしている。
「教えない、秘密。今日は葉ちゃんとデートだもん」

しばらくして、秋は葉楼のジーパンを引っ張りながら答えた。その言葉は不平を余すとこなく、表していた。
「だ、そうだよ」
「残念。塾が早く終わったから、葉ちゃんと一日中、過ごそうって思ったのに」
そう言うと、葉楼にバイバイと手を振って走りだした。葉楼が同じようにしようとした時にはもう、既に人々の雑踏の中に溶け込んでしまっていた。
商店街には沢山、店がある。そんな常識も知らなかった秋は一軒の洋食屋のディスプレイを見つめる。そして、海老フライを指さした。
「これ、こんな所に置いておくと腐っちゃうよ？」
「大丈夫ですよ、それは本物、そっくりですけど。食べられない偽物さんですから」
「でも、秋、お腹空いた。食べたいもん」
「焼ける匂いを我慢できる？　食べられないでしょ」
「できない。でも、食べたいたら、食べたい。何か、食べたい」
「困ったな。野菜だけなら、なぁ」
「良いですよ、お客さん。野菜だけのメニュー。特別に作りましょう」
白髪のおばあさんが後ろから声を掛けてきた。自然と葉楼は深く、頭を下げていた。それを御願いしますという意図だと解釈したおばあさんは秋に愛想笑いして、扉を開いて手招きで中に入るように指示した。
そんなエピソードやデパートに寄ってチョコレートパフェ（二人前）を食べた事もあってか、四時間後の秋は朝よりも元気いっぱいになっていた。帰り道に野良猫や野良犬を見つけては、突然走りだして彼らににゃー、わんとしきりに挨拶するほど活発な子になっていた。
二十匹目の猫さんににゃーと挨拶するべく、駆け出す後ろ姿を感

慨深く、葉楼は眺めた。出逢って間もないのに両親を失った悲しみや、虐待の記憶を諸ともせずに秋は明日へと走りだしている。そう思うだけで何故か、目頭が熱くなった。もう、午後五時だというのに今日を惜しむように太陽は地上に今日の光を贈っている。葉楼はその贈り主に慰めてもらいたくて見上げた。多分、怖かったんだ……いつか、今日の太陽が沈むように、今日の月が沈むように、人は変わらずには居られない。そして、それは未定……。

「体操着、体操着。葉ちゃん、家に帰ったら着て良い？」

秋の弾んだ声が葉楼を現実へと引き戻した。その現実は尚も葉楼の望んだとおりだった。秋は自分で持つと言い張っていた紙袋から真新しい体操着を取りだしていた。

「そうだね、実際にサイズを確認した方が良いですね」

「着替えるの、手伝ってくれる？」

「嘘、エッチ」

二十匹目の猫さんがにゃーとこちらに向かって挨拶しているのに背を向けて、葉楼は秋の手を握り、山間部にある自分の家へと急いだ。

＞九＜

西傘厘は葉楼と秋と別れてから、友人の理枝と勝美を携帯電話でカラオケを楽しんだ。この三人で集まると時間が経つのを忘れてしまう。カラオケをお開きにした時点で携帯電話の液晶画面が示していた時刻は二十時三十五分だった。厘の家は代々、弁護士や医師を輩出している所謂、エリート家系だった。その為、門限も厳しく、午後七時が門限だった。その時点で怒られると決まっていたのだからと自分の中で言い訳しつつ、三十分迷った末に子どもと仲良くなる二十の方法を借りた。借りた時、店員がびっくりしてこれ、入荷以来、誰も借りたことないっすと語っていた。だが、そんなのどうでも良かった。

「ああ、レンタルビデオショップがこんなに遠いなんてなぁ。山間部に一件欲しいよね、全く」
嘆く割には厘の足取りは軽い。まるで気まぐれな猫のように軽かった。頭の中では猫的な打算計画が演算されていた。
今、汗ばんだ手に握り締めている子どもと仲良くなる二十の方法で学んで、秋ちゃんを攻略！　次にその秋ちゃんを使って葉ちゃんの心を今以上に鷲掴み！　そして、婚約へ。
思わず、真っ暗な道の色を吹き飛ばしてしまうような明るい声でイエス！　と叫んだ。叫んだ瞬間は恥ずかしくないのだが、徐々に羞恥心が芽生えてきた。
葉楼の家と同じく、厘の家も山間部にあり、徒歩で帰ると三十分も掛かる。だが、歩くのが好きな厘にとっては苦痛ではなく、いつも歩いて海沿いにある商店街や学校に通っていた。特に今日みたいな月が雲に完全に隠れている日に歩くのはとても清々しい。
ただ、聞こえるのは鈴虫の張りのある合唱だけだ。それを耳にしているといつも、期待してしまうのだ。現実には有り得ない不思議な出逢いに。
数分後、ついにその時が来たと内心、驚きのあまり、心臓が早鐘を打っていた。だが、車道に仁王立ちしているレインコートの小さな女の子を視界に捉えても冷静で居られた。
闇を照らす青く光る目は攻撃的で美しかった。その瞳とはちぐはぐなボサボサの茶髪は腰まで伸びていたが、それで美しさが損なわれる事はない。むしろ、野生の花のような美しさとして鑑賞できる。
女の子は厘に向かって唇を歪めた。まるで厘の存在を確認したと言うように。そして、ゆっくりと黄色い長靴を上げて、一歩踏み出した。それはニュースの映像の国会で見かけた事のある牛歩の歩みだ。
「どうしたの？　そっちは森だよ」
厘が言葉を言い終わったら止まるというのが予定調和であったかのように黄色い長靴は両足を揃えて止まった。明らかに挙動が変だ

と考えたが、見たところ、秋と同じくらいの年齢の子だ。一体、何ができるっていうんだ？

「駄目。小さな女の子がこんなとこにいたら、誘拐されて殺されちゃうよ。知ってる？　今月もアリアちゃんって女の子が水死体で発見されたんだよ」

近づいてきた秋に対して、女の子はくっくっくっ、とアニメキャラクターのような現実味の薄い甘い声で不気味に笑った。

「知ってるよ、誰よりもね……」一拍、間を置いて青い瞳は細くなる。「でも、お姉さん。私、この先で裁縫道具を忘れて来ちゃったんだ。取りに行きたいよ」

「明日にしなさい。ほら、お姉さんがお家に送ってあげるから」

背筋がぞっとしているのを感じたがまだ、この子が普通の子だと自分を騙したかった。

「嫌！　私、行く」

おかしいじゃないか、この声も作られたアニメキャラクターの声。昔、映画館に数人でアニメ映画を鑑賞しに行った際にその数人の中でアニメに詳しかった女の子が甘い子どもの大袈裟な声をロリ声と表現していた。まさにそれだ。

「しょうがないわね。行くよ」

何処か、秋ちゃんに似た寂しげな佇まいの女の子を厘は放って置けずに無言の女の子の手をやや、乱暴に引いて森の中へと分け入った。

遠くの方から救急車のサイレンの音が微かに響いてきた。同情を誘う悲しい音だ。

＞十＜

「お姉さん、こっち、こっち！　遅いよ」

そう言いながら、女の子は縦横無尽に森の木々の間を駆け抜けていく。嬉しかった。だって、後少しで手に入るのだから。そう少女

は自分の腕を眺めた。腕の肌が何カ所か、黄土色に染まっていた。その肌が壊死している。だからこそ、狩りが必要だった。

「こら、待ちなさいよ」

必死のぶーお姉さんの声が聞こえる度に女の子は満面の笑みを浮かべた。どうしても堪えきれない！　想像してごらんよ……。これから、アリアと同じ目に合うと夢にも思わずに殺人鬼の後をわざわざ、息を乱して、足をばたばた動かして、臭い口でぶーぶー呻きながら着いてきている。笑うなと自分に指図する方が酷だ！

「え？　洞窟。こんな場所があったんだ」

女の子は慎重に頷いた。まだ、アフレコは続いている。ここで手を抜いたら、監督（パパ、ママ）にどやされる。そうしたら、次の現場ではもっと頑張らないと褒めてもらえない。

女の子は急いで洞窟内へと入り、手作りの白いクローゼットの中に入り込んだ。そのクローゼットの中にはゲートボール用のスティックが一本だけ立て掛けてあった。すぐさま、女の子はそれを構えた。

クローゼットの作りが乱雑な為、開閉部の隙間から外の様子が少し覗ける。まだ、テーブルの上に乗っている蝋燭の明かりしか見えない。息を飲み込んだ。

恐る恐る歩を進める足音、途中……クシャミが聞こえた。お大事に……。

紺色のブレザーが見えた。

クローゼットの扉をスティックで振り開けて、そのまま、獲物の横腹をフルスイングした。溜まらず、獲物は膝を地に突っ伏して唸っている。その表情は脳に入ってこなかった。それを脳へと情報提供するよりも早く、獲物の背中を踏んづけ押さえたまま、頭を一撃、殴打した。悲鳴もあげずに簡単に獲物は気絶した。

しまったと女の子は脈を測った。指の付け根の下で飛び跳ねている血管を確認できて、ほっと胸を撫で下ろした。危うく、楽しみが減ってしまう処だったのだ。

女の子は厘の手首をロープで縛り上げながら、テーブルの上に置いてある針刺しに刺さった針を聞きつけた人間が気の狂うような歓声をあげて見つめた。何度も、しっかりと結ばれているか、確認の為にロープを引っ張った。

その後、女の子はレインコートを脱ぎ去り、放り投げた。レインコートはペンギンの縫いぐるみの視界を奪った。靴下と長靴以外は身に付けていない姿のまま、女の子は悠然と凸凹した石だらけの道を歩む。ハートの模様が印象的な裁縫道を開けて、裁ちばさみを取り出す。不要となった皮膚を幾分か、それではぎ取った。刃を進めていく度にじんじんとした痛みが女の子を襲った。それに耐え抜く事は自分の夢の最短距離へと繋がっていると自分を信じ込ませていた女の子は口を大きく開いて痛みを逃がそうとした。それでも痛みは白い肌の下から現れた血塗れの爛れた肌と共に真実だった。地面に落ちた白い肌は上から零れてきた滴に無言だった。

その作業は黙々と遂行され、約十分で完了した。裁縫道具は意志を持ったように女の子の手に馴染んでいた。作業は苦にならない、流れるが如く。

こちらを睨む視線に気付いた女の子は爛れた顔を歪ませる。女の子にとってはありがとうの意図を含んだ親愛の笑みだったのだが、どうやら、厘には受け入れられなかったようだ。掠れた声で、化け物と呟いた。すっかり戦意喪失した瞳はまるで意志のない人形のようだ。この視線で見られるのには耐えられなかった。

血を濯いだとしても凸凹で、茶色がかった黄土色の肌！　そう考えだけで発狂しそうだ。女の子は茶色い髪のカツラを号泣している厘の頬に投げつけた。泣きたいのはこっちの方なんだ。

女の子は先程、使った血と肌のこびり付いた裁ちばさみを手に持って、カチカチと音を鳴らした。厘は呻きながらも、腰を浮かせて両肘で地を蹴って悪魔から逃れようとした。それを嘲笑うように衣服を少しずつ、鋏でちょん切っていく。ゆっくりと、ゆっくりと焦らずに。

「さよなら、お姉さん。秋はママから言われてるの、本当に欲しいものは力づくで手に入れなさいって」
アニメ声で喋るのに疲れて、地の甲高い声を発した。
「どうしてこんな事するの？」
秋には叶えたい夢が沢山、あった。一つは大好きな家族とまた、一緒に暮らす。もう一つは秋を可愛がってくれる葉楼を手に入れる事。その為に邪魔だった、厘が。
秋は何も答えずに豊満な胸と胸の間の白い肌に切り込みを入れる。力なんて入れる必要はない。刃は開いただけでそのまま、推し進めれば、白い肌が楽に取れるんだから。
ほら、豚さんもぷるぷる、寒そうに震えている。
「ぶー、ぶー、ぶー。皮を剥ぐの大変だなぁ。でも、これでまた、肌が新鮮になる」
さっそく、厘の胸部からはぎ取った肌を自分の醜い肌の上から縫いつける。針が肌へと突き刺さる瞬間、軽い痛みを感じるが、身体に針が潜入している短い時間はわくわくした。ランドセルを初めて背負った高揚感に似ていると秋は思った。そして、再び針が外へと出る時は激しい痛みを感じた。殴られるよりも痛い？　と聞かれたら当然と答えてそいつを同じ目に合わせてやりたいと画策するくらいだ。
「嫌、止めて化け物」
しきりにそう、厘が言ったが、秋はその度にこう歌ってあげた。
「ぶーぶーぶー。豚さんがぶー」
やがてはそれに飽きてしまい、罵詈雑言を言われても、はいはいとあしらうだけになった。
「そんな落ち込まないで、秋のパパとママも同じだよ、厘ちゃんと」
秋は肌を全て剥ぎ取られて落ち込んでいる厘の為に鏡を持ってきてあげた。自分はなんて良い子なんだろう。「ほら」
鏡を持った全身血塗れの厘は固まった。目を大きく開き、唇を震わせる度に上唇と下唇の間からすっーと流れてきた血が口内へと落

ちた。少し可哀相だと秋は肩を震わせる厘を見てそう反省した。片方の肩から赤黒い骨がこんにちはしている。一方の肩と比べるとアンバランスだ。
強い風が吹いて、バスタオルの仕切りがひらひらと揺らめいた。その隙間から秋の母親と父親が顰め面をして座っていた。
「死体じゃない。ただの死体じゃない！　あんた、頭おかしいよ。あれ、もう死んでるよ」
全てが可笑しいと言うかのようにバスタオルの仕切りを指さした。
秋は首を捻った。この人は馬鹿なのか、と。
「秋、新鮮な肌はまだ、なのか？　これじゃあパチンコにも行けない。あそこはパパの仕事場だって知っているだろう？」
「もう、少し待っていてね、パパ。それでね、必ず、パチンコで勝ってね」
「あれ、喋ってないでしょ。正気になりなさい。今なら許してあげるよ」
猫なで声で化け物が秋に囁いた。鉄の匂いがぷんぷんとするそれを同じ人間として認めたくなかった。秋はいつもの金髪のカツラを手に取ると被った。それを被った秋は萩須家の加護下にある何処にでもいる小さく、愛嬌のある笑みを浮かべる八歳児だった。ただ、違うのはゲートボールのスティックが握り締められているだけだ。
些細な問題だ。
「秋。ママが教えてあげたでしょう、こいつをどうするかって」
「うん、ママが教えてくれた。ママの指輪を秋が盗んだ時にママ、秋をお仕置きしてくれた。腕が変な方向に曲がっちゃったけど、これくらいしないと大切なものは守れない。だから、秋はぶーを殺さないといけないんだね」
「良い子ね。でも、早く肌を持ってこないと秋をお仕置きすることになるよ、早くしなさい」
秋は人が壊れる時に臭う咽せるような匂いを知っていたから鼻を摘んでから、スティックを振りかざした。一度目の頭への打撃で厘

の泣き声は止まった。二度目からは機械的な作業だった。単調で心が震えない、何も感じない。ただ、自分の唯一の罪を思い出していた。

戻らないかもしれない。恐怖に秋は号泣した。

「ママ、パパ、葉ちゃん。秋ちゃんは悪い子じゃないもん！　秋はただ、お腹が空いてただけだもん」

その叫びを聞いている者は死者しかいないと秋は知っていた。それでもいやいやと首を振る。

第二章　心の在処

第二章　心の在処

＞一＜

私はまだ、訳あって死者でありながらも生者だけが住む世界に留まっている。私から金髪と肌を奪い、殺した霜澤秋なる少女に殺された当初は深い憎しみを抱いていた。だが、死者になってから同じ死者から聞いた少女の暮らしぶり、その破綻を知り、憎しみは薄れていった。何故だろう？　多分、もう永遠に続く時間を獲得したからなのかもしれない。友人のように詩的な考えをこの何日間で会得していた事に驚きを覚えた。

それは死んだから知り得た開放感だ。

私が眺めている秋はまだ、その開放感を知らずに生の苦しみに足掻いている。厘の死体を積んだ台車は私と洞窟内で出逢った時に引いていた台車だ。その台車に青いシートを被せている。

私はその健気な殺人鬼を応援してしまった。知ってしまったから、少女が自分の両親を死に追いやった原因を生み出したこと。それがお腹が空いてハンバーグを作ろうとして、ハンバーグの包装紙を火に落としてしまった。ただ、それだけの事象なのに。開け放っていた窓からの強風に燃えた包装紙は舞い上がり、秋の届かない箪笥の上に乗ってしまった。

それさえなければ……

「あなた、焦げてるじゃない？　大丈夫。今、救急車呼びに行ってあげるから」

と、突然洞窟内に現れた重度の火傷を負った霜澤秋に声を掛けた。

「肌、欲しい。肌、欲しい。まだ、家族と一緒に暮らしたいんだ。

頂戴、あなたの肌、あなたの裁縫道具で縫うんだから」
その意味は当時の私には理解できなかった。ただ、火傷の痛みから錯乱しているんだと考えて、大丈夫と宥めようと近寄った。
「苦しい、止めて」
それが生者としての私の最後の台詞になった。
「首、折れちゃったよ。でも、大丈夫だよね。ママの教えを守ったから良い子だよね」
その言葉を死者としての私が聞いてああ、この子は純粋に私から全てを奪ったんだと吐きそうになる程の怒りを感じた。
でも、今では応援している自分がいる。頑張れ、幸せになれ。早く、自分のしている事が悪い子のする事だって気付いて幸せになれ。
茶髪の髪の秋は誰もいない夜道を台車を引いて歩き続けて、山間部にある発電所の近くの側溝にバラバラに切り刻んだ厘だったパーツを台車を傾けて一気に流した。それが終わると洞窟に戻ってカツラを金髪に戻して、葉楼から贈られた子供用のドレスに着替えた。
秋がとことこと歩いていると、野犬が荒い息を弾ませて近寄ってきた。私はその野犬が口から涎を垂らしているのを見て、危険と判断した。
「こら、くそ犬。この子に噛み付こうっていうのなら、この幽霊のアリアさんが容赦しないよ。多分、体力無限で、頑張れば他人を呪い殺せそうな気がする。だから怖いわよ！」
その犬は私の方をチワワのような弱々しい覇気のない顔で見つめると回れ右をして視界から消えていった。ブルドッグなのに情けない犬だ。
こうして秋を守ってあげると私はドジだった友人　紗英を思い出すのだ。いつも、転ぶ紗英を助け起こして擦り剥いた膝に赤チンを塗ってあげた光景が昨日のようだ。
この子にもそんな無償の愛を与えてくれる存在がいてくれれば良い子になれるはずだ。
「秋！　秋！　あざみ姉さん。もう、自動車に乗っても良いですか

ら、捜索範囲を広げましょう」
「そうね、車は多分、三台ほどお釈迦になると思われるけど」
まだ、姿は見えないが微かに男性と女性の声が聞こえる。秋の名を呼んでいる事から秋を今、保護している荻須家の姉弟だろう。
こんなに必死に探してくれる人間は私には居なかった。周りの子どもも天涯孤独で、誰もが互いに傷跡を引っ掻き合っていた。そんな環境下しか知らなかった私は秋に嫉妬したが、疲れて座り込んでいる秋の髪を撫でてほら、迎えが来たと優しく耳元で囁いた。
全ては私にとって過ぎ去った出来事に過ぎなかった。それなのに景色がぼやけて、震えていた。
「葉ちゃん、あざみお姉ちゃん！」
そう叫び、懸命に走る秋の後ろ姿が微睡みの中で見る優しい夢に似ていた。アリア、私の愛しいアリアという女性の優しい声とミルクの匂いが鼻に付いた。それを知ろうとした途端、それらは空を駆け巡る蚊の揺らめきのように儚く去った。
私の意識をまた、生の世界に戻したのは葉楼が秋の頬を叩いた音だった。秋は叩かれたというのに微笑んでいた。
「なんで叩かれたか、解るか？」
葉楼は瞬き一つせずに、秋を見つめる。その瞳は血走っていたし、普段よりも見開かれていた。大抵のお子様なら、この目だけで自分のした事を悔いて泣き出すだろう。だが、秋は首を捻って興味深げに葉楼の瞳を見上げる。
「秋が悪い子だから？」
「違う。大切で、失いたくないからだよ」
そう言われた時、秋の頬が歪み……青い瞳が細くなり、口元が歪んだ。涙がすっと秋の肩に落ちた。その落ちた滴は秋の肩でしょんぼりしているように見える。それを合図に秋はびーびーと夜の深淵を引き裂くように甲高く泣いた。そして、しきりにごめんなさいと叫んだ。
だから、私は憎めないのか……。この子を守るのは私じゃないこ

の家族だろう。そろそろ、天国へ行くとしよう。天国行きの最終馬車は今から歩けば間に合うはずだ。
私は秋を囲む家族の姿を羨ましがりながらも、次の世界では自分もその温もりを得たいと強く願った。
さよなら、生の世界。また、戻るその日まで……。

＞二＜

秋は楽しい午後の一時を堪能していた。途中、トイレに用を足しに行った際にパンツが肌にガムテープのようにしつこく付着する感触を感じた。だが、パンツを脱ぎ捨てたらそれも感じなくなった。あれ？　不思議だ。そうしたというのにちゃんと可愛らしい灰色猫さんの絵柄パンツがちゃんと履いている。でも、いいやと首を振り、ソファに寝ころんだままの姿勢を保った。
秋が大人だと解釈している静かな黒い瞳は秋の視線に合わせたり、画板に挟んだ用紙を厳しく睨み付けている。だが、時々、にやりと微笑む。それが気になってそわそわしてきた。
「そろそろ、完成した？　秋ちゃん、可愛くなった？」
「あ、動いちゃ駄目です」
「でも、見たい！　見たい！」と秋はソファの前に座っているあざみの頭部をペンギンの縫いぐるみでぶん殴る。ふと、ペンギンの縫いぐるみを放り投げて唖然とした。「あれ？　これ、昨日の夜に葉ちゃんが秋を描いている時にも……あざみお姉ちゃんに同じようにペンギンの縫いぐるみで殴られて、どう痛いでしょう？　人の痛みの解る子になりなさいって。そうだよね、葉ちゃん。葉ちゃん？」
秋が葉楼から少し目を離しただけで目の前から消えていた。同じく、あざみも。立ち上がって探しに行こうと思った時だった。何処からか、葉楼の声が聞こえてくる。
「朝ですよ、秋ちゃん。ほら、起きなさい。布団なんて取っ払って。今日は……良い天気」

葉楼の声を認識した時、とんでもない場所移動が起こり、今秋はベッドですやすやと眠っている。下半身がすー、すーするのは気のせいだろう。
「うわ、危」
秋の足の上に何かが落ちてきた。重かった。当然、秋は足を器用にそこから脱出させてその落下物の上に足を乗っけた。これでまた、美術部で展示する葉楼の作品のモデルになるという甘い夢に浸れる。思わず、出てきた涎をじゅるりと口に戻す。
「葉楼、寝坊姫は起きたかな？」とあざみの爽やかな声と一緒に木製の扉が開く音がする。冷たい風が入ってきたので身体を温めようと足の下にある温い物体の温度を奪うようにお尻をくっつけた。「あんた、それ変態を越えて、変態王よ。常識人間に戻りなさい。貴方は優しいお兄ちゃんのはず」
「ふえぇ」と、とりあえず、いるはずの葉楼に挨拶をする秋。
「動けねぇです、あざみ姉さん」
「おい、おい、早く起きろ、とんでもない事になってるよ。こりゃ、西瓜を小指で穴開けるくらいの確率の出来事ね。おい、なるべく匂い嗅ぐな！」
「昨日の夕食の蜜柑香り」
目を擦りながら、起きると秋はすぐにその温い物体が何なのか、確認した。自分のお尻の下には葉楼の頭部があり、丁度、葉楼の口の位置に記憶はないが深夜に脱ぎ捨てたと思われる灰色猫さんの絵柄パンツがある。そのパンツを中心にして、孤島のような模様のお寝しょ画が出現していた。
「葉ちゃん、そこ居心地良い？」
咄嗟に出た言葉は秋の羞恥心にトドメを刺した。秋はあまりの恥ずかしさに掛け布団で自分の顔を覆った。その布団の中で赤面した秋と葉楼の瞳は出逢った。
「どうだろう？」
葉楼は秋に聞き返した。もう、知らない！　とふくれ面になり、

怒りが急に押し寄せてきた。その怒りに任せてバタ足で葉楼の腰を激しく蹴りつけた。謝ってほしいのにマイペースなんだから！　という叫びは声に出さずに心に閉まって置いた。それを言って嫌われたくなかった。

＞三＜

終始無言の食卓、せっかくの窓から注ぐ太陽の光がこれでは昼間、点灯した場合の蛍光灯の光程にしか役に立ってはいないではないか。溜息を吐くあざみは自分の膝に座っているふくれ面の秋を見下ろした。可愛らしいリボンのように結わえた金髪からは桜の花の香りが漂っている。そんな可愛らしさを自ら、ぶち壊すように天高く、フォークを上げると一気にレタスのど真ん中に刺した。水気が太陽光に照らされてキラキラと辺りに飛び散った。それを何度も無言で繰り返す。

「大丈夫ですよ、秋ちゃん。お寝しょなんて八歳という年齢を鑑みればまだ、許容範囲です」

相変わらず、仏のような穏やかな表情を浮かべて味噌汁を音もなく啜るその姿はまるでじじぃだ。その言葉の後、もう、身体が穴だらけだというのにレタス氏に秋のフォークが貫通した。秋は涙を溜め込んで、あざみに同情してくれよという目で見つめる。

勿論、可愛い妹の頼みを無下にするあざみではなかった。秋の両脇を持ち上げて、新聞を読んでいる梅之助に預けようとした。梅之助が真剣に熟読しているほどの記事は何なのか、と同じ教師として気になった。きっと、至極真っ当な教育に関する記事だろうとあたりを付けたが……違った。彼が読んでいたのは十歳の少女の水着グラビアだった。椰子の実を胸に抱き、目線は諸、カメラの方という少女のはにかんだ笑顔、恐るべし。

秋を梅之助に預けるのは変態さん、さぁ、思う存分視姦するが良いと放り込むようなものだ。変態王を産みし者……変態大王、流石

と軽く、血の宿命の凄まじさを心に刻み、紅茶の香りを嗅いでいる思湖の膝にそっと、秋を乗せた。秋は自分の小指をしゃぶるのに夢中だった。目の焦点が解らない秋の涙目を怒りの起爆剤にして、あざみは台所の隅に置いてある幼い頃の姉弟が互いの罵詈雑言の落書きしたのがまだ、残るクロゼットを勢いよく開いた。そこには三本のゲートボール用のスティックがあるはずだった。しかし、一本しかなかった。

「おい、誰か、ここにあったスティック知らない？　あんたが一番、怪しいのよ」

「どうして一番、僕が怪しいんですか？　僕は絵を描くだけが取り柄の優男ですよ。とても、じゃないですけど、あざみお姉さんみたいにぶんぶん、スティックを振り回せませんよ」

苦笑いをしながら、葉楼ははっきりと自分の無実を述べた。どうやら、葉楼で遊ぶ為用のスティックが消失したのを理解しているらしい。あざみは残ったスティックの調子を見るかのように何度か、振り回した。その鋭い音はあざみにとって快感だった。思わず、口にする。

「うん、気持ちいい」

「変態がいる」

両手をメガホンのように口に添えて、梅之助は鼻に皺を作った。口元は笑っている。

「うん、変態がいますね、父上」

同調するように葉楼が言った。そして、秋にこっちにおいでと手招きする。きょとんとする秋だったが、すぐにうん！　と元気よく返事して葉楼の膝へと鞍替えする。やっぱり、そこが落ち着くらしく、子犬の尻尾のように髪の毛を揺らしている。その髪の毛は葉楼のワイシャツに皺を作り出していた。皺が増えるほど、葉楼は御機嫌に紅茶を啜る。

「うん、変態がいるね、葉ちゃん」

そう小さな女は自分の大好きな男の胸中で妖艶な笑みを浮かべた。

唾液の付いた小指は葉楼の頬で円を描いていた。
今日、朝っぱらから学んだ事がある女の友情は恋情よりも遙かに格下だという事だ。これを頭にインストールしつつ、殻の食器を台所へと運んだ。勿論、裏切り者の小さな女には罰として冷たく、
「自分で運ぼうね、赤ずきんちゃん」
と言い放った。
よくここまで簡単に掌を返すように小さな女と女児の二つの顔を使いこなすと感慨深げに秋の様子を見守っていた。いや、言葉に間違えがある。強制的に見守るはめになったが正しい。葉楼が一緒の登校時には葉楼の手を片時も離さず、癖なのだろうが小指を口に突っ込んでは思案に暮れる。その思案の結果として、どんな些細な事でも大騒ぎする技を閃いたようだ。これが小さな女の意中のお兄たんには萌えとして捉えられたらしい。
「葉ちゃん！　葉ちゃん、温かいがないね。秋ちゃんはお汁粉が大好きだな。けど、お餅嫌い」
「よしよし、冬はお汁粉三昧ですね。可愛いですね、秋ちゃんは」
「好き嫌いはいけないなぁ、よし、冬はお餅三昧だ」
この調子でことごとく、小さな女の萌え効果を邪魔してあげたあざみだったが、それを察知した秋は葉楼がいなくなる小学校校内ではあざみの母性に訴えかける作戦に出た。
校舎内に入った瞬間、秋の手はあざみのスカートを掴んだ。幾ら、離そうとしても見上げて、首をちょっこんと傾げたお母さん、この玩具欲しいのポーズ（勝手にあざみが名付けた仕草）の前にあざみの抵抗力はがた落ちした。ブラックマンデーもびっくりの大暴落だ。あざみの心に住む自由の女神は母性の微笑みを宿すにはそう時間は掛からなかった。
秋は自分の所属する事になる二年三組の教室で小学校デビューを果たすため、始業式の間は職員室で保健の先生と終わるのを待っている手筈なのだが、あざみお姉ちゃんと一緒の方が良いと譲らなかった。この健気なエピソードがあざみの心を秋ちゃんラブに変えた。

「私の机、すべすべ、すべ。だよ、お姉ちゃん」
自己紹介を難なく、終了させた秋は自分の席に着くなり、そう言った。翼小学校では六年間、同じ机を使い続ける。保護者から机代を別途、徴収する為、親は子どもに机を大切にしなさいと言うし、子どももその言葉やこれから共に六年間を過ごすんだこの机と、という感慨もあり、机を大切にする。事実、朝、来たら机を濡れタオルで拭くのを日課にしている子どもさえいる。秋の隣にいる眼鏡を掛けた思乃家紀久を秋には見習ってほしいものだ。だが、それは望めないような光景が目の前にある。
真新しい机に鰹節削りのごとく、肌を擦りつける秋にそれは望めないだろう……。
「教室では先生と呼ぼう、霜澤さん」
あざみは思わず、柔らかな口調で秋に注意した。
「教官が甘い声で！　やべぇ、こりゃ、今日は雪降っちまうよ。携帯で父さんにチェーンをタイヤに巻いた方が良いよってメールしなきゃ」
樟田塔はそう騒いで携帯電話を机の引き出しから取り出すと、巧みな指の動きで文字を入力していく。しかも、携帯の画面すら見ずにあざみの方を見ていた。そして、一瞬、固まってから携帯電話を急いで引き出しにしまおうとした。だが、無理だった。あざみの腕が塔の腕を捕らえる。
「おい、樟田塔。その携帯電話は小学校に必要か？　四百文字以内で正確に私を納得できるような言い訳を考えてみせろ。そうしたら、見逃してやる」
その低くて、よく通る声が生徒達の私語を死滅させた。その声には威圧感があるなんていう事実は当の本人も解りきっている。あざみは意図的に家の時のずぼらな口調と、学校内での凛々しい声と使い分けていた。それは秋みたく、恋の為ではなく、近頃の生意気な餓鬼に嘗められないようにする一種の威嚇だ。
だが、それには動じず、生徒達は示し合わせたようにニタニタと

笑っている。この小さな大人達はよく理解しているのだ。教師が大声を出す以外に術がない事を、体罰なんて与えられない事を……。
「やべぇ、教官が珍しく、人に優しいから油断していたぜ。今日は掃除とクラブだけなんだろう？」
そう言って、塔はランドセルを背負うと、幼なじみの紀久の頬を抓った。これは彼らの挨拶のようなものだ。初めは理解できなかったが、教師としてこの子達を観察してそれが親愛の証だと知った。
「そうだけど、それがどうしたの？　あ、とっさんサボっちゃだめ」
いつものようにマイペースに鼻水の詰まったような声で話す紀久が話し終わった時には塔は教室から向け出していた。紀久の後ろの席からはああ、俺もサボろうかなと声が聞こえた。
「じゃあね、教官。また、二億年後に会いましょう」
という声が廊下に響いた。律儀な奴だ。
「あいつ、自分から二年連続無遅刻無欠席賞を逃しやがって」
生徒を黙らせるべく、あざみは迫力のある声と教卓を蹴り飛ばす策に出る。見事、教室はしんと静まりかえったのだが、秋の声が場違いに響く。
「ねぇ、ねぇ、それって何か意味あるの？　えーと」
「私は思乃家紀久。宜しくね、秋ちゃん。これ、お近づきの印。ちなみにその賞を取ると腕時計がもらえるんだよ」
元来、性格の良い紀久は秋の席の方へと身を乗り出して説明した。秋はそれを嬉しそうに聞きながらも、紀久から貰った青いあめ玉を蛍光灯の光に透かして見つめている。顔には自然と好奇心が芽生えていた。
この子はきっと、友達ができる感覚を今、知ったんだ。その証拠にあざみに見せびらかすように両手で青いあめ玉を包み込んでいる。
あざみはそっと、青いあめ玉を手にとって小さな妹の髪を撫でた。
「没収」
「あ、あざ、先生。それ、返して。飴、返して！」
教卓の天辺にも届かない背の秋がぴょんぴょん、飛び跳ねたとこ

ろであざみの手には届かない。眉間に皺を寄せて、愛玩動物のようなか弱い瞳であざみを秋は見つめる。そんな麒麟さんみたいな目をしても駄目だ、今のあざみは教師なのだ。教室で飲食なんて以ての外！

「鬼教官」

とぼそっと秋は言って、見開いた瞳から涙が零れた。慌てて、秋の手に青いあめ玉を握らせた。

「あれ？　泣かないで。この飴返すから。でも、学校内で食べちゃ駄目だよ」

「鬼教官を倒したわ、凄い秋ちゃん」

紀久の声を皮切りに周りの生徒達が口を開いた。

「快挙だな、これは」と丸刈りの男の子。

「これからは秋ちゃんを通して僕達、学生の人間らしく暮らす権利を主張して行きましょう、なぁ、みんな」と秀才の女学級委員長。

「流石、頭でっかち学級委員長！　言うことが打算的だ」と国語辞書を読んでいた女子。

もう、教室は動物園化していた。仕方がなく、あざみは数分の間、黙りを決め込んだ。この教室に集まった生徒諸君は基本的には真面目らしく、暫くすると話すのを止めてじっと、あざみを見つめてきた。無言のまま、一斉に目線がこちらへと集中すると心まで見透かされているようで怖かった。その恐怖を咳払いで吹き飛ばし、掃除の分担や、明日はクラスでの役職や、委員会を決めると生徒達に伝えた。

秋はそれを前日に葉楼に言われたとおり、サンダーソニアが表紙の学習ノートにメモしていた。あざみは必死に拙い文字で書かれているあしたは約食をきめるという文章を見て、頑張って心も体も大きくなるんだぞと無言のエールを贈った。本当は言葉に出したかったが、あざみは平等な教師だ。ここでは秋のお姉ちゃんでは居られない。それがもどかしい。

＞四＜

秋は疲れを感じて、自分の机に顎を乗っけてだらけていた。疲れているのに目は色んな光景を見ようとしきりに動いている。

誰もが名前の知らない子達ばかりだった。箒を剣に見立てて、雄叫びを上げながら互いの身体を容赦なく、斬り合う男の子の横で女の子数名が眼鏡を掛けた根暗そうな男子生徒の前に集まって、春休みの宿題の答え合わせをしていた。春休みの宿題は明日、提出らしいが新参者の秋には関係なかった。

それらを目が捉える度にこの疲れは哀しい疲れではなく、嬉しい疲れであると発見した。とても、新鮮だった。そんな意味があるなんて……。

「秋ちゃん、今日はどうするの？　クラブ、まだ入っていないよね？」

教室内で飾っているパンジーに水を与えていたのだから、如雨露を持っているのは不思議ではないが、パンの耳の入った袋を持っているのは不思議だ。

「鬼！　教官からは見学をするように命を受けているんだ。ところでそれ、なに？」

「鬼！　教官殿から教室で飼うペットのハムスターちゃんに餌をあげなさいって命を受けているのだ」

「紀久ちゃん、秋ちゃんもパン、あげていい？」

「勿論、行こう」

ハムスターはピンク色の指をしきりに動かしてパンを食べていた。秋はヒクヒクした髭を掴みたくて手を何度も伸ばしたが、その度にハムスターは篭の反対側へと逃げた。赤い目で秋を見つめて警戒していた。

「秋ちゃん！　駄目だよ、ゴールデンハムスターちゃんがお食事できないでしょ？　秋ちゃんだってお食事を邪魔されるの、嫌でしょ？」

「うん、パパがパチンコで負けちゃうと秋の作った目玉焼きの乗ったトーストを腹いせにぶん投げちゃうんだ。確かにそんときは哀しい」
秋はそっと、ハムスターの側に細かく刻んだパンの耳を置いた。まだ、警戒しているのか、パンの耳の匂いをしきりにハムスターは嗅いでいた。その仕草は床に零れたカップラーメンの汁に浸かるトーストの匂いを嗅ぐ秋に似ていた。お腹はぐぅと鳴っていた。久しぶりに秋の部屋にママが運んでくれた材料で調理した料理なだけに諦めがつかなかった。二十分くらい、玉子二つと、カップラーメン、パン一切れの前で腕を組んで考えたんだ。例え、できた料理が玉子の黄身が潰れてパンが黒こげになったものでも嬉しかった。
そうか、篭に閉じこめられたハムスターにとってのママは秋達なんだと秋はパンの耳を囓り続けるハムスターを観察しながら思った。
クラブを回るべく、秋達はグラウンドへと急ぐ。もう、既に多くのクラブは始まっている。今日は紀久のクラブを見学する事に二人の話し合いでそうなった。
しばらく、淡々と廊下を歩いていたが、急に紀久が秋の背中に向かって話しかけた。
「ねぇ、秋ちゃん、ご家族とは上手く居てるの？」
秋はどきっとした。どうなのだろう？　自分の家族は……。
白い糸が目立っている黒い手提げ袋を乱暴に振って歩く男の子の指先には血が集まっていた。紀久にどう、応えたら気まずくならずに済むだろうと考えている秋の横を通り過ぎる。手提げ袋が扇のような役割を果たして温かい風が秋の頬を撫でた。その風が秋の心をズタズタに引き裂いた。
秋ちゃんはママに手提げ袋を作ってもらったことない、ずるい。
「どうして、そんな事聞くの？」
その腹立たしさを余すところ無く、初めてのお友達にぶつけた。
「いや、ただ、友達の家族だから興味が湧いたんだ、好きな人の事は秋ちゃん、知りたいでしょう？」

こくんと秋はそれに頷いた。確かに葉楼の全てを知りたいと思っている。その感情を時にはもどかしくも愛おしく想う。今は愛おしい。早く、葉楼の顔を見たい。
「今は離れたとこに暮らして居るんだ。今は葉ちゃん家にいるんだ」
「葉ちゃん？　同い年？」
「ううん、違うよ。高校生の格好いい男。秋をお姫様だって言ってくれたんだ。これ、葉ちゃんがプレゼントしてくれたんだ。かわゆい、ゆい。ゆい！」
スカート部分を両手で摘んでその場でジャンプした。指から逃れようと蝶がひらひらと黒い空を飛んでいるように見える。
「へぇ、良いな。私、将来の夢がお嫁さんだから羨ましい。どんなに格好いい男なんだろう。クラブの帰りにちょっと、秋ちゃんの今、住んでいる家にお邪魔しても良い？」
「来てくれるの！　良いよ、大歓迎」
秋は嬉しさのあまり、紀久の肩を叩いた。初めは戸惑っていた紀久も秋のように馬鹿みたいに明るい笑顔を浮かべて、秋の肩を叩いた。通り行く人が二人を一瞥して、くすくす笑って通り過ぎていたが気にならなかった。ただ、世の中は秋ちゃんの為に回っていると本気で思っていた。
だが、その強気の姿勢も吹き飛ぶ光景が目の前にあった。ほんの数分しか経っていないのに柔なハートだ、ベビーちゃんと秋は弱々しく息を吐いた。
ジャージのズボンをはいて、白いTシャツの袖を脇まで捲し上げた鬼教官が指示を出していた。
「おい、おい、第一ゲートくらいボールを突破させて見せろ！　強く振りさえすれば良いっていうもんじゃない！」
その声は必死にボールを追いかけるサッカークラブの連中の雄叫びや、グラウンドまで聞こえてくる軽やかなリズムの合唱クラブの美声や、野球クラブがバットを振るう爽やか青春音を圧迫死させてしまった。毎度の激声なのだろう、言われたゲートボールクラブの

連中は揃ってはい！　と短く返事をした。
「そこ、チームでやっているんだ。戦術を考えろ」
そう言われたお提げ髪の女の子はスティックで一と数字の書かれたボールを突いて、ゴールポール近くにある二と数字の書かれたボールにぶつけた。そのボールは第三ゲート近くまで転がっていった。
それを成し遂げたお提げ髪の女の子は指を鳴らして得意げに坊主頭の男の子を見た。その男の子は芝生にある自分の持ち玉、二と書かれたボールを睨んでいた。
ゲートボールクラブの連中の顔には汗が滲んでいる。秋はこういう場面を適切に表す言葉を知っていた。一昨日、葉楼の書棚から借りてきたサッカー漫画　どすこい正ちゃん　全百巻の主人公が汗を掻きながら、これがスポ根だぜ！　と言って猛特訓の度にドＳな笑みを浮かべていた。
秋の頭にそのスポ根漫画の展開が走馬燈のように蘇る。主人公は七巻でライバルと初めて闘い、敗れる。その悔しさから日本一周をして、世界の広さを知り、新必殺技お腹でシュート（名前の通りの技）を取得。見事、ライバルに打ち勝つのだ（九十五巻での出来事。その間、主人公は何故か、ラーメン店で究極の塩ラーメンを調理したり、女子高生監禁事件をホモな警察官と一緒に究極の塩ラーメン片手に解決したりしていたのだ）。
そんな苦行は二の腕が贅肉だけで筋肉なんてない、腕立て零回の秋には無茶だった。多分、八巻の野犬戦で全滅するだろう。
「秋、用事思い出しちゃった。葉ちゃんのお食事を用意する素敵な使命が」
紀久があざみに話をつけに行った瞬間を見計らって忍び足を開始する。幸い、芝生は足音を消してくれる。自分の吐く息が妙に近い。やはり、匍匐前進は基本だ。
「いつから、葉楼の嫁になったのかな？　秋ちゃん」天から声が降ってきたが、諦めては駄目だと一日でどすこい正ちゃん　全百巻を読んだ経験が秋に教えてくれた。「今」と秋は呟く余裕さえある。

「逃がさないよ」
と目の前に大根足が立ちふさがった。脇の下をあざみに抱えられて、ゆっくりと市場に上がった魚のように視界が移り変わっていく。同情の眼差しを向けるゲートボールクラブの連中の隙間から、更衣室の方へと駆けていく紀久の姿が目に入った。秋の顔に白い紙が張り付いた。当然、払いのけた。
「良いのかな？　秋ちゃん。これはね、好きな人のお嫁さんになれる魔法の紙なんだよ」
「本当。葉ちゃんのお嫁さんになれる」
秋は手を伸ばしたが、結婚届と書かれた紙は秋の手から遠ざかった。
「ほう、うちの葉ちゃんが好みなんだ、秋ちゃん」
「うん！　秋に凄く優しいとこが好きなの。後、膝枕すると安らげる。良いでしょう」
今度はあざみの腰に右手を巻き付けて、左手で結婚届を掴もうとした。しかし、結婚届は鬼教官の嘲笑と共に遠ざかった。
「この魔法の紙が欲しいならば、条件がある。苦行に与えられるかな？」
「うん！　何でもする。だから約束守ってね。あ、そうか、ママがね、ママがね、約束は守ると見せかけて守らないのが世界の常識だって教えてもらったんだ」
「大丈夫だよ、ママ、間違えたんだよ」
「違う。ママは絶対だもん」
そう、ママは絶対だ。逆らえば、容赦なく殴られる。たまにもの凄く、秋に優しい時があって殴らない日もあった。そんな日は幸せだった……。
秋は自分がお嫁さんになったら、そんな幸せな日を永遠に過ごしたいと願った。一枚の白い紙をお国に出せば、それに近づける。
初めて、約束を守って欲しいと強く思いつつ、秋はゲートボールクラブの連中に混じってスティックを振った。だが、ボールにステ

ィックが全く当たらず、空を切るばかりだった。負けずに秋は何度か、挑戦したが飽きてスティックを投げ出す。そして、お腹を出したまま、仰向けに寝ころんだ。

＞五＜

葉楼は太陽が今日のお勤めを終えて、家に帰る時間にとても安らぎを感じている。それに加えて、秋の姿が離れてからも脳裏にずっと、クリアな映像として映っていた。喜怒哀楽と百面相する秋だったが、長い睫毛が優しい印象を接する人間に与え続けている。にやにやしている葉楼にクラスの男子はこう冷やかした。

「葉、女でもできたんか？」

「違いますよ。思い出していたんですよ。家族です、霜澤秋ちゃんっていう小学二年生の女の子をね」

「それ、何ていうか、知っとるか？　恋って言うんやで」

そんな些細な出来事が喉に引っ掛かった魚の骨みたく、葉楼の心を捕らえて放さない。現在の法律では恋愛する事は禁止されていない。だが、世間的には後ろ指を指される。いや、そもそも、今抱えるもどかしさが恋心なのだろうか？　ただ、自分は自分よりも弱くて脅威のない可愛らしい、無邪気な存在を撫でる事によって気分転換をしようとしているだけなのだろうか。

無言で坂を上がる。すれ違う秋と同年代の小学生の女児を目で追う。女児達の背にある不釣り合いの大きな赤いランドセルはどう考えても、世界を知らない無防備さが透けて見える。世界を知らないだって？　なら、自分はどんな世界を知っている？

一軒の赤い屋根が特徴的な民家を通り過ぎた。その民家からは味噌汁の甘い香りがした。その香りに誘われたのか、舌足らずな声で小学生らしい女の子がご飯、まだ、お腹空いちゃったと叫んでいた。すぐに母親が女の子に後、もうちょっとだからお母さんの前で今日の分の音読やっちゃいなぁと言う忙しない声が微かに聞こえた。

葉楼にはその光景がありありと想像できた。自分と姉もそういう風な体験をした事があるからだ。
だとするならば、自分は秋の世界を想像できない。体験した事がない、親に虐待されても尚、その存在を求める心理なんて。いや、想像したくない！
帰宅する道筋に、秋の通う翼小学校があるのだから迎えに行こうと今日の朝、決めていたが、姉からのメールで秋の友達が遊びに来ると知って洋菓子店に寄っていたら随分と遅くなってしまった。
秋はもう、帰ってしまったのではと危惧していたが、秋はちゃんといた。だが、面妖なことになっている。芝生に寝転がっている秋の両腕には結婚届けが握り締められていてとても幸せそうな寝顔をしている。
「あざみお姉さん、お疲れさんです。これは差し入れです」
途中で購入した缶コーヒーをあざみに手渡す。
「サンキュー。あんたが気が利くの、珍しい」
「ほら、あざみお姉さんが携帯で秋の友達が遊びに来るって連絡くれたじゃないですか。だから、今日は財布の紐を緩めてみましたよ」
「ところで、秋ちゃん、どうしたですか？」
その質問には眼鏡を掛けた如何にも真面目そうな女の子が答えてくれた。
「私は秋の友人の思乃家紀久です。秋は将来を賭けた戦争に駆り出されて、この有様です」
既にゲートボールクラブの連中はいなくて、紀久は普段着のチェック模様の可愛らしいスカートとワイシャツという出で立ちだ。荻須家の秋ちゃんは体操着とスパッツの間からおへそを覗かせているのにまだ、眠っている。ちょっと、膨らしたお腹に掌を当てた。口元を半開きでも可愛らしさは全く変わらない。
「よく解らないけど、頑張ったんだね」
耳元で囁くと、秋は急に目を開いて目を擦りながら葉楼を確認した。

「葉ちゃん、秋ちゃんと結婚して。これでお国に認められるんだもん」
「そうだね、立派なレディーになったら考えてあげても良いですよ。お姫様、幾ら夏でもこれからの時間帯は冷えますからおへそは隠しましょう」
そう言って、葉楼は秋の体操着の裾を直した。その間、秋は眠たげに顔を顰めていた。

＞六＜

「今日は楽しかった……。こんなに胸がドキドキしてる。楽しい」
秋は自分の為に用意されたお日様の香りがする掛け布団をくんくん嗅いでは、ベッドの近くにある椅子に座る葉楼に微笑んだ。勿論、葉楼も微笑み返してくれた。
「何が楽しかった？　ねぇ、秋ちゃん」
葉楼の鼻筋に小さなニキビがあると確認できるくらい顔を寄せてくる。恥ずかしくなって秋はまだ、真新しい枕に顔を埋めた。そして、ちらっと葉楼を見てという動作を何度も繰り返した。
「学校に行けて良かった。初めてあんなに秋と同じくらいの背の子どもが沢山、集まってるの見た、びっくりした」秋は右手の親指を曲げた。「あのね、あのね、葉ちゃん。ハムちゃん、とても可愛いよ」右手の人差し指を曲げた。「ゲートボールってボールに当てるの、凄く難しい」右手の中指を曲げた。「紀久ちゃんと動物のＤＶＤで観ながら、動物の声真似をしたのが面白かったし」右手の薬指を曲げた。「葉ちゃんが秋ちゃんと紀久ちゃんにホットケーキを作ってくれたのも」右手の小指を曲げた。「あざみお姉さんがお古のお洋服を持ってきてくれて秋ちゃんと紀久ちゃんにプレゼントしてくれたし」左手の小指を曲げた。「初めて、食べたマドレーヌも美味しかった。あれ、また食べたい」左手の薬指を曲げた。「葉パパが秋ちゃんと紀久ちゃんの宿題を観てくれたのも嬉しかった」左手

の中指を曲げた。「葉ママのご飯が美味しかった。朝に食べたサラダ、お昼に食べたジャガ芋の入ったパンお弁当も、夜の野菜カレーも美味しかったよ。葉ちゃん、カレー、口に付いてたんだよ。ずっと、笑っちゃった」左手の人差し指を曲げた。「葉ちゃんが髪の毛、拭いてくれた時、寒くないか？　って言われたのが嬉しかった」

と左手の親指を曲げた。そうして、困ってしまった。

「葉ちゃん、指の数が足りないよ。全然、足りないよ」

「大丈夫だよ。家族の指があるでしょう。差し当たっては僕の指がここに。さぁ、お姫様」

「んじゃあ、後一つだけね。もう、痛いのは嫌だ。葉ちゃんと居る、ずっと居たい。だって優しいんだもん」

真摯な瞳で秋は自分の為に用意された部屋を見つめた。真新しい勉強机は凹みや汚れすらも無く、光沢を放っている。一昨日、初めて貰ったお小遣いを握り締めて駄菓子屋で買った粉ジュースを今日の朝に一度目が醒めてしまい、作って飲んだものを少し零してしまったのに輝いていたのだ。粉ジュースの残骸が入っているはずのゴミ箱は空っぽになっていた。

「葉ママは何も言わなかった。秋の部屋を掃除してくれたの？　ねぇ、どうして」

「当たり前だからですよ。子どもの部屋を親がしょうがないわね、秋はだらしがないんだからってね」

「秋ちゃん、ちゃんと掃除したよ。でも、この部屋は掃除するのが大変そうだもん」

秋の昔、住んでいた屋敷の部屋には何もなかった。そう、何もなかった。それが当たり前だった。

これが当たり前の部屋と感慨を持って、次々と視線を巡らせた。まるで初めてそれらを目にしたように。

ティッシュの収まっている容れ物は青と白のラインが交互に走った可愛らしいデザインだ。ペン立てにあるシャーペンのノックにはコアラの人形がぶら下がっていた。しかも驚いた事にこれは家で使

う用のシャーペンなのだ。そのペン立ての中には他にも色鉛筆やらがまるで満員電車のように詰まっている。そんな感想を初めに秋は思ったのだが、満員電車を写真付きの本でしか見たことがない。唯一、秋が入る事を許された部屋にはいっぱいの書物と筆記用具が置いてあるだけだった。

いらない物だけしか置いてないから秋も入りたきゃ入りなさい。そんな言葉の意味が解った。どうして、その書物だけの部屋にゴミ袋が乱雑に転がっていて、玉子が腐ったような異臭がしていた理由も解った。

「秋？　どうしたんですか？　震えて」

ううん、違う。これは震えじゃない。嬉しいんだ。あいつらは死んで、秋だけが生き残って贅沢な暮らしをしているんだからざまぁねぇよな！　って喜びだ。

心配する葉楼の背後に突っ立て居る哀れな二体の死体を秋は睨んだ。重度の火傷を負った秋の父親と母親は黄ばんだ歯を惜しげもなく覗かせた卑しい笑いを浮かべた。秋を馬鹿にした笑いだった。

秋はその二人に向かって自分が着ているパジャマを見せびらかすようにＬＯＶＥ　ＡＮＧＥＬと刺繍されてあるロゴの真ん中の生地を摘んで誇張させた。

「ほら、秋ちゃんはこんなに愛されているんだもん。もう、従わないよ」

「従う？　あんたが勝手にやったんでしょ。勝手に都合の良い方に解釈してまさか、自分が愛されているなんて誇大妄想を広げてたのか？　ママの教え？　そんなのは初めからないよ、ただ、遊んでいただけ、何でもはい！　はい！　言うだもの貴女が」

秋の呟きに動ずに、秋の母親は愛しい我が子を撫でる。そして、睫毛のない焼けた白目を細めた。

肉が焼けた異臭が鼻に入り込む。秋はすぐに葉楼の胸に飛び込んで嗚咽した。胸に飛び込んだ瞬間、秋と同じ柚の香りがした。

「具合が悪いんですか。ちょっと、おでこ触りますよ」

「その男、かなり慌てているな。どうせ、お前の男も俺みたいに人生に失敗してろくでもない男になるんだ。今のうちの幸せだぞ、娘。きっと、株に失敗してその借金を返済したら今まで積み上げてきた財産がすっかり無くなり、やる気は零って寸法さ」
幻でしかない父親の死体が喋る言葉に秋は怒りを覚えた。だが、ぐっと堪えた。指は葉楼のTシャツをぎゅっと、掴んでいた。肌に爪が食い込んでいるのを感じた。
それはお前の事だろうがぐうたら馬鹿！　と罵ろうとする言葉も爪に一緒に食い込ませて葉楼を心配させまいとした。
だが、秋の懸命な努力は実らずに、秋の額に手を当てている葉楼の顔色は次第に青く変化していった。それにしても、葉楼の手はアイスクリームみたいにひんやりする。
「大変だ。秋、ちょっと、待ててね。今、冷却シートとお薬持ってくるからね」
「あ、葉ちゃん。嫌だもん」
そう言っても、葉楼は秋をベッドに寝かすとすぐに扉を開いて、出て行った。階段を下る騒々しい音が聞こえる。
「母さん」
「何だ、馬鹿」
「秋はいつになったら私達の肌を持ってきてくれるのかな？　早くしてくれないとパチンコの腕が鈍ってしまう。ここんところ、連戦連勝なんだ」
パチンコの画面がぴかぴか光る夢を見ている父親を秋は蔑んで、その父親の顔にベッド脇にあった目覚まし時計を投げつける。
秋の両親はそれを避けるように消えた。目覚まし時計は耳に残る乱暴な響きを立てて、カーペットに落ちた。ケースに罅が入っているのが確認できた。そのケースの罅を一つずつ、拾っていたらカーペットの白さに薄い黒が混じってきた。
止め処なく、それは雨のように降る。その雨は自分の力では止められない。どうしよう？　と思った。もうすぐで葉楼が戻ってくる。

悲しませたくない。
そっと、温かい風が吹いた。俯き、じっと眺めているカーペットに四つの異なった影が映った。それを確認しようとはしなかった。
秋は悪い子だから……。
「大丈夫？　秋ちゃん。あざみお姉さんが林檎持ってきたよ？　とりあえず、美味しいもの食べて気持ちを落ち着かせよう」
あざみの掌に乗っかった林檎は赤々しい。それは死のイメージと同じだ。目覚まし時計の針はまだ、蟹歩きしている。生きている……。だが、アリアや厘はもう、生きていない。
白い厘の肌が林檎に触れる前に秋は手を引っ込めた。
「駄目だよ、秋、悪い子なんだよ」
「何、言ってるんだ。秋ちゃんは葉楼お兄さんみたいに良い子じゃないか？　ご近所の皆さんに挨拶もできるし、隣近所の岩郷さんがあんな良い子、いないよって感心なさっていたよ」
骨太の優しい温かみのある梅之助の声が秋に元気をあげようとしてくれた。だが、気合いではどうにかなりそうもない。
「口を開けて秋ちゃん、苦いけどお薬」
思湖のしわくちゃの掌に乗る小さなオレンジ色の薬は苦そうだ。だが、それさえ飲めば数時間後には心地の良い眠りが約束されるだろう。
自分だけ、痛みから逃れて良いのだろうか。アリアは今も苦しんでいる。厘も苦しんでいる。そう思うと顔を上げて蛍光灯の眩しい光を茫然と眺めているだけしかできなかった。
「口を開けないと飲めないよ？　これ、貼ってあげるから飲もうね」
顎に手を添えてから、葉楼がおでこに冷却シートを貼ってくれた。ひんやりが頭の痛みに勝っていく。
今は葉楼に溺れてしまえば良い。腕がそんな願望に反応して勝手に葉楼の両肩に乗っかった。そして、両腕を結んだ。かさかさしている唇は葉楼の首筋に触れていた。
「おい、葉ちゃん。お姫様は口移しを所望してるんじゃないか。教

師としてはノーだが、ここは公共の施設、学校ではない。そこで姉としてのあざみがゴーと命令している。さぁ、口に含め！　葉ちゃん！」
急に甘えたくなって、葉楼の首をちゅっと吸った。
「吸っちゃ嫌ん。ちょっと、本当に勘弁ですよ、秋」
「何、オカマになってんの！　馬鹿」
「叩くのなしですよ、お姉さん。あ、また、吸う、吸われる」
こんな事をしても、葉楼も、あざみも、梅之助も、思湖も笑顔だと知ると気分が楽になった。そんな秋の表情は眠たげに瞼を細めていた。
愛されるってこんなにふわふわしているのに不安どころか、安心する。そう秋は知った。

＞七＜

世の中には蛙の子は蛙という摂理が存在する。だとするならば、私が今、看病している千冬の娘はやはり、千冬の性質を持っているのだろうか。あの残虐さと無邪気さを両方とも兼ね備えた。鏡の破片のように人々の心を良くも、悪くも抉っていく様子をも引き継ぐのだろうか。
私は彼女を変えられなかった。だが、昔に囚われるのは止めにしよう。時は逆さには流れない。
今、私の息子の葉楼の腕を枕にして、千冬の娘の秋がすやすやと寝息を立てている。掛け布団が盛り上がったり、下がったりする。その緩慢な風景さえ、愛おしい。老い先の短い自分にはそれだけで十分だ。
だが、それでも……過去は再生される。人間の脳みそなんてきまぐれなものだ。
出逢って直ぐは千冬、不吹姉妹をただの変わり者姉妹と考えていたが、それは実に浅はかだった。それを思い知らされたのはあの出

逢いから一ヶ月後の事だった。その日、私は霜澤姉妹と遠出をする約束をしていた。
玄関のベルの音がすると、私は暇を弄ばして猫じゃらしで猫の頭を撫でていた手を止めた。何処か、リズミカルに叩くその動作は千冬の奔放さを表しているようだった。
「はい、今開けますからお待ち下さい」
「残念、待たないよ」千冬がドアを開けようとするが生憎、ドアには鍵が掛かっている。鍵っ子の私は首からぶら下げた鍵の扱い方は熟知しているのだ。学校を自主休業的に休む回数は多いが馬鹿ではない。「さて、と不吹！　三十路からマシンガン借りてきてこんなしーたんと私との蜜月を邪魔する不毛な扉なんか、吹き飛ばすんだから！」
「止めなさい。あんたの家と違ってうちは貧乏なの。外務菅なんてちんけな仕事に就くあたしの家と犯罪集団のボスであるあんたの家と比べないでくれる」
語気を強める私だったがついつい、頬が緩んでしまう。千冬は私の友情を映画館で鑑賞しているかのように解っているんだぞと鍵が開いた扉の隙間から顔を覗かせた。というよりも、扉の隙間と壁の間に顔を挟ませていた。それだけではインパクトがいまいちだと考えたのか、後ろ髪を顔に被せて、右目だけを覗かせた。少々、不気味だ。
「助けて、ドアに殺されるわ」
「後ろへと退けば助かるよ、千冬ちゃん。頑張って」
「後ろには浣腸をしようと構える不吹がいる。妹が裏切ったのよ。いつも、妹のお気に入りのお人形のお洋服を強奪して隠してやったのに。褒められるならばまだしも、こんな仕打ち、理解できないわ」
「いや、いや。千冬ちゃんの方が理解できないわ」
片手を振って私は否定すると、後ろ髪を定位置へと追いやった千冬と目で合図を交わした。私は千冬の黒髪をむぎゅっと掴んだ。その後に続いて千冬も同様にする。

路肩には細長い黒塗りの車と、メイド服を着たマシンガンを構えた背の高い女性がいた。私は失礼だとは思ったがその女性を指さした。

これがアメリカか……、私はアメリカを舐めていたのか！

「いいえ、違いますよ。これはわたくし独自のファッションです。アメリカ関係ない。多分五十年後くらいに日本の秋葉原にメイド達のコミュニティーができるとわたくしの戦場で培った勘がびんびん言ってるんです。わたくしの名刺、はい」

大人のお店、ビーナスエース♪

と名刺に記載された店舗名は私にどう、リアクションを返せと要求しているのだろう。

お喋りとお酒だけならば、五千円ぽっきりで遊べちゃうんだよ。五歳から十二歳までの可愛い女の子が君をご奉仕にゃん！

と名刺はやたらに長ったらしいキャッチフレーズを記載していた。子どもは欲情の対象にはなりません！　と油性ペンで書き殴りたい衝動に駆られた。もし、私に息子がいるとして、八歳児とそんな大人な関係になったら私はきっと、拳で粛正を下すパワフル主婦になるだろう。

「あ、御免。それはうちが経営を任されている売春宿の名刺でした、すませんね」

今度、渡された名刺はご本人のもののようだ。

スーパーアキバ系メイド　李（偽名）

つっこみどころ満載の名刺だった……。右胸にクリップで留められている空っぽの名札に李と書かれた紙が入るのだろうか。奇抜な両端で金髪を結わえた髪型も私には到底、理解できない。私は異文化交流頭痛に襲われた。直ぐにポケットから処方箋を取りだして、薬を口の中に放り投げた。

「大丈夫ですか？　きっと、いつも使っていない頭を使った為に知恵熱が出たんですね」

実に失礼な言葉を私は聞かなかったことにした。これでは胃が痛

くなるのも時間の問題だ。
「それではメイドさんは戦場で戦った経験があるんですか。凄いですね、私はお国の為に戦争に参加したいなんて思いませんけどね。命を粗末にするなんて馬鹿らしい」
「戦争？　ああ、勘違いしたんですね。わたくしの戦場はカードゲームの試合場です。そこで命の取り合いをするんです。おかげで知恵熱を出して寝込んだ経験がありません。ここ、鍛えてるから熱が出ないわけですね」
　おでこを叩く李＝三十路は馬鹿だった。熱＝知恵熱の法則が彼女の頭では絶対視されているのだろう。
　メイドはマシンガンを細長い車内に放り投げた。まるで銃が子どものお人形さん扱いだ。霜澤家には他の犯罪集団から身を守る為に銃が三百丁くらい霜澤家の所有する土地の地下に眠っているとさぞ、当たり前のようにクッキーの生地を焼く際に不吹が喋っていたのを思い出した。
　不吹は車のボンネットの上でいつものように意味なく、ぴょんぴょん飛び跳ねていた。不吹の方は姉とは違って金髪の髪と青い瞳が特徴的な可愛らしい女の子だった。
「ふーちゃん、車が壊れちゃうから駄目だよ」
　私は不吹の手を引いてボンネットから地面へと跳ぶように首を横に振って合図した。
「ぴょん」
　と愛らしい掛け声と一緒に地面へと着地した不吹は日本風のお辞儀で挨拶をした。私もそれに従い、お辞儀した。
「三十路！　さぁ、車を出して！　大自然へと繰り出すわよ」
「ああ、その前にお嬢様、給油して良いですか？」
「しょうがないわね、車が動かないとライオンに喰われちゃうわ」
　野生ライオンはニューヨークから数時間で行けるような土地にはいないだろう。そんな事を知らずに千冬は殻のグラスを手に持って威厳に満ちた顔をしていた。

一方、不吹はもう、寝るべく、シート上の御菓子の滓を払っていた。シートの下にはスナック菓子の殻の袋が落ちていた。私はそれを拾って、備え付けのゴミ箱へと放り投げた。両膝を叩いて不吹を呼んだ。すぐに不吹は姉を乗り越えて私の両膝へと座った。

「ん？　話が食い違っていますね。私の給油です。お嬢様方はわたくしの華麗な運転捌きをご覧になろうともせず、やれ、塩で手がべとべとだから綿飴の封を開けてだの、言ってましたよね。ぷんぷん。優しい李ちゃんは開けてあげましたが、おかげで谷底に落ちるとこでした」

私は咄嗟に危険を感じて車から脱出しようとしたが時既に遅し、自分はじっとしているのに景色が横へと走っていた。私は祈ろうとしたが、自分は無宗教者の為、祈るべき神がいない事に落胆した。

私達の給油を途中、立ち寄った美味い肉を焼いてくれる飲食店に立ち寄って済ませてから、北へと車を走らせる。人気がどんどんと無くなっていき、とうとう道路の舗装すら途切れた畦道へと車は入っていく。森が見えてくると車は急停止した。

今まで込み上げてきた満腹感が外へと一瞬、飛び火しそうになるのを唇に蓋をして押さえ込んだ。そんな危機的状況にあった自分を素に戻して、私は隣に座っていた千冬を見た。

「何、やってんの？」

プリンのカップにおでこを突っ込ませたまま、俯いている千冬を不吹はげらげら笑っていた。

「見ての通りさ。プリンってこんな危険性も孕んでいるんだね、びっくりだべ」

「私の方がびっくりだべさ」

私達は自分よりも背の高い草を掻き分けて前へと進んだ。行けども行けども、滴を葉に含ませた草ばかりで何をしにここまで来たのだろうと疑問を感じた。今更ながら遠出をする以外に聞いていない事実に気付いた。

先頭を歩く李というメイドはマシンガンの他にナイフを握ってい

た。狩りでもするのだろうか。
　正面のボロイ家屋を見て戦慄が走った。その戦慄がこの先に自分の体験し得なかった何かがあると予知してくれているようだ。私は恐怖で顔を歪めながらも、内心わくわくしていた。それは強がりだったのかもしれない。
　最後尾の私がボロイ家屋に入ると、用心深く李が扉に鍵を掛けた。家屋内は真っ暗だったが無人のようで外の鳥たちが鳴く声や、虫の羽音、水が下流へと滑り落ちる音がした。その音がここはお化け屋敷ではないのだよと教えてくれた。私は恐怖心を払拭して、ひたすら無言のまま、歩く他の三人の背中を追った。
　赤いカーペットが敷かれた廊下を歩きながら、ひたすらそれの途切れる場所を探していると、赤いカーペットの真ん中に白い部分を見つけた。その白が本来の廊下の色らしい。その白の上には取っ手と鍵穴が付いていた。
「ねぇ、人の本質は何処にあると思う？」
「難しい事を聞く、何か千冬らしくないよ」
「そうかな、これは千冬が人生を賭けてでも証明しなければならない課題なんだよ。そうしないと私は不幸のままだからね」
「不幸？　何、それ。不幸なんてものの見方の違いで簡単に変わるんだよ。例えば、チョコレートを不吹に食べられたとするでしょう。でも、そのチョコレートが毒入りだったら、不吹が食べてくれた事で貴女は数十年の未来を手にできる。それは幸福でしょう。でも、妹を思う姉としては不幸な出来事だよね」
「そんな事しないよ。あたし、虫歯の治療してるからママにチョコレート食べるな、ゆわれているもん」
「その割には不吹お嬢様は」鍵穴に銀色に輝く鍵を差し込んで回していた李が千冬に報告した。千冬はゆっくりと頷いた。それを見届けるとまた、話の続きをする。「不吹お嬢様は車内で御菓子を食べまくっていました」
「子どもは我が儘なものなのよ！」

そう言って不吹は床下のぽっかり空いた空間へと降りた。
随分と軋むけれども階段だと私は不満げに溜息を吐いた。階段を下った奥の一室に目を見張った。鉄格子の向こうには五歳から十六歳までの女の子がいた。その子達は誰一人として五体満足ではなかった。言葉が出ずに馬鹿のように口を開けていたが、ここでは何か恐ろしいイベントが催されている。そんな考えに至った。後退りをした。
「さっきの質問の続きだけど、人間の本質は何処にあると思う。私はね、血に宿るだって思っているんだ。見てよ、あの不吹の表情」
不吹は涎を唇から垂らして、まるで食べ物を品定めしているような目を哀れな女の子達に向けていた。格子にしがみつく細い爪は先が尖っていた。そのとんがりがこの小さな悪魔の破壊性を象徴しているように思えた。
あのボンネットの上に乗っかっていた少女が今や、私の倫理観からは遠いところにいた。
千冬は私の首筋をゆっくりと丹念に舐めた。
「寒いの？　思湖。大丈夫、貴女は何もしなくても良いの。傍観者で良い。それでも、貴女は私のお遊びを理解するようになるでしょう。さぁ、李、適当に廃棄処分のゴミを持ってきて」
「はい、お嬢様」
李が千冬にナイフを手渡すと、千冬はその場で何度かナイフを振ってみせた。それなのに檻に入れられた少女達は声を出さなかった。
「人間は恐怖を耐えられる許容量を超えると心を閉ざしてしまうのよ。面白い事に一ヶ月に一匹は檻の中で恐怖に耐えかねて心臓発作を起こして勝手に死んじゃう子もいる」
「何も感じないの？」
「レクリエーション効果ってこと？　それだったらストレス解消と支配欲が満たされる」
「違う」
私はそう言いながらも相手の顔を見なかった。ただ、目の前にあ

る光景だけを眺めていた。必死に無関係者を気取ろうとしていた。自分は硝子越しに虚ろな表情をした女の子が李に手を引っ張られて引き摺られているのを眺めている。女の子の片足は膝から下が切断されていた。明らかに人的なものだ。

私は少女の表情を目の前で再度、見直した。少女は助けを呼ぶような悲しみに満ちた表情をしてはくれない。少女が息を吸う瞬間を狙うように千冬は少女の首筋にナイフを食い込ませた。少女は金切り声を上げた。肌にナイフが食い込む度に喚声が部屋を包もうとする。だが、その声は突如として止まり、変わりに血が噴き出す静かな音が首筋から聞こえた。

「楽しいって感じるよ。自分の握るナイフが今、生殺与奪を支配したんだよ。凄いでしょ」

私は何も応えられずにただ、頷いた。

「さすが、私の友達だね」

そう言った彼女の安堵した表情は忘れられない。五十年経っても尚、忘れられない。

だって、彼女はうれし泣きしていたのだから、やっと……自分の全てを知る友人ができたと。

だが、彼女の幸福は全ての幸福ではない。後に残された夥しい肉と、鉄の香りを放つ血の持ち主にとっては不幸でしかない。

それと成分の同じ血が私にも、千冬にも流れていた。違うのは家系、遺伝子。だから、どうしようもなく、無神論者の私でさえも祈りたくなるのだ。その遺伝子にほんの少しでも慈悲があるならば、今同じ部屋に眠る葉楼と秋の物語の行く末を彼らの望む幸福に導いて欲しい。

私達の物語は既に終わっている。千冬は死に、不吹は連続殺人犯として死刑を待つ身、私はただの主婦……そう、偶然と選択が入り乱れている時間が定めたのだ。

階下で電話の着信音がけたたましく、鳴り響いているのに気が付いた。それも随分と前から鳴っていた様子だ。

「耳が遠くなったね。ここまであっという間に辿り着いてしまったよ」
電話を取ると、受話器からは人の呼吸音だけが伝わってきた。正直、私は気味が悪くなり、すぐにそれを置こうとした。
「実はあなたに話しておきたい事があるんです」
その声は誰の声だろうと一瞬、考えたが秋の母親　千冬の妹の声だ。すぐに解った。
「どうした？　不吹。改まって」
「霜澤秋は私の娘です。殺人を犯した後に秋は産まれました。ですけど、世間体というものがありますから姉の子としたんです。秋は病院ではなく、潜伏先の廃ビルで産まれたものですから霜澤家の余力でも偽造は容易かったのです」
「母親って名乗るんですか。いまさら」
衝撃を受けながらも、私は震えた右手を庇うように左手を右手に添えた。それでも、右手は小刻みに震えていた。この震えは何だろうと考えた。
そうすると、あの幼い頃の無邪気なまでの残忍さが人にはあるのだと私に教えてくれた不吹の笑顔が、時代を越えて秋の笑顔とぴったり重なった。
首を横に振った。あの子は今時、珍しいくらい良い子ではないか？　だが、その良い子と呼ばれる人間が殺人を犯す事だってある。決まって殺人犯の素性を知る人々は、あいつは良い奴でしたと答えるじゃないか。
いいや、違う。あんな天使みたいな子が悪魔になるはずがない。
「そう、いまさらだから……これは胸に閉まっておいて」
「誰の子？」
「私が殺した一家の父親。名前は忘れた。近づくために女の武器を使ったってわけ」
「あなたは秋を愛しているの？」
「当たり前でしょう。秋は私の娘だもの」

その言葉は信じられないくらい、冷たい口調で表されていた。
今、不吹はどのような顔をして、受話器を握り締めているのだろうか？
残念ながら、私には確認できない。彼女は今、遠い場所にいるのだから。

第三章　罪悪感と、選んだ道

第三章　罪悪感と、選んだ道

＞１＜

あの空の青さを僕は憎んでいる。

そう、口に出したくて葉楼は口を開けようとした。だが、唇が喋るのを拒絶している。

僕は彼女に偽りの愛情を持たせたまま、天国へと旅立たせてしまった。

そう、口に出すべきだった。だが、彼女との最後の挨拶の時、葉楼は嘘を吐いた。愛していた、と嘘を吐いた。

「あんなに白い煙が青を脅かしていたのに今じゃあ、青過ぎる」

空には青だけが広がっていた。手を伸ばしてみた。だが、その青さには届かなかった。ただ、葉楼よりも空に近い位置を鴉の群れがカァ、カァと五月蝿い声を上げていた。そして、電線へと彼らは足を着けた。その黒い姿がどす黒い感情を呼び起こさせた。何であんな鴉が生きていて、厘が死んでいるんだ。お前が死ねば良かったんだ葉楼と自分に無言で言い聞かせた。

徐に火葬場の階段から立ち上がると葉楼は黒いネクタイを外し、水溜まりに叩きつけた。それだけでは飽きたらず、所在なさげに浮いている黒いネクタイを踏んづけた。茶色い泥が黒いズボンの膝部分にまで飛び火した。それでも、また踏んづけた。黒靴に茶色い泥が点々と付着した。

その点を見つめていると、

「ほら、花火。葉ちゃん。絶対、この方がウケ良いよ。葉ちゃんは全体的に堅いな」

その点々とした泥は一ヶ月前に葉楼の夏を題材にした作品を同じ美術部員……だった厘が変な気を利かせて歯ブラシと金属網を使用して花火を咲かせた。見事な花火と暗闇で掌に乗った蛍の淡い輝きとが明と暗、天と地を別つ作品になっていた。

あのブラシを持って得意げにはにかんだ笑顔は忘れられない。学校に本当の友達が一人もいなかった厘のそんな笑顔を誰が知っている！　あの窮屈な箱に乗っている人間の何割が厘の優しさを知っている。

葉楼はそんな感慨をぶつけるように広い駐車場に駐車されている車を見回した。駐車場は車が五十台くらい駐車できる程には広いというのに車は火葬場正面の一箇所に固まっているだけのみだった。十台だ。

厘にもっと、もっと、世界の広さを教えてあげたかった。そうすれば、君を知る人間も増えたというのに。

「ねぇ、葉楼。魂には重さがあるって思う？」

突然、後ろから声が掛かった。その声が姉のあざみだと解っていたからそのまま、葉楼は俯いて泥だらけの黒靴をただ、眺めていた。

「僕は魂なんて信じない輩なんですよ。ただ、生きていた記憶さえも消えて何もかも消えて！　やがて、いなかったも同然になる」

「何、悩んでいるの？　今は厘ちゃんを送ってあげたんだっていう気持ちになりなさい」

「送る？　それこそ、変じゃないか。式が終わってみんな、厘を忘れてしまったように日常に戻るんだ。ある人間はこれから仕事に必要な資料を作るだろう。違う人間は趣味のゲートボールでもするんだろう。送るってその場でただ、神妙にしていることですか。畜生、意味ないよ」

こんな乱暴な口の利き方をしたというのにあざみは黙ったまま、何も言わなかった。ただ、啜り泣く声が聞こえる。そして、葉楼の両肩に手を置いて、おでこを背にくっつけた。

「愛していたんだね、厘ちゃんを」

「僕が厘を愛していた。あ……」
あざみが葉楼の頬を拭った。その掌の湿りを葉楼に見せる。
だけども、僕は知っている。愛は愛でも僕の愛は同情だった。窓辺で一人俯きながらスケッチブックにせっせとデッサンしている厘に気が付いて、人数がこんな大勢なんだから人物画を練習しては如何ですか？　さしあたり、僕なんかはどうでしょうと声を掛けたのが最初の同情だった。その同情が積み重なり、告白されて、僕は何となく良いですよと返事した。何時からか、本当の愛ではなく、同情が愛にすり替わっていた。
その事実をどうしても厘にも、家族にも言えなかった。今でも葉楼は自分の保身を第一に何処か考えて、あざみに言えなかった。それが悔しい……。
「その人が死んでも魂はその身体から抜け出してずっと、大切な人の人生を見守っているって思った方が得よ。そして、きっとね、魂は大切な人の人生に触れて成長していく。まだ、厘と一緒にあんたは生きる！　シャキッとしな」
だとしたら、厘はようやく、同情に気が付いたのだろうか。それでも厘はいつか、本当の愛に成長すると心底から言ってくれる気がした。
やはり、葉楼も他の人間と同じようにこれからの日常へと一歩き出した。家では一昨日から熱を出して寝込んでいる秋が一人で留守番している。その事が心配になり、いつの間にか駆け足から本格的に走っていた。

＞二＜

「ねぇ、いい加減にドアを開けてくれないですか？」
そんな葉楼の問いかけの声で秋は目覚めた。目を覚ますと辺りは真っ暗闇でびっくりしたが、掛け布団を被って寝ていたのだから当たり前だった。妙な事に小便臭い温かな空気が充満している。

「嫌だもん。葉ちゃんなんてあっち、行け！」
湿っている両股を擦り合わせた。焦りを感じた。乾布摩擦をした時みたく、摺り合わせた部分が温かくなったが、依然として湿り気はある。
「じゃあ、少しお話しようか」
扉に何かがぶつかる音がした。きっと、葉楼が扉を背もたれとして利用しているのだろう。幾ばくかは時間が稼げそうだ。
掛け布団から頭を出して、ほっと溜息を吐いた。部屋は布団の中とは違い、燦々と輝く太陽の力によって蛍光灯以上の明るさの恩恵を受けていた。
「それ、なら良い。でも、少しだけだよ」
「鮭御握り、美味しかった？」
「あれ、形が変だったよ」
緊張感が一気に吹き飛んだ。自然と頬の筋肉が解れていく。御握りの凸凹した形が目に浮かんだ。
「御免。僕、あまり器用な方ではないみたいです。この前なんて、シマウマを描いていたつもりだったんですが、通りがかった案総先生にそれ、変わったキリンねって言われました」
カーペットに転がっているお皿に置いてあるメモを秋はゆっくりと時間を掛けて掬い上げた。メモの内容確認はもう、十本の指では数え切れない回数くらいしていた。それでも、頬を赤く染めて魅入ってしまう……。そこには両親が教えてくれなかった愛情があったのだから。
秋ちゃん、早く元気になって一緒にお外で遊ぼう。その言葉の下には大きな狐が小さい狐と一緒に野原を駆けずり回るイラストが添えられていた。それは秋の望む関係―恋人というよりも、きっと葉楼が望む関係―兄妹のようだ。
秋はそれでもそばに居られるのなら秋はそれで良いんだもん……どうして気が付かなかったと掠れた声で呟いた後、
「じゃあ、前、スケッチブックに画いた秋ちゃんもヘンテコになる

の？」
　と努めて元気に葉楼に質問した。
「いいえ。何故か、可愛らしく画けているんですよ。きっと、モデルが良いんでしょう」
「ところでそんな可愛いモデルさんがお風呂に入らなくてもいいのかな？　一緒に入りませんか、お姫様」
「嫌」
　涙を流して、髪が乱れている自分を秋は茫然と鏡で眺めていた。
「何で？」
「秋、臭いもん」
　違う。そうじゃない。今の自分は何よりも醜いんだ。本当に美しいのは自分が殺した厘だって事は解っていた。
　唇にそっと、小指で触れた。この唇で罪のない人間を罵倒した。小さな唇から放たれた甘い言葉に吐き気を催した。何て、芝居上手の醜い悪魔なのだろう……。
　掌で鏡に触れると、それは意志の持たない物特有の冷たさを保っていた。掌をそっと離すと薄い手形が鏡にくっきりと残った。まだ、自分は人間なのに、厘はもう、人間ではない。いや、自分も人間ではない。子どもの姿をした悪魔だ。
　しばらくして、葉楼が無垢な、善人な子どもに諭す。
「この世界に在るもの、全てには臭いがあるんですよ。臭いがあって当然なんですよ。秋ちゃんくらいの年齢なら嫌な臭いしませんよ」
「じゃあ、嗅いでみる？」
　葉楼の為だけに、やっと手に入れた愛情の為だけに、秋は芝居した。自分でも上出来だった。小さい頃からやっていた妄想をお友達にして一人会話をする技術がここで役に立つとは思わなかった。勿論、妄想のお友達―同い年の南部御酒加ちゃんは喋れないから秋が通訳してやるのだ。
「嗅ぎません。変態さんではないですから」
「秋、自分で自分の臭いを嗅ぐ時、あるよ？」

声が震えそうになるのを喋るという動作に真剣を集中させて乗り切った。
「それは変態とは言えません。それにその小動物的な仕草、可愛らしいですね。本当のところ、何処の臭いを嗅いだんですか？」
「お布団。なんか湿っているんだもん。きっと、誰かがジュースを零したんだ」
「パンツとズボン、濡れてない？」
「濡れてる。きっと、誰かが秋をプールに招待したんだ。そんな記憶ないけど」
「じゃあ、お風呂に招待しましょうか、お姫様」
秋はその陽気な葉楼の言葉に三分、待ってと応えてから慌てて身支度を調えた。乱れた髪をブラシで梳かした。タオルで充血した瞼を擦った。それから、顔中を拭いた。脇の匂いを嗅いでみるとやはり、臭かった。自分の汗の臭いで咳き込んだ。
目に入った消臭スプレーを掴んで必死にその臭いを撲滅し、ついでにズボンとパンツの臭いも撲滅する。小便の臭い子とは思われたくなかった。せめて、柑橘系小便の香りのする子と思われたい。
そんな乙女心全開の秋を戒めたのは葉楼の黒いスーツとお線香の匂いだった。泣きそうになった。だが、泣く行為は心配させる結果に繋がると秋は荻須家の一員として暮らす事で学んでいた。葉楼の大きな手をぎゅっと握り締めた。
風呂上がりにはジュースだと思い、冷蔵庫を開けた。冷蔵庫にはいつも、秋用にアップルジュースが用意されていた。普段、葉楼や葉パパ、葉ママはお茶を飲むし、体育教師なのにペットボトルをガブ飲みせずにあざみはお紅茶をご愛飲している。
秋はじっと、アップルジュースのパックに描かれている林檎ちゃんを眺めた。そして、勢いよく封を開けて、唇をパックの右端にくっつけようとした。だが、それは実行には移されなかった。
「秋ちゃん、お行儀良くしないとお尻ペンペンよ」
後ろを振り返ると、フライパンを手に持った葉ママこと、思湖が

立っていた。そのフライパンでお尻を叩かれるのだろうかと想像するとお尻の穴がぎゅっと引き締まった。
「今まではそんなことされてないもん」
一回も母親にお行儀の事で注意されなかった。
「この家では紙パックに入った一リットルのジュースはコップで入れて飲むのよ。それに何ですか、その恰好は？」
無地のパンツを思湖が指さしたので、秋は元気よく、パンツと応えた。湯気が立っている秋の両肩にバスタオルが引っ掛かった。それを引っ掛けてくれた葉楼が秋の髪をアイロンで乾かそうとコンセントにプラグを差し込んでいた。
床には光る水溜まりが何カ所も点々とできていた。それを苦笑した顔をしながら、葉パパこと梅之助がタオルでごしごしと床を拭いていた。秋はそれを見ると申し訳ない気持ちでいっぱいになった。すぐに駆け寄り、梅之助の着物をぎゅっと引っ張った。梅之助がシワシワの顔を上げると、秋は人の老いを感じた。それは厘の死に触れたからだろう。本当は梅之助のように肌に皺が出来たり、頭の毛が白くなったりする外的衰えを通過した先に死があるんだ。
「ごめんなさい」
ぺこりと腰を曲げた。
「良いんだよ、マイ　チャイルド。子どもは元気なもんさ」
そう戯けた声は深みのある低い声だ。その深みは年から来ているのだろうと考えながら、葉楼を眺めた。葉楼は秋の髪を一房、捕まえるとアイロンの熱風に晒した。
「ねぇ、葉ちゃん」
「動いちゃだめ」
「葉ちゃんは葉パパみたく、年をとったら、渋い声になるの」
「そうだね……な、」
「なるわけ無いでしょう。そんなの想像できない、あのほ乳瓶しゃぶっていた葉ちゃまがダンディーになる、笑わせるなよ」
葉楼の言葉を遮ってあざみがそう罵った。だが、その罵りさえも

優しい愛に包まれていた。良いな、と秋は思った。きっと、頭の上から降り注ぐアイロンの熱風がそうしてくれているのかもしれない。
あざみが下着だけ着用して、ソファの上で腕立て伏せをしているのを見て秋はこれを利用して会話を続けようと考えた。さっそく、今にもソファの皮にへばり付きそうな胸に指を差し示した。
「あ、あざみちゃん。ずるい。あれ、お行儀悪いよ」
「良いのよ、あれは失敗作だからね」
思湖はフライパンの端で玉子を割って、その玉子をフライパンに投下した。豪雨がアスファルトを叩くような忙しない音が聞こえた。
「ちょっと、失敗作って」
荻須家の人達はまるで日課のように秋の髪を撫でたがる。でも、撫でられるのは好きだった。秋はあざみが自分の側を通過する際に撫でてくれると予想していた。事実、撫でてくれた。
そして、冷蔵庫を開けて一リットルの牛乳を取りだした。それを迷い無く、封を開けてそのまま、口に含んだ。
「私が貴女くらいの年の頃は立派なレディーだったものよ。女子校の教鞭を執っていた頃にね、ラブレターを女子生徒からよく頂いたものよ」
そう語っている思湖が一リットルの牛乳をあざみの手から奪い取るとパックにデカデカとあざみと油性ペンで書いた。あんた、ちゃんと飲みなさいよと言ってからあざみに返した。あざみは無理矢理、鼻に皺を作って秋に見せた。秋も飲んでねと言ってあげた。
「ラブレター。それ、あげると、葉ちゃん嬉しい？」
「まぁ、嬉しいですね」
アイロンのスイッチを切って、秋の髪の両端を黒いゴムで結わえた。わんこの垂れ耳みたいだ。
秋は子犬のようにわん！　と一鳴きした。
「秋ちゃん、書いてくる！」
だが、もう階段を駆け上がっていたので葉楼に向けた言葉とは誰も思わないだろう。

「秋ちゃん、ちゃんと新しい寝間着を着るんだよ。後、明日出掛けるからね。熱下がったのを良いことに夜更かしなんて駄目。後で葉楼にお夕飯を持っていかせるからね」
「お出掛け、うわーい！」
思湖が教えてくれたお出掛けイベントに胸が躍った。秋は明日はどんなお洋服を着ていこうか？　どんな髪型にしようか？　と考えながら扉を開けた。自分の部屋には当然ながら人はいなかった。しんと静まり返っていた。胸がドキドキした。先程、自分が考えていた年をとったらという話題が急に心臓を震わせた。頭にそっと手を添えると血管に流れる血の流れが感じられた。
「アリア……厘、死ぬってどんな気持ちですか？」

＞三＜

バスの窓から見える景色は憂鬱な心を癒してはくれない。
自転車にふらふらと危なっかしく乗るおっさん、四足歩行で空き地を仲間の幼女と一緒に歩き回る幼女、魚の匂いのする店内で魚を洗う青年、携帯電話を弄りながら学校へと急ぐ高校生達……全ては葉楼にとって景色でしかない。
その景色に映る全てが自分を形成するにあたって必要でない。例え、必要であったのだとしても代用が利くものだ。葉楼は溜息を吐いた。それが期せずして、その景色と葉楼を遮断する白い膜を窓に作った。その白い膜を破る少女がいた。その少女は勿論、荻須家のアイドル秋ちゃんだ。今日の秋ちゃんもラブリー天使ちゃんだ。髪の毛は昨日、きまぐれでやったツインテールが気に入ったらしく、それだ。厘の母親がぜひ、秋ちゃんに着て欲しいとくれた洋服からブラウスと青いスカートを選択した。厘の母親から貰ったとは教えていないので秋は新しいお洋服と喜んでいた。なんでも、女の子は新品の方が嬉しいらしい、これは姉情報。さらに幼稚園児用の帽子を昨日、買ってきたのでそれを秋に被らせた。あざみはあんたねぇ

……と絶句していたがよく、似合っている。
そんな可愛い恰好をした秋ちゃんはまだ、自分が何をしに行くのか、知らされていない。
秋にはきっと、嘘情報が教えられているのだろう。口が裂けても、ほら、あれが本当の母親だよなんて言えない……。母から昨日の深夜、教えて貰った葉楼ですら、衝撃を受けているというのに。それを教えるなんて残酷だ。
秋は息を吐いて、窓を白くぼやけさせる。その白いキャンバスに漢字を書いた。
「これ、なんて読む？」
「鮭。熊さんが大好きだよね」
「はい、熊さん」
と言いながら、秋は窓に熊さんを画いた。熊さんは美味しそうに鮭御握りを食べている。どうやら、鮭を画くのは難しいと判断したようだ。
秋と葉楼は二人で楽しく窓にお絵かきしながら、六十分の間もバスに揺られて山道を登った。途中、急なカーブが多い峠に入ったが秋はお絵かきに夢中で全然、怖がらなかった。その二人の姿を隣の席で観察しつつ、思湖は一杯のコーヒーをゆっくり時間を掛けて飲んでいた。
次は火之画丘と運転手がだらけた声でアナウンスすると、思湖は停車ボタンを押した。そのボタンを押した思湖を訝しげに周囲の乗客は一瞥をくれた。なんでだろう？　と後で思湖に聞いた話だが、火之画丘には寂れた村と刑務所しかないらしい。その刑務所は主に極悪な犯罪を犯した囚人が収容されているそうだ。
それを知らなかった今の葉楼はただ、おかしな事があるものだと思うだけだった。トイレ、トイレと叫びだした秋の両脇を抱えてトイレを探していると後ろから綺麗な女性の方が声を掛けてきた。
「トイレなら、この先の坂を下るとスーパー　すみみが在りますからそこにトイレもあります。がんば」

優しい人らしく、メイド服を着た女性は秋と無理矢理握手して勇気づけてくれた。その女性が言ったとおり、スーパー　すみみという駄菓子屋があった。まるで民家だ。スーパーの意味が解らなかった。それでも、民家のトイレを借りられた。秋が用を足している間、店主の八十歳のお婆さんとどうしてだか、戦争の話をした。昔はね、物は貴重だったんだよという話だった。だからってぼっとん便所を未だに使うのはどうかと。秋がウンチが流れないと騒いでいた。葉楼は店主から黄色いバケツを借りて、秋のウンチを流すのに汗を流した。

秋と一緒にバス停まで戻ってくると向日葵の咲く野原で思湖と先程のメイドが立ち話をしていた。

「あんた、変わらないわね。一体、何歳よ？」

「わたくしは人一倍、美肌に気を遣っているんですよ。毎日、十時間睡眠ですよ」

「それでも無理だと思うけど……」

「それよりそちらの美男子とちびは誰？」

メイドの作り物のような整った両眼がこちらへと向けられた。睫毛がもの凄く細やかで長い。気のせいか、秋の金髪に厳しい目を向けている。

「ああ、私の息子の葉楼と千冬の娘の秋」

葉楼はメイドに向かってお辞儀をした。それでも、メイドは横目で秋を見ていた。厳しい目に見えていたのが、哀しい目に見えてきた。何をそんなに悲しんでいるのだろうか。

「これはご丁寧にお辞儀を。礼儀正しい息子さんですね。秋なる女児は随分と千冬に似て」

「その事なんですけども、あちらで」

思湖はメイドの服の袖を掴み、指先で野原の奥の方を指さす。そこには一本の大木が生えていた。そして、財布から二千円を取り出すと葉楼に手渡した。

「葉楼、これで秋ちゃんと一緒にお食事して来なさい」

「やった！　ケーキ食べて良い？」
「いっぱいは駄目よ」
「大丈夫ですよ。僕が監視してますから」
「いじわる」
そう言う口とは裏腹に秋は葉楼の腕をがっちりと掴んでいた。さて、とこの寂れた風景の場所の何処にケーキが食べられる店があるのだろう。
周囲を見回しても、坂の下に広がっているのは数軒の民家と田んぼ、森林くらいなものだった。どう見えてもケーキを売っている感じはしない。とりあえず、歩いてみることにした。何か、発見があるかもしれない。歩いているうちに二人で何の示しもなく、それぞれ違う歌を歌い出した。葉楼は明るい歌を、秋は自分の学校の校歌を。
その違いがどうしようもなく、楽しかった。蝉が二人の歌に同調するように生の歌を、神秘の歌を歌っていた。それはなんて、熱々しい夏の一幕だろう。
そんなコンサートが終わりに近づいたのは一軒の民家が視界に入ってからだ。その民家の屋根に定食屋　細波という看板が掛かっていた。
秋があっと低く声を上げて急に走りだした。どうも、秋の全身を揺さぶるような走り方は危なっかしく思える。
案の定、とてっと転けた。急いで秋に近寄って助け起こす。秋の膝から血がそっと、下へと流れていく。転んだ際に付着した石粒を器用に取り除く。葉楼がそうしていると肩を叩かれた。勿論、秋しかいない。
「どうしたんですか？　ん？　秋ちゃん」
「葉ちゃんが悪いんだよ。秋が転んだのは」
「え？」
「だって」裏返った声でそう言って、しゃがんでハンカチを秋の膝に巻いている葉楼の肩にしがみついた。「葉ちゃん。あのお店、探

すのに十五分くらい掛かったんだよ」
関係ないし、そもそも秋は時計をしてないし、この辺に時計台なんてない。よってそれは何処からやってきた経過時間なのだろうか、なんて考えていると暑苦しい気候がさらに暑苦しさを増してきた。苛々する。それでも、か細い足を眺めているとこんなにも頼りない子に怒る必要はないと割り切れた。大人の余裕ってやつだろう。
「そんな事言うと葉ちゃんは秋ちゃん、嫌いになりますよ？」
表情が硬くなって、肩に秋の爪が食い込む。思わず、痛いと言いそうになった。
「嫌いになんてなったら、秋ちゃん泣いちゃうもん。泣いちゃうよ」
既に号泣しているのにそうぶっきらぼうに言う秋は可愛い。髪を撫でようとした。だが、その手は払われた。
「いつもそうやって子ども扱いするよね」
「子どもだろう？」
「そうだけど、葉ちゃんにはそう思われたくない」
「はい？　訳が分かりませんよ、秋」
「だってさ、秋は小学生で、葉ちゃんは高校生でしょ。葉ちゃんはきっと、卒業したら大学に進学するよね？」
「多分、しますね。今は不況真っ直中ですし、スキルを身に付けておいた方が良いでしょう。教員免許なんていいかもしれませんね」
「あざみお姉ちゃんに怒られるよ。簡単になれるって言ってるようなものだもの」
軽く咳払いをして秋に話を戻すように促す。
「あ、誤魔化した。まぁ、良いよ。でね、そしたら葉ちゃんと別れ別れになっちゃうよ。翼町には大学なんてないから」
「そうなったら寂しいですか。一緒に来ますか、そうなったら」
「え、良いの！」
所在なさげにきょろきょろと辺りを見ていた瞳が葉楼の顔を凝視する。まるで嘘は吐いていないだろうかと確認しているようだ。事実、むっ～って小さな唸り声を上げている。

それが可笑しくて笑ってしまった。
「あ、秋ちゃん百パーセント本気だからね」
そう秋が自分の真剣さをアピールしている。でも、笑いは止まらない。無理矢理、口を噤もうとして、軽く咳き込んだ。
すぐにしゃがみ込んでいる葉楼の背中を小さな掌がゆっくりとさすってくれた。
今度は葉楼の情けない姿に秋はゲラゲラと笑い返した。
「葉ちゃん情けない、情けないよ」
大人げない葉楼はすたすたと秋を置いて、店へと入ろうとした。入り口の扉に手を掛けた。まだ、腹を抱えて道路の真ん中で笑い、転げている秋に視線を戻す。
「そんな事言うと置いていくぞ、秋。一緒に行くんだろう」
「うん」と元気よく、返事をしてまた、身体に似合わない全身を震わせるような走り方でこちらへと駆けてきた。手を繋ごうという意図で差し伸べたのだが、秋には通じなかったようだ。「こうした方が葉ちゃんと近くなれる」
差し出された掌を枕にした。秋の横顔が真剣に葉楼の心を読み取ろうとする。この子にはいつも、こんなところがある。何処か、不安なのだろう。あんな父親や、母親だとしても彼女にとっては彼女を構成する一部だったんだ。
それを補う為に彼女が自分に甘えているのだとしても、幼い信頼に応えない選択肢は自分にはなかった。だって、その愛情の行為は昔、自分が姉、あざみにやっていたのと似ているから。人はどこか、自分以外の誰かに自分の一部を任せたいって思っている。それは経験から言える。あざみと自分の関係から言えるんだ。
だから、こう応える。
「ずっと、近くにいて良いよ、僕は君のお兄さんなんだからね」
「葉ちゃんは女の子心を解っていないよね」
急に秋は話題を変えた。どんな繋がりがあるのだろう？
一瞬、記憶の中に閉じこめたはずの人物が頭に過ぎった。生きて

いく為にはその人の顔をもう、思い出してはいけないのに。つらすぎるから。きっと、泣いてしまうから。だが、口は自分でないパーツであるかのように好き勝手に動く。
「そうだね、僕はきっと、女の子心なんて解らないよ、秋。だって好きでもない女の子を彼女にしちゃうくらいですからね。我ながら酷い」
「元気出せよ」
そう言って秋は扉を開けると葉楼の背中を押して、店へと入った。その慌ただしい物音に気が付いた人の良さそうな店主が景気よく叫ぶ。
「いらっしゃいませ。兄妹ですか、可愛いですね、妹さん」
「可愛いでしょう、自慢なんですよ」
「いいえ、妹じゃありません。恋人だもん」
「はぁ？」
「恋人だもん」
そう言って秋はテーブルに着いた。運ばれてきた冷水をぐいぐいと飲み干す。その姿は中年の親父のようだ。眼を擦ると、また可愛らしい秋の姿をちゃんとしている。
「全く、僕には女の子心は解らないようですね。せめて秋ちゃん心は解りたいものですね」
「葉ちゃん、それだったら秋ちゃん心を解ればいいんです。女の子心は解らなくてオーケー。ほら、ここに座る。今からお勉強します」
「何の？」
と言いながら葉楼は秋の隣に腰掛けた。
「決まってます。秋ちゃん心のお勉強」
「とほほ」
「頑張りなよ、小さな恋人さんの為にもさ」
威勢良く、店主の笑い声が部屋中を満たした。
せっかくだ、この威勢に相乗りして、秋ちゃん心を学ぼう。さぁ、頭の容量は開けたぞ、ばっちこい！

＞四＜

人の数だけ、価値観は存在している。人の生き方の例は無限であり、だからこそ、感じ方も無限にある。だが、それらは全て、一つの時間軸に乗っかっている。決して、自分の意志を持って時間軸からぴょんと飛び跳ねることはない。三年前の李もそう、考えていた。この時代よりも後、百年先に生まれた彼女でも時間の流れを飛び越えるのは容易ではなかった。だが、それを為しえた。そして、限りある時間しか見られないからこそ、人には希望も、絶望も与えられるんだと知るに当たる。だからだろう、数日前に在った二十五歳の思湖よりも大分老けた思湖に現実性を感じられなかった。話している内容もまるでゲームの作り話のようだ。自分にすら、生の実感がない。

千冬が火事で死んだ。千冬の娘は助かった。その事実だけが李の脳に記憶される。

「そうですか。そんな結末に至っていたわけですか。ご存じの通り、わたくしは霜澤家が茉河恋の捜査で壊滅に追いやられて以来、身を隠していましたから」

淡々とした冷たい口調で喋る自分を嫌な女だと思った李だったがそれ以外にもう、会話の仕方を忘れてしまった。後は道化のように戯けるくらいしかできない。

「私が高校生の頃の話ですよね。不吹が姿を眩ましたのもその頃でしたね。まさか、十年掛かって茉河恋に復讐を果たすなんて」

李は溜息を吐いて、ガムを口に含んだ。ガムを噛む度に苺の甘い果汁とガムの生地に細かく磨り潰された精神安定剤が口内に染み渡る。この苺ですっきっとという名のガムは百年先の未来のコンビニなんかで普通に普及しているガムだ。社会はさらに混沌と入り組んだシステムを構築しており、そこからはみ出した人間は淘汰される。その社会に生きていく為にはそういう商品が日々の食事と一緒に摂

取される。
今は自由なのだから、止められるはずなのに今も歯茎にガムがへばり付いている。忌々しい百二十円のガムのうちの一切れだ。
「人という脆弱な生き物は何で自分の身に余る所業を成すのか……。案外、生は死よりも地獄なのかもしれませんね。限られた時間で叶えられる欲望は微々たるものですから、わたくしには到底、解らない感情ですがね」
限られた時間から解放されたのに李はガムをもう、一切れ口に入れた。前の一切れと混ぜ合わせながら噛んだ。くちゃ、くちゃと唾液とガムがぶつかる音がする。
「まるで本当に人以外の者って口ぶりですね」
「そうね、風の赴くまま、吹かれて不吹の所在を知り、貴女にも会えたのだから手品の仕掛けくらいお見せしましょう」
道化はこう、たまに戯れたくなってしまう。持っていたバッグから裁ち切りばさみを取り出すと自分の皮膚を容赦なく、切った。激しい痛みが走るが、死からはほど遠いと理解しているマッドサイエンティストには痛みは死へとは直結しない。
それを知らない思湖は青ざめた顔をしている。
「あ、血が溢れて。早く手当てしないとどうして馬鹿な事を」
「これはわたくしが作った最高傑作でして、この裁縫道具を使えば、何でも縫う事が可能ですよ。例えば、人の命だって縫う事ができます。死体があればですけどね」
そう解説しながら、傷跡を針に通した魔法の糸で縫っていく。血は草を赤く染めたが、縫い終わるとそれ以上、血が流れることはなかった。
縫い跡が全然、解らないのを誇張するべく、李は思湖の目の前に自分の腕を晒した。それでも青ざめている思湖に李は小馬鹿にした笑いを浮かべた。
「でも、わたくしは自分が怪我した時にしか、これを使いません。世界の秩序を乱してしまう力ですからね。わたくしはわたくしが永

遠に生きて、世界の人間どもの欲望の果てを見つめたいだけです」
「変わってるわね。相変わらず。あんたの言ったとおり、日本全国にメイドさん達のコミュニティーが形成されていますね」
恐る恐る言葉を紡ぎ出す思湖の仕草が懐かしかった。昔の李にもそんな時間の流れがあったのをふと、思い出した。アリアさんによく、実験なんてもう、切り上げて寝なさいと叱られたのに未知の知識が生み出す純粋な恐怖に震えていた。もっと、研究すれば世界が自分の近くに引き寄せられる。もっと、だ。もっと、だ。こんな事実があったのか、恐ろしいけど、もっとくれ！　と心はいつも、変化していた。
「当たり前です、時間旅行をして見聞した事実ですから」
そう淡々と李は呟いた。
向日葵の枯れた花びらが風に舞い上がって何処かへと飛んでいく。飛んでいったとしても自分の見た自然の摂理を越えた向こう側へはたどり着けない。それは幸せなことだ。

＞五＜

秋ちゃん心の教育とは秋の好みの髪型はツインテールだとか、ケーキが大好きだから一日一食は用意するようにや、秋ちゃんの大好きなアニメは冒険ものだとか……、要するに秋ちゃんマニアになる為の教育だった。そんな教育で心はぽかぽかになったのだが、刑務所に足を踏み入れれば自然と心は引き締まる。うどんの熱い汁が懐かしい。
案の定、何も知らされていない秋と一緒に付き添うように葉楼は同じ個室の扉がある一つの扉へと刑務官の案内で通された。その部屋は半分、硝子で仕切られていた。パイプ椅子が目の前に二脚置いてある。そのパイプ椅子に葉楼と秋は腰掛けた。硝子で仕切られた向こう側には一脚、パイプ椅子が用意されていた。
「ああ、やっと会えたね、秋」

刑務官に促されて席に着いた老女がそう、低い声で呟いた。老女の白髪は薄暗い照明の光に照らされていっそう惨めに見えた。だが、目だけは強い眼光をこちらへと放っていた。そこにかつての凛々しさや美しさがあるようだ。

「誰？」

紺色の作業服を着た母親をまじまじと見る娘はその人が母親である事を知らず、葉楼に澄んだ瞳を向けて質問した。そんな質問に答えられる訳が無く、無言で葉楼は不吹に助けを求めた。

「可哀相な子。私のことも教えて貰っていないんだね。私は貴女の叔母よ。つまり、貴女の母さんの妹」

母さんと言った時に確かに言い淀んでいた。本当は母親だと言いたいのだろうと考え、葉楼が口を開こうとするとそれを察知したように不吹は今にも泣きそうな面で首を振った。両膝に添えた両手を動かして、隣に座っていた秋を自分の両膝に乗っけた。秋は先程まで、茫然とした雰囲気だったのに葉楼の側に来ると安心したように葉楼の身体にもたれた。

「何でそんなとこに入っているの？」

という大胆な意見さえ飛び出すほどだった。

「人間を殺したんだよ。自分の身勝手な感情でね、殺した。私が殺した中には貴女くらいの年のお嬢さんもいた。でもね、私は自分の罪深さに気付いてこうして、罰を受けている」

「私も」

「ん？」

「私も人を殺したらそこに入るの？」

秋の無邪気な言葉は他者が聞いても心が痛む。親子は他人のようだった。よく作り物でありがちな私がお母さんだよ、会いたかったよといったお涙頂戴の場面はここにはない。あれはそこで終わるから感動がある。でも、現実はハッピーエンドでは終わらない。必ず、続き、そこには不幸も幸福もある。この場合は不幸の方が多そうだ。葉楼はその不幸の一つを想像してみた。母だと解ったところで秋は

母とは暮らせずに、その母は罪により国家に殺される運命にあるのだ。誰が母親の死に幸福の未来を見るというのだろう。
長い時間を掛けて、秋をじっと、不吹は見守るように眺める。仕切りに掌を当てて、ゆっくりと撫でる。不吹側からは丁度、秋の頬を撫でたように映るだろう。目は充血してきて、涙が溜まっている。葉楼もいつの間にか、涙が瞼に溜まり頬が熱くなっていた。
「貴女はまだ、入る年ではないから無理ね。それは罰を受けられないって事だから辛いことだ。だから、私みたいになるんじゃないよ」
それは多分、最初の母親からの教えだった。だけど、秋は何で自分がそういう忠告を受けねばならないのかと憤怒しているのが顔にあからさまに出ていた。
秋をぶん殴りたい。秋の母親の言葉なんだぞ。
退屈そうに大きく欠伸をして、葉楼にもう、帰ろうよという視線を向けている。それを横目で確認できたが無視した。感に障る無垢な瞳だ。
「お返事は？」
その声は掠れていた。
「うん、解った」
秋の声は軽々しかった。
秋と不吹の一対一での会話はそれだけだった。その後、葉楼が不吹に秋は野菜好きの子だという話や、ただいまと葉楼に言ってから靴を脱ごうと屈んだ際にランドセルの中身が全て出てしまった話等を不吹に聞かせた。不吹はそれに一々頷くと、秋ちゃんは毎日何時に起きるの？　といった日常に関する質問をしたのだがここまでの長旅が小さな秋の身体には応えたのだろう、葉楼のワイシャツの生地を握り締めて生地に顔をくっつけてぐったりとしていた。代わりに全て葉楼が応えた。
葉楼と秋が退室する際に不吹は葉楼に深く頭を下げた。そして、憑き物が取れたような晴れ晴れとした表情を浮かべた。
「秋を宜しく御願いします、葉楼さん。貴女はきっと、うちの秋に

とっては王子様みたいな存在なのでしょう。私が何もしてあげられない代わりに秋をお風呂に入れてあげて下さい。きっと、お風呂の中で五十秒数えているのでしょう」
「はい、数えていますよ。秋は暑がりなんですぐ浴槽から脱走しようとするので、手を繋ぎながら」
その後はいつも、熱いって騒いで勝手に廊下へと素っ裸で飛び出す。まだ、そんな幼い秋。
「時間だ。すまんが、これも規則なんですよ」
怠そうに言う刑務官にとってはこの会話はただの会話でしかない。
「後少しだけ、御願い」
「私は見ることができないけど、小学校をやがて、秋は卒業して行くんでしょうね。その時は私のお墓に報告、御願いします。私は喋れないけど、きっとあなたを歓迎します。中学の入学式も卒業式も、高校の入学式も！　卒業式も！　大学を卒業して……」
「時間だ！　すまんが、これも規則なんです」
「後少しだけって言ってるでしょう。私の未来はもう、ないに等しいのせめて、御願い」
「あなた達の関係がそのまま、続けば結婚するかもしれない。その時になったらどうか、私の事は忘れて下さい。幸福の森に醜い雑草は生えていては駄目なんですからね」
「いいえ、違います。雑草って名前の草はないんですよ。みんな、必要なんですよ。人の人生にいらないものなんてない」
そう言って葉楼は扉を開けると秋を先に廊下へと退室させた。後から葉楼も退室する。その際にもう一度、不吹を見ようとした。だが、硝子の向こうには姿が無かった。ただ、噎び泣く声だけが聞こえる。
「変な叔母さんだったね。秋、疲れちゃった。だって全部、秋の事ばっかだもん。こういうのをストーカーっていうの？」
「違うよ、絶対に」
真実を語る勇気は無かった。廊下を歩いて日常へと帰ることしか

今はできない。

＞六＜

「面会、どうだった？」
ロビーの椅子に座っていた思湖がそう言って、葉楼に缶コーヒーと果汁百パーセントの苺ジュースを手渡した。ジュースを秋に手渡すと喜んですぐに開けた。
「実に優しい感じの叔母さんだったよね、秋？」
口元に缶を当てたまま、素っ気なく応える。
「うん、だったね」
その不遜な態度があまりにも癪に障ったので、歩を秋の足には合わさずにどんどん先に行った。自動ドアが完全に開くのを待たずに外へ出ると、もう午後四時だというのに陽は高く、相変わらず蒸し暑かった。後ろから秋がやっと、追いついてくる。ズボンの後ろポケットを掴む。
「歩けないですよ」
「なんで機嫌が悪いの？」
「悪くありません」
「嘘」
か細い言葉と今もポケットを掴む手を無視して、バス停へと歩き出す。案の定、秋は引き摺られた。数メートル進んでから、思湖が葉楼に苦言を呈した。だが、今回は許したくなかった。真実を知らないのだから当然だという考えにどうも、追いつかない。
やがて、鈴虫の音色に混じって秋の咽び泣く声が聞こえてきた。だんだんと喧しさを増していき、とうとう、秋は葉楼の足を蹴飛ばし始めた。
「葉ちゃんの意地悪。どうして、いつもみたいに構ってくれないの？」
「葉楼、秋ちゃんの年齢を考えると仕方のないことよ。このくらい

の子は自分が一番で、大好きな人には常に甘えていた年頃なのよ。ほら、ご覧なさい可愛いお顔が台無し」
「葉ちゃん。秋、よく解らないけど謝るから許して」
ぼそっと言葉を発した唇は洗い立ての真っ赤な林檎色だった。太ももまで丈のある白い靴下はすっかり砂が付いて汚れている。それを見逃せなくて、葉楼はしゃがみ込んで白い靴下を叩く。その間、チャンスとばかりに秋は葉楼の頭部を抱え込んで自分の胸に押しつけた。そのまま、離そうとしない。
「違うんですよ、僕が大人げなかったんです、許して下さい。一緒に手を繋いで歩こう」
「いや、こうやって恋人？　同士みたいに抱き合っていたもん」
「でも、暑苦しいよ」
「え、秋ちゃんは幸せだもん。なんかね、これしてると胸がわくわくする」
金髪が鼻筋を掻いた。秋の吐く息が旋毛に辺り、春先の微風のようだ。そっと、秋の胴に両手を添えた。想像していた以上に柔らかく、温かい。
「小さな花嫁さんですね、葉ちゃん」
「痛いですね、背中を思い切り叩かないで下さい。それに秋ちゃんは花嫁さんではないですよ」
叩かれた背中を秋が優しくさすってくれた。妙に甲斐甲斐しい。
「秋もいつか、大きくなる……。だから、花嫁候補に入れて下さい、御願いします」
「今のところ、僕に花嫁候補は秋ちゃんだけですね」
内心、この子はいつか、心変わりして自分への愛情を他人へと振り分けるんだろう。そう邪険な意見が出てくるのは自分の心が疲れているのかもしれないと思った。
熱さをものともせず、若さに輝く笑顔を浮かべる秋から元気を分けて貰うべく、秋を肩車した。
「大丈夫だよ、葉ちゃん。秋ちゃんが葉ちゃんの妻だって言いふら

すから」
　幼い女心を燃やす発言とは裏腹にやはり、幼さがそれを駆逐していた。背が高くなった事を良いことに途中、木の枝にぶら下がって葉楼の肩から離れた。奇声を上げて何が面白いのやら叫ぶ秋の姿を目にして冷や冷やさせられた。
　その横で思湖は秋のわんぱく振りを注意しようともせずに眺めていた。
「私もね、こんな時期があったね。よく、夏に行った伊豆の別荘で木登りをして、うんと高いところまで登って富士山を眺めたなぁ。よく晴れた日の富士山はまるでこの世のものとは思えなかったよ」
　秋が両足を揺らすのを止めて干物のようにじっと、動かぬまま、葉楼を眺めていた。もう、疲れたから助けに来いらしい。葉楼の肩が真下まで来るとえい！　と可愛らしい掛け声と共に両肩に飛び移った。一瞬、落ちそうになったが、葉楼がしっかりと秋の胴体を支えた。
　こんな子ども時代が母にもあったなんて信じられなかった。その子ども時代を想像してみるとむず痒い気持ちになった。
　自分も夕暮れ時の太陽を眺めてよく帰ったものだ。ふと、その時の情景を思い出した。友人とサッカーをして膝に擦り傷を負いながらも何事もなかったかのように歩いていた。自分が歩く度にそれよりも早く太陽は自分から離れていった。気が付くと夢中で太陽だけを追って走っていた。それでも奴には追いつけなかった。幼かった自分にはその理由が解らなかった。ただ、太陽は僕が嫌いなんだと泣きたくなった。
「ねぇ、葉ちゃん、葉ちゃん」と秋が葉楼の頭を叩いてから、緋色に輝く太陽を指さした。「どうして、太陽さんに追いつけないのかな。もっと、速く走って！」
「無理だよ。太陽さんと秋とでは生きている時間が違うんだ」
　僕とも、ねと言おうとしたがそれは寂しい気がした。生は違えども死は同じでいたい。

「わかんない」
そう、それで良いよ。君はそれが解らないだろうけど、僕は違う事が解らない。例えば、そうだな、どうして秋の体温はこんなにも優しいのだろう、とかはどうだろう。ねぇ、お姫様。
帰りにデパートに寄った。花火の大売り出しが催されていたのを発見した秋が勝手に買い物篭に花火を五千円分詰め込んだ。しかも全部、単品の花火だ。全て戻そうとしたが、思湖は今日は許すと言って、今日の晩ご飯である親子丼の材料と一緒に購入した。
家の扉が見える位置までくると、扉の前に不審人物を認めた。
明らかにメイド服と覚しき、ふりふりの軟弱そうな服装に似合わない拳銃を握り締めていた。その人物は板チョコをコンビニのレジ袋から徐に取り出すと、わざとらしく、音を立てて囓った。気持ちの良い甘そうな音だ。
振り向き、キザな笑みをこちらへと挨拶代わりに贈ると扉に向き直った。
「ぴんぽん、秋お嬢さんのお世話をこのスーパーメイド　李さんにお任せです。掃除、洗濯、送迎等の基本オプションは超一流。おまけにマシンガンをぶっ放して秋ちゃんを犯罪からお守りするぜ。だから、泊めて下さい。住所不定なんです」
嫌な押しかけメイドがいたものだと葉楼は苦笑したのだが、アニメのお嬢様みたいだ！　と叫んで喜ぶ秋に同調して自分も大歓迎な振りをした。それに住所不定という身に同情していた。
ちなみに拳銃は本人曰く、使い物にならない物らしい。

＞七＜

「おはようございます、葉楼さん、秋ちゃん」
「うわ、うちにメイドさんがいますね。よく考えると凄い不自然」
葉楼は秋が自分の身体にぴったり寄り添っているのを確認すると、そっと、ベッドの右端へと追いやった。エアコンが静かな音を立て

て働いているのに寝苦しいと思ったら、秋の体温のせいだったんだ。
「葉楼さん、もっと重要な不自然な点があります。それは何？　考える時間は三十秒」
「何でそんなのが決まっているんですか？」
「ただ、単にそれ以上、変態の顔を見ていたくないだけです。あれですか？　今から自分好みのプリティーに育てようっていう生もない腐れ根性って奴っすか。すげー、童貞。すげーや。百人斬りの私には解りかねます。女なんて幾らでも世の中にいます」
「育成の件はともかく、後半の発言が限りなく、ブラックですね」
「え、本気にしました。ネタですよ。私、まだ新品ですもの。きっと、みんな、値段が高すぎて買えないんですよ。高級車？　これ、専用車」
　専用車と指さされた秋はお腹をぽりぽりと掻いてまだ、夢の中だ。乱れた髪の毛が秋の可愛らしい顔を所々、隠していた。独占したいと誰もが思う小動物だ。それでも、葉楼は嫌悪感を李の発言に示した。
「違いますよ、人間でしょう」
「まぁ、それはともかく、気をつけなさい。年頃の女の子は傷つきやすいもの。女ってのはみんな、構ってちゃんなのよ」
　そう言っているのに視線は机の側に立て掛けられたイーゼルに目を向けていた。正確にいうと、イーゼルに乗っかっている水彩画だ。その周辺には乱雑に絵の具が散らばっていた。昨日、徹夜で完成したばかりの水彩画は前の秋ちゃんとは違う構図だ。夕陽と追い駆けっこをしている秋ちゃんという構図である。
　何故、それを李がじっと、眺めているのかは解らなかった。何処か、寂しげな横顔をしていたので、どうしたんですか？　と声を掛けようと思ったが、その前に李は幽霊のように音もなく、部屋を出て行った。
「何、しにきたんだろう。ん」別段、重要ではないと思って秋のふっくらした頬を押して遊んだ。「秋ちゃん、ぽちっ」ともう一度、

押すと秋は目をぎゅっと堅く閉じて口をもぐもぐさせる。「ぽちっ」ともう一度、やっても同じ反応だ。可愛らしい少女時代。
ふと、気配に気が付くと、メイドが扉の隙間からじっと、こちらを観察していた。葉楼に見つかると白々しく、誤魔化そうとした。
「それと、朝ご飯できてます。今日はバタジャガとパンですよ。おう、良い変態だ、彼には素質がある」
どうやら、途中で無駄だと気付いたようだ。

＞八＜

初めての実習の時間に秋は内心、浮き浮きしていた。何か、面白いハプニングはないかときょろきょろ周囲を見回しては、その合間にこの時間に提出することになっている漢字ドリルの十三ページをのろのろと進めた。秋は頭の良い子で学校に通う前は本を多読していたので漢字は得意中の得意だった。それもあるのだろうか、二十分経つと既に提出するページを終えてしまった。肘を付いて、溜息を吐いた。自習は静かで退屈だ。
勿論、秋と同じように思っていた子もいるらしく、そういう子達の一人がこの退屈空間に痺れを切らした。悪ガキ特有の含み笑いを唇周辺の皺に託して、教卓の横にある液晶テレビの電源を押した。
画面は一秒とも掛からずにリアルな映像を映し出した。
「昨夜、麻庫美桜ちゃんが遺体で発見されました。遺体はまたもや、皮を剥がされて街中に放置されていました」
スーツを着た若いアナウンサーが秋の知らない場所でそう、ニュースの内容を伝えていた。右下に××県　翼町と中継先が書いてあったのを確認したが、それでも解らなかった。街の方は最近、殺人事件や誘拐事件が横行しているからという理由で葉楼か、梅之助が付き添っていないと秋は行ってはいけない事になっていた。だが、下校はそれぞれ学校や職場があるので一人で帰宅する。その時、役に立つと葉楼から渡された防犯ブザー付きのキーホルダーは一度も

役に立っていない。
ともあれ、自分と同じ犯行特徴の殺人が行われた現場には興味があった。シャーペンを噛りながら画面に見入った。
現場はどうやら、山の方角らしい。木陰がアナウンサーの後ろ姿を妙に陰気に映している。山の斜面にある立ち入り禁止のロープまで来るとカメラ目線になった。そのアナウンサーの背後から蝉の暑苦しい声や、鳥の声、野良犬同士が吠え合う声なんかも聞こえる。動物は人間様のいざこざなんて知ったこっちゃない。
「こんな場所で命を落とさなければならなかった、美桜ちゃん。御冥福をお祈りします」
深々と頭を下げてアナウンサーは涙を流した。
秋の後ろで男子の誰かがアナウンサーの癖にこいつ、泣いてるよ。失格だなと野次を飛ばした。何が失格なのだろうか？　生皮を剥がれる恐怖に耐えながら死ななければならなかった被害者を思えば、同情して泣いても咎められはしない。むしろ、人間的だ。淡々と残酷なニュースを伝えるアナウンサーこそ、考えてみれば機械的だ。そんな妙な冷静な反論を心に浮かべる秋は本物の悪魔なのかもしれない。
過去の同一犯行を振り返る映像が流れているのをシャーペンを口に含んで観ていた。まるで他人事のようだと思う自分と、妙にそわそわしている自分がいる。
「どうしたの？　全然、さっきからシャーペン動いていないよ、何処か解らない箇所ある？　言ってくれれば教えるよ」
隣の席に座る紀久が心配そうに秋の顔を覗き込む。彼女も提出するページを既に終えていて、太宰治の『斜陽』を読んでいた。
「大丈夫……ただ、ニュースを見てただけ」
秋はそんな律儀な友人に空返事した。
「怖いよね、生皮を」
友人は秋の視線の先にある液晶テレビを青い顔をして見上げた。それは、そうだ。人ごとではないのだから、この翼町で起きている

事件なのだから。秋も今までは感じなかった自分が何者かの捕食者になる恐怖に小さな胸を痛くしていた。
ランドセルの側面に付けられた頼りない防犯ブザー付きのキーホルダーを一撫でした。このブザーを鳴らしたら、葉ちゃんは秋を助けに颯爽と駆けつけてくれるだろうか？
「警察では過去の二件の事件と同じ犯行から犯人は同一犯だろうという見解のようです。美桜ちゃんは午後七時まで市民体育館で友人と一緒に卓球を楽しみ、その後、自転車専門店　ししるの経営者が山の方面へと歩いていくのを目撃したのを最期に行方が途絶えていました」
別の年配のアナウンサーが機械的にそういうと民間の屋根にししるという看板を設置しただけの佇まいの玄関へと進んでいった。そこに手筈通り、ししるの経営者が佇んでいた。
顔には緊張の色が見える。秋達も違った意味で緊張した。もう、クラス全員が子どもの皮を剥ぐ現実のモンスターの情報に飢えていた。
「山の方面へ行くのは別段、おかしな事じゃないよ。何しろ、ここは山に囲まれているような地形だからね。当然、山の方面にだって民家は多数存在する。むしろ、そっちの方に多いくらいだよ。私だってそうじゃなかったら、声くらい掛けていたさ。こんなご時世で小学生に声を掛けるのは私としては避けたいくらいだよ」
紀久の幼なじみである樟田塔が大袈裟に叫ぶ。
「ふざけんなよ、じじい。こんな時だからこそ、俺達を助けてくれよ」
「どうして、避けるの？　秋、いつも近所のおじちゃん、おばあちゃんに挨拶して学校に行くのに」
「新聞くらい読んだ方が良いよ。ここ数年、誘拐事件が多発だって」
読まなくても、近所のおじちゃん、おばあちゃんが秋を見かける度に一人で大丈夫？　もし、心細かったら一緒について行ってあげるからいつでも声を掛けるんだよとしきりに言うから今が自分達世

代にとってどれほど、住みにくい時代なのかを感じていた。
その一端を担っているのは間違いなく、連続殺人鬼霜澤秋だ。だが、それなのに同じ殺人鬼に動揺して、怒りさえ感じている。

＞九＜

「どうして、秋はあんなの知らない」
暗い洞窟の中、二体の腐乱死体のうち、一体にランドセルをぶつけた。パチンコ馬鹿と書かれた紙を貼り付けた頭がぽろりと取れた。床に頭が落ちた表紙に目玉があったはずの大きな穴から蛾が三匹も飛びだしてきた。その蛾に驚いてたじろぐ。
三匹の蛾の何気ない行動よりも驚くべき事をやってのけた小さな殺人鬼のあまりの間ぬけっぷりに二体の腐乱死体は大いに笑った。その笑いが洞窟中に恐ろしく、反響する。
「良かったじゃないか、秋。模倣犯がもっと、多くなればお前は犯行を重ねやすくなる」
「秋はもう、パパママの良いなりにならないもん。ただの臭い死体の癖に。ほら、虫が寄って。気持ち悪い」
秋は蝶や団子虫、蠅等の虫たちを遠ざけるように、かつてパパだった死体の頭をサッカーボールのように蹴り飛ばした。別に虫から助けてやったのではないきまぐれだ。
「何、言ってるの秋。私達、血の繋がった家族でしょう。家族は助け合って生きていくべきでしょう」
鼻の潰れた死体が言った。その鼻の潰れは自然が長い時間を掛けて削り取っていったものだった。母の女優のような美貌は結局、自然の前では滓も同然だったのだ。だから、母のおでこには元鬼美人と書いた紙を貼ってある。可哀相に髪すらないなんて。
私はこうはならないと宣言するように叫んだ。
「秋は葉ちゃんと新しい家族、作るから良いもん。葉ちゃん家のあんな笑いに溢れた家庭にするんだ」

「解ってないな。世間知らずだ。世の中には勝ち組と負け組ってのがあってな。産まれる前から……つまりはパパとママが結合する瞬間からそいつは決まっているんだよ。親は選べないってことさ。それでいくと俺達みたいな自己中心馬鹿の親を持ったお前は負け組、両親二人ともインテリ教師のお前の愛しい葉ちゃんは勝ち組。この家庭環境の差だって埋めていくのはしんどいもんだ」

五月蝿い、腐れ頭だ。虫歯の穴から芋虫みたいな訳の分からん幼虫がひょっこり顔を出しているのにまだ、生者みたいに説教をする。スーツにネクタイを着けた真面目なサラリーマンみたいな口調だ。その猿芝居に反吐が出る！　お前の服装はいつだって、半袖の肌着にジャージ下のパチンコ野郎だろう。秋はその侮蔑を込めて、大笑いした。椅子に座ろうとしていたのに、その座ろうとした位置に椅子が無くて危うく、転倒しそうになった。

「大丈夫だもん。葉ちゃん優しいもん」

「そう、か。だとしたらこいつはクリアできるだろう。でもな、お前らには年の差がある。葉ちゃんは果たしてちびっこを本気で妻にしたいって思うだろうか？　きっと、妹くらいにしか思っていないだろうよ。残念だね、秋」

「貴方、まだあるじゃない。この子は二人も人を殺しているんだよ、家庭なんて築けないよね。そう思うわよね、そこの子も？」

「うん、思うよ。人を殺しておいて幸福になるって随分、身勝手というものでしょう。貴方のおかげで私はもう、学校にも通えないし、お友達にも会えない。恋だってできない」

いつの間にか、白い箪笥の上にアリアと厘が仲良く、腰掛けていた。そのうちのアリアが優しい口調で秋よりも小さな子に諭すように言った。それは馬鹿優しいとも取れるし、馬鹿にしているとも取れた。秋は歯ぎしりをした。それだけで怒りが収まらず、偶然秋の足元付近を通っていた黄色いテントウ虫を踏みつけた。テントウ虫は二枚の羽根が納められている外郭の真ん中を主に潰されて、石ころにへばり付いた。

秋は得意げにどうだとばかりに厘を眺めた。厘は目を細めて、唇の右端を歪めていた。
「秋ちゃん、私は必ず、貴女に呪いを掛けるわ。葉ちゃんは私の彼氏なんだから。泥棒猫しないでよ。あ、泥棒子猫か」
テントウ虫の外郭から飛び出した透き通った羽根を冷ややかに眺めている。まるで秋もいずれ、このテントウ虫みたいに無惨に終わるのだと暗示するように眺めた。
「ねぇ、私の新しい子ども達はどう。みんな良い子なのよ？　秋なんて飽き飽きしてるのよ、私。正直言って昔から貴女を見ると殺したくて仕方がなかった」
「同感だよ、何も知らない大きなお目々を刳り貫きたいくらいだったよ。それでソースを付けて食べるんだ。憎しみを消化する儀式だよ、いわゆるね」
「悔しいな、私に身体があれば、すぐにそうするのに」と厘は口惜しそうだ。
「お前達はもう、死んだんだ。あれが誰であれ、秋はあの模倣犯に全てを押しつけて葉ちゃんに愛して貰うんだ。初めて、愛して貰えるんだ。嘘つきの愛なんかじゃない」
そう洞窟を震わすのではないかと思われる程の叫びが止むと、両親という名詞のみの両親も二人の哀れな幽霊も消え去っていた。
びゅー、びゅゅー、と洞窟の壁面や、岩に、家具に、秋にぶつかった風が悲鳴を上げる。
溜息を吐いた。ほら、秋を止める壁は何もない。やっぱり、セカイは秋の為に動いている。そうとしか、思えない幸運だ。警察もまだ、秋をマークしていない。死者は生者には攻撃できない。骸骨どもはそのまま、朽ちていくと良い。
自分の頬の涙をハンカチで拭った。幸運だ！
鼻水を啜る秋の鼻音に混じって、不気味な靴音が一歩、一歩と聞こえてくる。背中にぞくっと氷を宛がわれたような悪寒がする。手錠を手首に填める音がする……。違う。

「でも、それが殺人鬼に、黒い過去の持ち主に耐えられるんでしょうか」
潔白の白とでも表現しても良いくらいの生地のメイド服、それを着ている女性が秋に見せた事のない鬼気迫る形相を見せている。すぐに理解した。これが本当のこの人の顔だと。
鋭い目は陰鬱と残酷さ、悲しみを混ぜ合わせた漆黒。唇の赤いルージュは生きる為に流してきた己の血。両肩には重々しい空気を背負っている。握り締めた拳は今にも秋を喰い殺しそうだ。
そんな相手に秋はぼそっと震える唇を隠すのを忘れて言葉を発した。
「李、どうして」

第四章　本当の美しさ

第四章　本当の美しさ

＞一＜

どうしてと言われた瞬間、胸中に私の宿命の歴史が電光石火の如く、去来した。

実の母に捨てられ、売春宿に売られた記憶。消し去りたい。なんて、汚らわしい。

売春婦の霜澤秋さんに助けられて貰った記憶。本来ならば、李という源氏名で五歳の頃から幼い身体を売る未来しかなかった私を秋さんは助けてくれた。千秋という名前さえくれて、本当のママになってくれた。この歴史だけは美しい。でも、私の身体に付着している実の母親の分厚い唇が私に何も残さずに消えていく記憶が汚している。

だが、後の歴史は美しかった。私が八歳の時、秋さんは引退して私立の幼稚園の経営を始めた。それからはいつも、子どもの笑い声が絶えない毎日だった。本当に川の流れのように淀みない時が流れた。

その流れも急になる日がやってきた。

「ママ、死んじゃやだよ」

肌が凸凹の爛れた皮膚が特徴的な秋さんは一週間前までは元気だった。延命療法で培養された秋さん自身の細胞達も活発に秋さんの身体を支えていた。だが、その細胞は通常よりも短命だった。劇的な変化に身体が耐えられず、秋さんは高熱を出して倒れた。手を握る私の他には秋さんの売春婦時代の同僚であり、親友であるアリアさんが私の肩にそっと、手を置いているだけだった。

「おかしなものだね。私は両親を殺した罪を償うべく、愛する人

葉楼の元を飛び出して身体を売って生活してきた。自分を苦しめるために延命療法を何度も受けてきた果てに天使に出逢うなんてね。貴女を拾って良かったわ、千秋」
「過去の新聞で読んだよ。でも、それは子どもが調理したのが原因で……許されていい範疇だ。親だって酷いじゃないか」
そう、親は所詮、自分とは別の個体に過ぎないのだ。自分の方が大事なんだ。だが、私は自分の親と目が合ってしまった。今にも眠ってしまいそうなくらい瞬きを繰り返す瞳に何度、救われたことか。微笑んだ。秋さんはか細い息で用済みの空気を外へと出して、同時に暗い気持ちも外へと出した。私はそれが嬉しくて堪らない。
「それでも二人の人間が死んだのよ。私の愛する葉ちゃんも当然の報いだって言っていたけどね。ねぇ、ほら、私は醜いでしょう。これも私の心の色に染めたままにしたのよ」
「そうは見えないよ」
茶色、歪な不器用な色の肌が温かいと知っているから、私は必死に否定した。秋さんは私の手を離すと、私の腰に手を添えた。
「本当に大きくなって、あの泥だらけのおてんば娘め。貴女の事はアリアさんに頼んでおいたから、ね」
アリアさんは親友の言葉に静かに頷いていた。私はこの人らしいなと思った。誰にでも優しく、怒った事が私の知る限りでは一度もないアリアさんは秋さんの親友にぴったりだった。どうして、こういう心根の優しい人たちが身体を売らなければ生活できない運命を潜り抜けなければ今日に辿り着けなかったのだろう。理不尽だ。
けれども、私は知っている。それでも……
「本当に美しいのは……ママの心だよ。私を育っててくれた秋さんの慈悲。でも、秋さんは産まれてきて幸せだっていう時を過ごせたの」
それを言い終わった後、秋さんの顔色を窺おうとしたら、秋さんはもう、息をしていなかった。私の腰に手を添えたまま、瞳を見開いていたので、両眼を閉じてあげた。それを見届けるかのように秋

さんの両手は私の腰から独りでに離れていった。
今、思えばそれは秋さんがもう、親離れしなさい十五歳なんだからねと言っていたと理解できる。だが、その時の私はこの世の理不尽さに震えていた。
だから、私は当時、高校の科学部で研究していた時空を裂く裁ち切り鋏を研究し続けて、二十五歳で時空を越え、神様の悪戯によって当初とは予定外れの思湖達の時代へとやってくる事になり、二つの裁縫道具のうち、予備の方を何処かへと落としてしまった。何年間も探し続けながら、たった一つの目的の為にここまで辿り着いたというのに秋さんは秋さんでも今、目の前にいるちびはなんて、醜いだろうか。
ツインテールの髪型はよく、アリアさんが好んで私にしてくれた髪型だ。正直、秋さんがその髪型をしてくれた時は内心、嬉しかった。セーラー服に似たワンピースとその髪型はとても、似合っていた。残念ながら愛らしい顔の底に隠されている傲慢なまでの虚栄心がそれを台無しにしている。
もう、覚悟はできていた。私の過ちでこうなったとはいえ、こんな秋さんを見たくない。
すっと深呼吸して私は世界で尤も重い母殺しの為の狼煙を挙げる。
「気が付きませんでしたか？　私は貴女をつけてここまでやってきたんですよ。自分のしでかした後始末をつけるためにね。やはり、未来は変えるべきではなかったんです」
「どういう風につけるの？」
躊躇して、言葉が詰まる。地にしっかりと足をつけた仁王立ちが昔、自宅の二階のベランダからふざけた末に下へと落下してしまった私を叱りつけた秋さんそのものだ。あの絶対に譲りそうのない瞳もそっくりだ。
「裁縫道具を回収するだけです。さぁ、渡しなさい」
その言葉に反発するように黒い血の固まったスティックを両手で構えた。

「やだもん、これは秋に必要な道具よ。これさえあれば、秋はずっと、綺麗なままでいられる。葉ちゃんに可愛がってもらえる」
「本当の美しさはそんなところにはありません」
その声は悲痛の色合いを見せていたが、子どもの秋には通用しない。
「無駄のようですね、殺します」
そういう静かに宣言して、拳銃を構える。これが本物でないなんて真っ赤な嘘だ。ずっしりと重みがある。愚かな秋はその拳銃を向けられても、私にスティックを振りかぶるが貧困街で生きてきた私に温室育ちの秋の攻撃は温かった。余裕で避ける。引き金に掛かった指を動かせば、秋の額にいつでも風穴を開けられる。私は人を殺すのに躊躇したことがない。人口が爆発的に増え、食料問題が叫ばれる未来において人を殺してでも秋さんに助けられる前は食料を奪い生きてきた。目の前にいるのは緩慢な鼠だ。殺せ、自分。
何度も、スティックを避けては撃とうとした。撃てずに肘鉄を食らわしてやろうとしたが、それを試みる度に秋さんが私を千秋と呼ぶ声が聞こえる。
十数分の迷いの末に私は拳銃を胸元に閉まった。
「猶予期間を与えます。選択肢は二つです。欲望の為に人を殺し続けるか？　それとも、自首して葉楼さんに支えられながら罪を償う日々を送るか？　です。考えなさい」
私は威厳たっぷりに小さな秋さんの振り回すスティックを抑えた。もう、抵抗できないと悟って、青い顔になった秋はその場にゆっくりと倒れそうになる。私は咄嗟に秋さんのセーラー服の襟を掴んだ。
お姫様抱っこしてみると、秋さんの身体が意外に小さいのが解る。いや、私が大きくなったんだ。それなのにいつの時代も私は秋さんに固執している子どもだ。
秋さんを負ぶって、荻須家に戻る道すがら、腕時計で何気なしに時刻を見やると午後五時三十分を差していた。

軒先の白い階段に葉楼が座っていた。凄く落ち着きが無く、膝の上を指先が踊っていた。私はその愛しい人を待ちこがれる様を愛らしく思い、普段の道化の表情を忘れて実に久しぶりに心からの笑みを零した。そうしてすぐに秋さんを葉楼の両膝に乗せた。

葉楼の両親に挨拶をしてから、すぐに自室として宛がわれた本棚が左右の壁にずらりと立ち並んだ部屋へと引き返した。ベッドに腰掛けて、項垂れた。

自分はここへ来るべきではなかった。秋さんをあんなにも苦しめている原因となった裁縫道具を未来からもたらしたのは何も隠そう私だ。間接的に恩を仇で返したのだ。それは苛立たしい事で、私は自分の髪を毟り取った。毟り取った髪を見つめると白髪が交じっていた。ああ、また誰かを殺して髪の毛を奪い取らなければ……と無意識に考えた。おでこを叩いて違うと否定する。それは人間の考え方ではなく、化け物の考え方だ。犬畜生にも劣る化け物の考え方だ。

「あれが誰であれ、秋はあの模倣犯に全てを押しつけて葉ちゃんに愛して貰うんだ。初めて、愛して貰えるんだ。嘘つきの愛なんかじゃない」

そう言っていた可愛らしい化け物候補生の言葉が脳裏に蘇った。今の私にできる最期の親孝行は彼女の更生のみなのだ。気が付くと私は卑怯な涙を零していた。それを肯定も否定もせず、落ち葉のように無惨に死んだ黒い髪を眺めた。

しばらくすると自分にできる親孝行をもう一つ発見した。五十年振りくらいに（とっていてもこの時代に私は影も形もないのだから不思議だ）、私の手料理を食べて貰うとしよう。

材料は未来とは違い、クローンの挽肉はなくその代わりに安い挽肉が手に入るのでこれを使おうと私は早速、近くのスーパーに駆け込んで篭に詰め込んだ。その他にもレタス、ネギ等を篭に入れた。レジに向かう途中にスポンジケーキが安い価格で置いてあるのを発見して私は思わず、得意顔になった。秋さんは体調を崩す前は一日に一切れ、ケーキを食べていたなぁ。

料理完了しても、秋は階下に降りてこない。どうやら、まだ寝ているようだ。葉楼が起こしにいく意志をみせているのを無視して、私はそっと、階段を上り、ノックをせずに秋の部屋に侵入した。
秋の姿はなく、掛け布団がこんもりと盛り上がっていた。笑いを必死に抑えながら、奇っ怪な顔をしているであろう自分の顔を元に戻そうと努めた。だが、不可能だった。掛け布団を捲ると秋は豚さんの鼻のようにひくひくと鼻を動かしていた。
「秋ちゃん、惰眠を貪るのも良いけど、王子様のキスが無くても目覚めて下さい。罪人にはそんな甘い展開はありません」
そう声を掛けた。
のっそりと秋の腕が動いて再び、掛け布団という外郭を得ようと手を伸ばした。だが、彼女の手は空を掴むだけだった。
仕方なしに目を開けてと丸分かりなほっそりとした目つきで私の姿を見る。
「反抗的な目……。せっかく、私があなたの為にハンバーグを用意しただからちゃんと降りてきな」
「秋ちゃん、お肉食べられないもん」
ぶっすとふて腐れる。
「いつから？」
私はあれ？　とびっくりした。記憶の中ではいつも、秋さんが肉類を美味しく頂いていた光景が上映されている。
「ママとパパが火事で死んじゃってから」
「そう、ですか。克服したんですね、秋さん」
「え？　意地悪。秋、まだ食べられないもん。そんなの食べたら吐いちゃう」
「ケーキも作りましたから、秋はそれを獣のようにがつ、がつ食べて下さい」
「あんたってどうして、そんなに私に構うの？　関係ないよね」
秋さんは寝癖のついた髪を撫でて直そうとしたが、どうやっても元に戻ってしまう。不機嫌な言葉を吐くのに一々、可愛い仕草をす

る。私の知る秋さんは自分でこの後、対処するのだが、目の前にいる秋ちゃんは嬉しそうにブラシを握り締めた。多分、そのブラシを渡して葉楼になんとかしてもらうのだろう。それに違和感を覚えた。
「いいえ、関係ありますよ。でも、詳細を貴女に語ることはないでしょう」
冷たく捨て台詞を吐き、扉を閉めた。
「この、意地悪！」
その耳障りな遠慮のない声と共に扉に何かがぶつかる音が聞こえた。
「残念。ドアシールド。追いかけてきて、一撃喰らわそうなんてしたら、葉ちゃんに言いつけるので悪しからず」
葉ちゃんの名前を出された秋は大袈裟に溜息を吐くと静かになった。小さなレディは大好きな男にとことん、良いところのみを魅せたいらしい。だが、何処がいいのだろうか？　あの葉楼は日がな一日、餓鬼（秋ちゃん八歳）の子守とスケッチで過ごしているだけの洒落っ気もない男なのに……。
「恋とは未知数だね、秋さん、アリアさん」

＞二＜

暇な休日はスケッチに出掛けたくなる。秋は朝から友達に……確か、紀久さんとかいう眼鏡を掛けた可愛らしい子に誘われてその子の家に遊びに行った。久しぶりに一人でスケッチに行ける。葉楼は直ぐさま、スケッチブックを片手に部屋を後にした。
それとほぼ同時くらいに玄関の呼び鈴を鳴らす音が聞こえる。はい！　と大声で応えながら急いで降りていく。扉を開けると頬に大きなほくろのある宅急便業者の男性がでかい箱を抱えて笑顔で佇んでいた。その笑顔が何とも爽やかでこの男性には悩みがないのでは、と葉楼を思わせるほどだった。
「李さんはいらっしゃいますか？　代引きのお荷物が届いておりま

す」
「ちょっと、待て下さいね。李さん！」
「李さんなら、庭で秋ちゃんのお布団を干しているんじゃないかな。あの人、秋ちゃん関係のお世話を何でもしたがるから。お蔭で楽ちん」
二階から暢気なあざみの声が聞こえた。楽ちんと言っているが、あざみは一切、洗濯物をしない。料理はたまに作る。といったもてる女性像から遥かに遠ざかっている。その台詞のおかげで笑ってしまった。口から唾が飛沫した。我ながら下品だ。
いつも、布団を干している庭の見えるリビングに足を運んでみたが、秋の掛け布団が微風にゆらゆらと動かされているのが印象的に映っただけだった。その風景は子ども達が公園のブランコで遊んだ後のようなもの悲しさを含んでいた。
引き返すとまだ、ほくろの男性は笑顔のままだった。それは作り物か？　と聞きたくなるくらい辛抱強い。今日は温かいにも程がある二十六度という気温にも関わらず。
「ああ、いないですね」と葉楼は少し、低く唸ってから、「んじゃ、代わりに僕が支払っておきます。お幾らですか？」
財布を片手に葉楼は聞いた。ほくろの男性は申し訳なさそうに爽やかな笑顔から、困ったなと唇の両端を広げた。
「ちょっと、値段が高いんですが、大丈夫ですか？」
「気にしないで下さい、多少ならば大丈夫ですから」
「ええ、と五万円です」
「無理ですね、社会人の姉を呼びます」
と即答して、あざみを呼びに急いで二階へと駆け上がる。あざみは二階の廊下でゲートボールの振りの強化に努めていた。彼女の握るスティックからぶん！　と風が唸る。
五万円、払えと言ったら軽く、スティックで殴られた。そんな鬼の所業を弟にやってのけたあざみは廊下を音もなく下っていった。廊下に転がったスティックを見つめ、え？　と思った。普段ならば、

階段を壊さんばかりの快音を響かせるのに。
あざみの後に続いて階下に降りる。途中、あざみの気持ち悪い女の子のきゃっきゃっした声に嗚咽しそうになった。
「こんな暑い中、ご苦労様です」
「いいえ、仕事ですからたいしたことないっすよ。では、ありがとうございます」
「いいえ、こちらこそ」
外行きの笑顔が扉を閉めた途端に怠けた表情に変わった。笑う為に使った筋肉が数秒で解れる術を会得しているあざみは葉楼の横腹を何気なしに突いた。
「それよりも葉ちゃん、あんた太ったんじゃない。幸せ太り」
「また、そのネタですか。あまり、やる前からバレバレの振りは止めた方が無難ですよ。芸人を目指すのでしたら……」
「アドバイスありがとう。けど、これは真剣なの。人の真剣さに水を差したあんたには付き合って貰うわ」
「お姉様、残念ですが漫画・アニメ・ラノベみたく我々は血の繋がらない姉弟ではないので、恋仲には」
その言葉を言った瞬間、空気が澄んで見えない猛吹雪になったのを今でも覚えている。だが、それをゆっくり分析している気力は無かった。
汗の垂れる嫌な感触、軋む音のする車輪、前方からは姉の悩ましげな吐息、姉の生命の脈動を称える足音……ああ、全てが悪夢となって蘇りそうだ。まだ、現在進行形なのにそう思えるほどきつかった山道……。ほら、小学校の卒業式の在校生達による卒業生を贈る言葉口調に思考が変化している。
「葉楼、遅い。あんた、自転車なんだから」
現実逃避さえ、させてはくれないあざみの声は途切れ途切れだ。健康な高校男子諸君ならば、これを今夜のおかずに取っておくのだが……姉では萎える。
「わざとでしょう。わざと自転車乗っても良いよ、その方が楽だか

らって」
「姉の愛を疑うなんて、そんな弟に育てた覚えはない」
「育てられた覚えもないです」
姉の揺れるお乳は推定デー。もはや、やけくそだった。ペダルを懸命に漕いであざみを追い越した。それを阻止するべく、強風が酸素を遮断する。咄嗟に顔を背けて酸素を体内に補給した。あざみの鬼気迫る顔を心の準備無しに見てしまった。動揺してペダルを踏み外し、自転車が傾きそうになる。体勢を整えているうちにあざみの背を前方に見る形になった。
自転車に乗った人間と自分の力のみで走る人間、意味もない姉弟対決が繰り広げられている最中に思い掛けない人物を見かけた。
メイド服ではないが、大樹のようにすらりと伸びたスーツを着込んだ背は李の特徴でもあった。何処か、気取った足取りで森の中へと消えて行った。
「あれ。あれは、李。あっちの方向は……。葉楼」
「時々、野犬が徘徊してますから危ないですね。声を掛けましょう」
最近、森の奥で遊んでいた子どもや、散歩しているお年寄りが腹を空かせた野犬に襲われているから気を付けるようにと一週間前に町内の回覧板で回ってきたのを思い出した。
足取りが自然と速くなる。怪我をしたら大変だ。
「あんたって本当に良い奴ね」
意味深にあざみが葉楼の背に言葉を発したが今は、無視した。ここで姉弟喧嘩を勃発させたって仕方がない。
森の中は想像通り、整備なんかされていない。道ができていると思ったら、背の高い雑草に進路を奪われる。その雑草の存在を気にせずに、李はそのまま、歩く。顔面に葉が触れてもここから見る限りでは平気そうだ。葉楼とあざみは李の姿を視界で追うのがやっとで、当然李との距離は縮まらない。
それどころか、見る見るうちに距離が開いて、ついには李の姿を見失ってしまった。

「とりあえず、この死体達には退場してもらいましょう。秋さんが警察のお世話になるとこは見たくありません。まっ、裁縫道具の効能を現在の猿が理解できるとは疑問ですが」
そう言っている李の声が微かだが、洞窟内から聞こえる。その口調には不気味なほどのおどろおどろしさが含まれていた。葉楼はどうしようか？　とあざみの姿を見たが、あざみはよしよし、怖いんでちゅねと言って葉楼の頭を軽々しく撫でて先へと進んだ。
洞窟内は夏だというのに寒々としていた。自然と両手を組んで肌をさする。真っ暗闇の奥の方に黄色い灯りが煌々とついている。その影響が葉楼の足元を明快にさせていた。おかげで転ぶ事もなく、李の姿を捉える事のできる絶好の岩陰へと隠れられた。首だけを岩陰から外へと出す。
普通に部屋にありそうな家具の奥に見慣れない汚れた布が壁に立て掛けられていた。よく、目を凝らすとそれは布ではなく、かつて、人間であったものだ。絶句した。死体は二体ある。一体は頭が取れていて、地面に散らかった玩具のように無造作に転がっていた。恐ろしい事にこちらを二つの空洞が捉えている。その空洞に見られて、笑ってしまった。
咄嗟にあざみが葉楼の口を塞いだが、笑いは骨太となって洩れ続ける。もはや、止まらなかった。
李はくるりと向き直り、洞窟の入り口を眺めた。あんな腐乱死体が二体もあるのに彼女は慣れていた。その表情は街中で待ち合わせをしている女の子にも似ている。
「素人は見ない方が良いですよ。風が吹けば、何処かへと飛んでしまうくらいミンチにする予定ですから」
黒いスーツは死者に対するせめてもの敬意を表するつもりなのだろう。だが、それとは対照的に李の手には裁ち切り鋏が握り締められていた。裁縫でも始めるのか？　一体、何が始まるんだ？　と思考は二転三転する。
やっと口から出た言葉は実に間抜けだった。

「バレてたんですね」
「あんた、それ」
あざみは実にゆっくりとご飯粒を何度も咀嚼するようにその言葉を言った。
「こちらの方ですか。私は秋ちゃんママよ。趣味はケーキの食べ歩き多分」
李は細い白い手の甲を動かして、左右に乱暴に振った。薬指には茶色く焦げた安物の銀の指輪が収まっていた。その指輪は死者の哀れな死に様を物語っているようで今にも叫び声が聞こえそうだ。
「俺は秋ちゃんパパ。仕事は腐るだけの死体」
そうリズムよく、李は歌って、足元にあった頭を蹴り飛ばした。
「宜しく」
と付け加えた時には葉楼とあざみの側へと転がってきた。
「笑わないですね。場を折角、盛り上げたのに。この二人は恐らく、重度の火傷を負った秋ちゃんが必死になってここまで運んできたのでしょう」
「重度の火傷？　あの子は火傷なんて」
何度、秋の姿を思い出してみても、金髪のふさふさした髪に白く透き通った柏餅みたいな弾力のある肌、目は真ん丸として可愛い。
「してない。あなただけの常識でみればそうでしょう。でも、葉楼さん、常識なんて所詮、世界のほんの一部の決まり事に過ぎないですよ。国が違えば、常識が異なるように。そして、時代が違えば常識が異なるように。凡人と天才の常識が違うように。その常識が崩れる瞬間をお見せしましょう」
握っていた裁ち切り鋏で死体を挟んで、縦横無尽に刃を走らせた。そのスピードは熟練の職人のようだ。休まずに切り続ける。葉楼が吐き気を我慢しているうちに二体の死体は折り紙の大きさになり、最期はペーパーナイフで粉々に切り刻まれた。この二体の死体は紙でできているのでは……と疑ったがどう見ても目の前にある頭は重さを持っている。

「な、何、気持ち悪い。死体がミンチ、葉楼」
そんなの僕も見ているよと言いたかったが、口は閉じたままだった。口を開いたら、死体特有の生臭さを含んだ酸素を大量に吸ってしまう。そうしたら、発狂してしまいそうだ。秋の事もそうだが、この李はモンスターだ。想像を越えている。理解できないものにあった時、思考が止まるのは恐怖と絶望が思考に含まれているからだ。
ゆっくりと、近づいてくる……。鋏の両刃を擦りつけながら耳障りな音をあげている。
ゆっくりと、近づいてくる……。ペーパーナイフを振って肉片を撒き散らしている。
もう、駄目だ、殺される。あの死体の頭も僕達の運命を知っていてよく見るとざまぁ、ねぇなって笑っている。その頭に違うと叫ぼうとした時、頭は真っ二つに割れて地へと伏す前に塵となって吹き飛んだ。その塵は他の塵と一緒に黒いゴミ袋に吸い込まれていく。
「安心して下さい。ゴミは他の時代に飛んでいきました」
平然と武器を裁縫道具箱に仕舞い込んだ李は葉楼達に気さくに説明した。
「あんた、何者？」
「すっかりお話ししますよ。事の成り行きと今、起こっている連続殺人事件の真相についてね」
葉楼達に席に着くのを進めた。座ったことを確認してから、李も座る。
それは……御伽噺のような雲を掴む話だった。時折、李は葉楼達に色んな表情をしてみせた。五歳で身体を売る運命にあった自分が秋に救われ、貧困層の集まる学校へと進学できたことを話した時の李は少女だった。爛々と輝いた目でその光景を思い出しているのだろう。だがふと、全てを話し終わると花火の火がしゅっと消えてしまったように詰まらない顔をする。
自分にもそれは経験があった。自分だって秋とあんなに楽しく過ごした記憶がある。ランドセル、あわあわ、スケッチ、窓硝子の漢

字、本当の母親……。その全ての出来事には等身大の小学生　霜澤秋がいた、それを見守る自分がいた。愛が花火の火のように消えて、今は解らない悲しみに包まれている。その正体を知ることさえ、億劫だ。

「秋さんを葉楼さんと一緒にさせてあげて、楽しい人生を、それが私の親孝行。そんな事だけを考えていました。きっと、未来が変われば、消えるでしょう私は。それでも良い。何十年も生きてきましたからね。でも、私が予備の裁縫道具を落としたせいで秋さんは人を殺した。あの両親の為に秋さんだから行動したんでしょう。事実は秋さんしか知り得ない。でも、私はそう今でも信じている。アリアさん、厘を殺害したのは別問題として許せない。私の罪でもある」

予感がした。次に目の前で眉根を歪ませて苦痛に耐えている側面と不器用な笑顔を必死に浮かべようとする側面を混ぜ合わせた葛藤に身体を震わせた少女は、葉楼の経験のない何とも悲劇的な風景画の一部だった。少女の背後には蝋燭によって照らされた土の壁。その壁よりも意志堅く、叫ぶ。

「私は裁縫道具の回収が不可能な場合、秋さんを殺します。醜い秋さんを見たくありませんからこれ以上」

「秋を殺すんですか……。自分を育ててくれた親を殺すんですか」

「葉楼、それは最終的な手段でしょう。ちょっとは冷静に考えなさい」

いきり立とうとする葉楼の肩を押さえて、あざみはその肩に全体重を掛けて押し戻す。相当に痛かったが、身体中を巡る血液の熱さがそれを掻き消す。やけに熱い。シャツの襟を摘んで扇いだ。生ぬるい風が鎖骨に当たる。効果がない……。苛々する。

「そんなのはどうでも良いことです。秋を殺すって、親を殺すって言った事、それ自体が僕は許せない」

強くテーブルを叩いた葉楼の行為を鼻で笑った。鼻息で笑った李が非人間に思えた。

「葉楼さんの場合は秋ちゃんを殺すっていう選択肢に頭きているん

ですね。けど、秋さんは殺人鬼ですよ。同じ事をされても文句の言えない立場の人間です。自分の恋心のみで過保護にするのが本当の愛情ではないはずですよ」

「違いますか？　ん？」

まだ、化け物を愛しているのだろうか？　家族だと思っているのだろうか？

何かが怖かった。そう、自分と秋とは違う人間だからその何かが怖い。

＞三＜

人の心は移り変わるいつだってそうなんだ。私は彼に恐怖を与えた。私は彼女に絶望を与えた。私の目的は結局、自分のしでかした失敗で死んだアリアや厘の恨みを晴らすよりも、親孝行を選んだのだ。だって、親は無償の愛を授け続けてくれたんですから長い間。それにアリアならば、私がやろうとしている事を許してくれるでしょう。

ですが、私の心は苦痛に歪んでいるのです。精神的疲労が長い間、蓄積されたせいか、この頃は台所の卓で頭を横たえてそのまま、寝てしまう。そのせいか、首が痛い。今日も首が痛い。今日も首に冷却シートだぜ。

「葉ちゃん！　何で秋ちゃんと遊ばないの」

秋さんはぶすくれて、唇を振動させて豚の鳴き声みたいな音を出して、葉楼に抗議している。この人の子どもっぽさが死ぬまでこのままだと知る私は場違いながらも腹を抱えて笑ってしまった。二人は仲良く、私を睨む。咳き込んでそっぽを向いた。これ以上、黙秘のポーズだ。

「今日は全国学生絵画コンテストに提出する作品を書かないといけないなんだ。知ってるか？　この作品で賞を取ってプロになった人は多い。それくらい権威ある賞なんだぞ」

そのコンテストは確か、私のストーキングによる調査では九月六日提出だと記憶している。私以上に変態的な素行調査をする（愛しい葉ちゃん限定で、服の匂いを嗅いで女と遊んでいないかや、勝手に鞄、引き出しを調査、さり気なくエッチぃ本チェック。ロリ系のみにし、一番美味しいシーンに秋さんスク水写真貼り付けのおまけつき）秋さんには嘘はばればれで白い肌を真っ赤にして怒っている。ほら、やり場のない怒りに開いていた計算ドリルに葉ちゃんなんて嫌い、ピーマンになればいいんだ！　と書き殴っている。

「秋ちゃんの絵画があるよね、あれ、出せば良いよ。ねぇ、ねぇ！　今、持ってきてあげる」

計算ドリルを閉じて秋は葉楼の返事も聞かずに騒々しく二階へと上がった。きっと、今日までに画かれた秋ちゃん画、およそ三十枚の中から一番、可愛い秋ちゃんを持ってくるのだろう。時間が掛かりそうだ。そう推測した私は不本意ながら、ソファに寝そべってニュースを見ている葉楼を揺さぶる事にした。

「葉楼さん、秋ちゃんは可愛いですか？」

その言葉には耳を貸さず、液晶テレビに微笑ましい笑顔を送っていた。今時の学生のお小遣い特集をしていた。五千円が多いようだ。私もテレビの内容に興味ある振りをして、葉楼の耳元に囁く。

「答えられない。結局、あんたも性欲、たっぷりな男子君だったわけですよ。あの金髪の髪はカツラ、醜い禿げちゃん。あの白い肌は全部奪い取った偽物。本当は焼け爛れたぐちゃぐちゃの肌。そんな醜い子を愛すなんてできませんよね。でも、醜いってなんでしょうか？　美しいってなんでしょうか？」

「知らないですよ。化け物」

やっと、低い声で答えた。なんて、女々しい声なんだろう。

どたどたと階段を降りる音がする。

「おや、我らが禿げ秋ちゃんが帰ってきましたよ」

秋さんは葉楼の背後にしゃがむとうーんむぅと唸り声を上げた。そして、跳び上がってソファの背もたれに腹を乗せた。逆さまの状

態のまま、葉楼の表情を窺う。目と目が合うと葉楼の方がソファの右端に寄った。可哀相に秋さんはそれが一緒に座ろうよの合図だと勘違いした。パンツがまる見えなのを気にせずに、頭からソファへと突っ込んだ。スカートを直してあげようと葉楼の手が一瞬、伸びたがそうしなかった。

「ほら、秋ちゃんだよ。可愛いく画けているよ。これなら」

ここからでは見えないが多分、可愛い秋ちゃんが映っているんだろう。私も見たくなって見せてと頼もうとした。純粋に興味からだ。一番、最初に見た私の記憶にある秋ちゃん画は秋さんの寝室に額縁に入れられて飾ってあった絵だ。あれは今でも私の心に燦々と太陽のように輝いている。事実、その絵は太陽の光を一杯に浴びていた。顔の火傷は酷くなく、右頬が茶色く変色して凸凹になっているのみで全身に包帯を巻いた秋さんは野兎を抱っこしていた。その微笑みは絵を描いている葉楼を優しく見つめている。

美しいと子どもながらに思ったものだ。

びりっ、びりっ。不吉な音に気が付いて陶酔は数秒で終わった。その音は画を粉々に引き裂く音だった。ひらひらと舞う中に、私は秋さんの恥じらう唇の動きを一瞬、見た。それは本物に近い。

「秋ちゃんが……」

それだけ言って秋は言葉を紡げないくらい落ち込む。

「うるさいよ。本当は僕らを欺いている癖に君が殺したんだろう、厘を！　その白い肌を手に入れるために。その金髪の髪はアリアちゃんの髪だ。君と同じ年代の子なのに何とも思わないのか！」

「何言ってるの、秋は非力な小学生だよ、そんな事できるわけ」

もう駄目だ。母の醜態に私は顔を両手で隠した。どう見たって秋さんの笑顔はぎこちない。目がきょろきょろして、真っ直ぐ葉楼の厳つい表情を見ようとしない。

「これが証拠だ」

伸びた手を秋さんは払いのけようとしなかった。そんな言葉を聞いても信じていたのだろう。無理矢理、秋さんは髪の毛を引っ張ら

れ、目を閉じてしゃがんだ。葉楼の掌に乗っていたのは秋さんの金髪のカツラだった。頭部には微かな火傷の跡が残っていた。
放心して金髪のかつらをじっと見ていた秋さんは葉楼に何かを言おうとしたが言えずに家を飛び出していった。
「追いかけなくて良いのですか？」
爪先に何か、珍しいものでもあるかのようにじっと、眺めているその男を見ると腹が立って仕方がなかったが、自分の母の思い人を殴れなかった。お昼のお茶の時間にいつも、その人がどれだけいい人か、語ってくれた。
コーヒーを一口、含むとちろっと下唇を舐めた。そのお茶目な愛すべき母が言っていた。
あの人は物欲がなくて、その代わり、それが全て愛情に回っているような人。
今、私の目の前に立っている格好良くも、格好悪くもないややくたびれたTシャツを着て、まだ下を向いている男が憧れの人だって……信じられない。
でも、私は母の憧れだけは信じていた。震える指先の怒りを私の望む形へと終わらせる為に必要な起爆剤へと変換していく。少しずつ、少しずつ。全てはここまで自分を生かしてくれた母の為に。
「それとも、今までの善人ぶりは秋ちゃんの正体を知って消えてしまうようなものだったんですか？　秋ちゃんが何故、葉楼さん達に嘘を吐いたか、考えてみて下さい」
しんとした空間に扇風機のプロペラ音だけが響く。葉楼の髪の毛が非情な機械風に呷られ、彼の惨めな顔を滑稽にした。髪の毛が七三分けになった彼の唇は乾燥していた。
「でも、あなたには解らない、愛されることが当たり前だって思っているから。ついてきなさい」
私は強く思い浮かべる。両手で胸の前に抱きしめている裁ち切り鋏は人の脳の微弱な思考エネルギーを受けて、青々と輝く。私はその光に一種の恐怖感、畏怖感を抱いている。もう一度、時に触れる

のを何十年も躊躇っていた。少し後退りして、気持ちに勢いを付けてから、その鋏で空気を裂いた。
裂いた部分は白い靄に包まれていた。一切、その先にあるものは解らない。
「この中に飛び込めって言うじゃないだろうね」
その驚くべき現象をじっと、傍観していた葉楼が怖ず怖ず、言った。そして、ゆっくりとその奇妙な穴の側へと近づいた。目を凝らして遠くを見ようとするが、見えるはずはない。葉楼が無駄な努力をしている間、私はそっと彼の背後へと回った。彼の背中に触れるか、触れない位置に蹴る体勢寸前の右足をセット。
発射カウント！　十、九、八、七……。
ごめん、意味ないね！　そう、全て（遍く生死の歴史）には意味がない。けど、最期までハッピーエンドが欲しい、私の望む……。
「さぁ、明日に喧嘩売りに行こう！　とぉ、李ちゃんキック」
私は蹴ってやった。いずれ、私の母と一緒になる幸福な憎いあいつの背中を蹴った。その勢いで彼も、私もその白い靄の中に消えていった。
靄が消えて、私が三歳の頃、捨てられた場所へと私達は立っていた。振り返ると、私達が来た道は自動的に塞がれていた。まるで、そんな穴など、存在しなかったように。時間の自然治癒現象だ。
目頭が熱くなるのを感じた。今でも覚えている売春宿　竜宮の裏手のゴミ捨て場で私は泣いていた。郵便ポストを支える柱に私の腕は鎖によって繋がれていた。それをしたのが実の母だと誰が信じるのだろう。思湖と同じ時代を過ごした三十代の霜澤千秋ならばそう胸を痛めるだろう。だが、この時代のスラム街に生きる人々は明日を生きる金を手に入れるべく自分の子どもをこうやって売春宿に売るのが当たり前になってしまっている。
鎖を外そうと半べそを掻きながら、鎖を引っ張っている私だって多分、知っているはずだ。母親はお前を見捨てた、お前は一人だってこと。多分っていうのはもう、古い記憶過ぎて細部の感情まで覚

えていないからだ。
「あれは親に捨てられた私です。名前はありません。いいえ、覚えていない」
その言葉を聞かずに近くにあった鉄パイプを手に持つと幼い私の元へと急ごうとする。私はすぐに彼の肩を自分の方へと引き寄せた。
「可哀相でしょう、助けてあげなきゃ」
「あなたがあの子の面倒を一生、見るんですか。あなたはあれが哀れだと思いますか？」
葉楼は痛い処を突かれて、鉄パイプを店の壁に投げつけた。壁にそれがぶつかる音は大きかったが、例の少女は気が付かずに自分の現実と闘っていた。
「とんだお人好しだ。この時代では半数の子ども達が食料難の為にああいう運命にあるんですよ。実に汚い、醜い」
私はまた、裁ち切り鋏で空気を切り裂くと、葉楼の腕を掴んで無理矢理、白い靄の中へ投げ飛ばした。
葉楼が文句言って、私が六歳の時代の人々にばれるのは厄介だ。腰を押さえている葉楼の口を手で押さえた。そこで思い出したのだが数分前におトイレに行った時、手を洗うのを忘れていた。目を細めて私の掌の匂いを存分に嗅いでいるではないかと勝手に解釈した。
襖を少し開けて、聞き耳を立てる。お座敷には布団が敷いてあった。その布団に横たわる六歳の少女を卑しい笑みを浮かべて中年の男性が値踏みしていた。
「旦那様、今夜も理里をお抱き下さい」
「そうか、そうか、可愛いな。お前は。お前、金が好きだっていていたなぁ。これをやろう、前金じゃ」
少女の着物の帯に十万円の束を差し入れた。
思い出した。この男性はスラム街にある小学校教育委員会の幹部だ。気前が良いのも納得だ。
「懐かしいですね。お金大好きの私の親友、理里ちゃんです。まぁ、お客を取られた売春婦に頼まれて三日後に毒薬を飲み物に混ぜて殺

しましたけど。あんな事がなければ、親友でしたのに。でも、大半の子がエイズに掛かって死んでしまうので長くなかったかもしれません」

私の言葉を理解できないのだろう。非難がましく、葉楼は私の肩を揺らす。

「なんで、そうするって。親に捨てられたから、身体を売って儲ける。汚いって思いますか？　醜く生きるなぁって思うでしょう」

甘チョロい世界に生きていた葉楼は私のいた時代に衝撃を受けて固まっていたが、私にはそれ程のことではないと認識していた。喰うために何をすればいいか、生きるために何をすればいいかっていう思考は過去、未来も人間が生きている限り続くのだから。

私は嬉しそうにお金を握り締めている理里に手を振った。だが、彼女は気が付いていない。

次に私達が来たのはスラム街で尤も汚い地区だった。フェンスに周囲は囲まれていて、その中には生ゴミや死体が無造作に山積みにされていた。人間が増えすぎた世界の人間の価値は暴落していた事を今更になって再認識した。どうやら、私も甘チョロい世界に身体が慣れてしまったらしい。

とりあえず、鼻を摘んで今にも吐きそうな顔をしている葉楼にこの説明をしよう。

「ゴミの山って呼ばれている人間を捨てに来る場所です。宇宙進出に失敗した人類は地球上だけで繁栄する事を余儀なくされました。ですから、増えすぎてしまった人間なんて他者にとってまさにこのゴミのようですね。あ、このマスクどうぞ」

私はとても、親切なので秋さんの部屋から秋さんが私が来てすぐの頃、熱を出した際に愛用していたマスクを洗わずに盗んでおいた。いずれ、葉楼をおちょくってやろうとしていた悪戯心など少しもなく、誕生日を知らないがいずれ、葉楼の誕生日にプレゼントしてやろうという親切心があった。葉楼の生きる時代の男子はどうやら、好きな子のリコーダーを舐める、吹いてみる変態行為に興奮する子

が多いらしい（私の個人的見解）。
「どうも……ミルクティーの香りがしますね」
そう真剣に言う葉楼の言葉に私は吹き笑いそうになったが、耐えた。
淀んだ雲の合間を稲妻の光がぴかっと移動している。それは虎視眈々と地上の誰に稲妻を落とそうか、思慮している不気味さがあった。昼とは思えない暗闇の中で一人の少女がゴミを漁っている。泥だらけの手を無心に動かしている。何故？　無心だと解るかってあの少女は七歳の頃の私だ。いつも、お腹を空かせていた私はああやって、ゴミの中から食べられそうなものを発見して口に含んでみる。それが食べられないと解ると慌てて吐き出した。よく生きていたものだ。
自分を遠巻きに見る。哀れな子どもだったのだなと冷静な感慨が浮かんだ。
サンダルは汚水にびしょ濡れに濡れている。それを構わないのは野生に近い子ども時代だからこそだろう。伸び放題の髪の毛はお世辞にも綺麗とはいえず、汚らしい。砂に汚れたワンピースを平気で着ていた。
厳しい表情に明かりが灯った。少女の手にしたのはまだ、封の切られていないポテトチップだ。
「あの子、そんなの食べちゃ駄目だよ。ちょっと、注意してくるよ。腹を壊しちゃいますよ」
「レディの食事の邪魔をしてはいけません。ほほう、今日のあの子の食事は賞味期限不明のポテトチップですか」
「食べるんですか」
「あれ、食べたら腹を壊すね。醜い奴ですか」
私にとってはあのポテトチップは幸運の神様だった。ポテトチップを全部平らげてサボっていた給仕の仕事に戻ろうと歩道を歩いていた時、急にお腹が痛くなり、その場に蹲っている私を見て、介抱してくれたのが秋さんだった。初めは包帯を全身に巻いた醜い人だ

と嫌っていたが、秋さんが回復した私に出してくれたのは温かいココアだった。その煙を見た瞬間、自分の魂が常に悲鳴を上げていたのに気が付いた。一口、一口飲む度に嬉しいのに涙が零れた。
ああ、美味しかった。だからこそ、恩返しをしたい。あの時々、愛しい人を求める寂しい横顔を見るといつも、胸が締め付けられた。
私はその記憶を胸に抱き、白い霧の中で、
「母さん……。秋母さん」
と呟いた。
葉楼はその呟きに何か、気が付いたようだった。その横顔は母と同じ優しさに満ちていた。ココアの温かさの原点がこの人にあると私は確信した。
「さて、今まであった子達は愛を感じたことがあるのでしょうか？
それと似た子が君の近くにいなかった？」
「君の母さん、僕のお姫様、秋ちゃん」
嬉しそうにはっきり、そう答えて葉楼は私などもう、目に入らないようだ。すぐに、扉を開けて玄関で靴を履く慌ただしい音が私の耳に届いている。
私の心臓の鼓動はまだ、時を刻んでいる。私はすっーと呼吸してみた。まだ、息を吸える。
「やっと、行きましたか……。おや、消え始めている。なんでだろう、自分が消滅するのにこんなに心が穏やかだ」
指先が透明に透き通っていく。指先の下にあるはずの床が確認できた。だが、恐怖はなかった。こうなる事も裁縫道具を開発してから、予測していた。何千夜の中で自分が消える悪夢を見て、慣れてきた。たった一つの願いを叶えるべく、慣れてきた。
「貴女、身体が透けて……」
開いていた扉からあざみが入ってきて、私を心配してくれた。それが私には可笑しくて仕方がなかった。実の母に捨てられた女の人生がこうも、穏やかな最期を迎えようとしているなんて随分、神様は気前が良い。

「まだ、平気です。さぁ、裁縫道具を回収に行きましょう」
そう淡々と言葉を口にして、私は神様に最初で、最期の御願いをする。
どうか、私の我が儘を最期まで見届けて下さい。その上で世界の法則を打ち破った罪人である私を地獄に落として下さい。うんと、辛い地獄に。

＞四＜

思えばあの子が行きそうな場所なんて限られていた。だって、あの子は篭の中の鳥だったのだから。
自分でそう思っては自分の心を傷つけていく。そうしなければいけない気がした。会う資格がない気がした。
葉楼の吐く息は弾んでいた。自分が吐いた息ではないように感じられるくらい、距離が近い。だが、まだ学校までは距離が遠かった。紀久がもし、学校にいれば秋は留まっているかもしれない。よく、紀久は学校の図書館で御本を読んでいるよと自分には必要のない情報を無駄に、嬉々として話す秋は化け物じゃない。醜くない。美しい、真っ白な子なんだ。例えるならば、まだ白紙の状態なんだ。これから描かれていく秋の世界が。
葉楼は迷うことなく、小学校へと無断で立ち入った。休日の学校の階段はひっそりとしている。図書館だけは生徒に開放されているはずだが、あまりに人の気配がしない。最近では本を読む子は少なくなったと聞く。その影響が田舎であるこの街にも出ているのだろうか。
だが、その推測は外れていた。扉の向こうでは一心不乱に子ども達が本を読み漁っている。ページを捲る音が外まで響いてきた。葉楼は邪魔しないように扉をゆっくりと開いた。
紀久を探そうとしたが、探すまでもなく、向こうからこちらへと走ってきた。

「秋、来てますか？」
「来ていないです」
短く、示し合わせたように囁き声だ。ありがとうと手を上げて葉楼はその場を後にした。階段を下ろうとした時だった。紀久の声が聞こえた。
「待って下さい。これを秋ちゃんに渡して下さい。あ、これ、私の本なんです。秋ちゃんが本を前は毎日、沢山読んでいたと言うので本のタイトルしりとりをしたら、秋ちゃんの知らないタイトルの本が出てきて、それがこの本なんです。秋ちゃん、読みたいなって言っていたから」
「君も渋い本を読むんですね」
葉楼はタイトルを覗き込んでそう感心した。ジャン・コクトー『恐るべき子どもたち』。これを子どもが読むのか……。大人でもきつい結末なのに。
「解った、渡しておこう」
「あ、それと秋ちゃんにその本の感想を教えてねって」
「うん、ありがとうって秋に代わって言っておきますよ」
「秋ちゃんとは友達だから、そんなのなくても心と心で分かり合ってます」
冗談半分ではない爽やかな笑顔が葉楼にとっては羨ましかった。純粋に人を信じていた時代が自分にも確かにあったのだと微笑ましくもあった。二度と帰れない時間だ。
次に行く場所の当てもなく、走っていると重要な事に気が付いた。秋は今、カツラを装着していないんだ。普通の女の子ならば、髪がないのは恥ずかしいはずだ。とすると、人気のない場所……。秋が前に住んでいた屋敷の辺りに潜んでいるのだろうか、可哀相に一人、寂しく。そう思えば、思うほど、自分を殴ってやりたくなった。なんて、人の気持ちを解ってやれない男なのだろう、こいつは。
自然と足に力が籠もる。平坦な道は案外、自分の息をぼんやりと聞いているだけで足はすんなり動く。だが、人間の体力には限界が

あり、特に日頃をから運動をしない葉楼は坂道に入って少しした場所でもう、膝に手を突いていた。唾を吐き、足を止めた。見上げてみるとまだ、坂道は続いていた。唾をもう一度吐いてから歩き始めた。

屋敷のあったはずの場所へと着いたのはそれから三十分経ってからだった。

以前、来た時とは違い、そこは既に人の手の入っていない土地になっていた。以前、屋敷があった場所には雑草がもう、生え始めていた。

草がざわざわと示し合わせたように騒ぎ立てて、頬を涼しげな風が撫でる。風が来た方向を目で追う。秋と出逢った森が目に入った。

一歩、一歩、懐かしさから歩を進めていく。何をしているんだろうと自分でも不思議に思った。もう、大分、奥の方まで歩いていた。秋を探さねばならないのに自分は……と溜息を吐いた。

その溜息の情けない濁音に混じって、甲高い泣き声が微かに聞こえる気がした。注意深く、聞いてみる。やはり、泣き声だ、それも少女の声。何処かで聞いた事がある。

「秋だ」

思わず、呟いた。まるで長年探し求めていた思い人と再会したような素直な笑みが両頬を丸く誇張させる。平静に装おうとしても無駄だった。形状記憶合金のようにすぐにそんな情けない表情に戻る。

足は軽やかだ。気持ちは秋の声がはっきりと徐々に聞こえてくる度に穏やかに……むしろ、沈んだ状態に変化していく。

秋はやはり、そこにいた。自然にできた洞窟の壁に背をもたれて座っていた。その両手には恐らく、李が落とした予備の裁縫道具の手提げ部分をぎゅっと、握り締めていた。まだ、秋は葉楼に気が付いていないらしく、下を向いて時折、咳き込んだ。それ以外の動作といえば、ただ泣いているだけだった。その泣き声は幼女が母親や父親に助けを求めるような壮絶さが色濃くあった。

「それを捨てるんだ、秋。もう、そんなのいらないよ」

その言葉を聞いてびっくりした秋は目を開いて葉楼を確認した。確認した後にいつも、みたく駆け寄ろうとしたが足を急に止めた。
「だって、これがないと葉ちゃんに取られたカツラの代わりを探せない。肌も新鮮にできない。葉ちゃんに、家族に嫌われる！」
滑らかにとはいかないがその発せられた言葉に対して自分でも解らないくらいに必死に頷いた。秋のように不幸な体験をした訳では決してない。それが今更になって悔しかった。秋と同じ場所、同じ時を過ごして来られたら……きっと秋を不幸の中にありながらも、その中での最大級の幸福へと誘う努力ができたはずだ。
睫毛がきらきらと輝いている。悲痛が生んだ輝きさえも美しい。そう思えるのはこの子を幸福にしたいからだ。逃げようとする秋の身体を強引に捕まえて強く抱いた。
「そんな事ない。あたしも、葉楼も、親も、秋ちゃんの外見を見ていたじゃない。秋ちゃんの性格……心を見ていた。その穢れない心が私達は大好きだよ」
秋の唇のおかげで口が塞がれている葉楼の代わりにいつの間にか、背後から現れたあざみが代弁した。もう一つのうん、と小さく頷いたのは李だ。李は秋が落とした裁縫道具を回収する。目の錯覚だろうか？　李の身体が透き通っているように見える。太陽の悪戯だろうとしか考えなかった。
「僕は本当の秋に否定されるのが怖かった。真実を知ってから怖かった。僕は君じゃない。君も僕じゃない。だから、僕から先に君を肯定する。罪を償おう、一緒に手伝うから。帰っておいで僕のお姫様。愛している」
「葉ちゃん。けど、秋ちゃんは書物でしか、愛を知らない」
知っているだろうと答える代わりにもう一度、唇を優しく塞ぐ。今度は舌を口内に侵入させた。すぐに暖かい感触とぶつかった。舌を舐め合った。
唇を一端、離す。
秋の唇がすぐに吸い付いてきた。何処で覚えたのかは知らないが、

葉楼の歯茎をこそばゆく舌先で触れていく。柔らかなタッチだ。
お返しに同じように秋の歯茎を舌先で触れる。それはもっと、深く、もっと、壁のない他者と触れる為の儀式のようだった。
もう、目の前には秋の潤んだ瞳しかなかった。中腰になって、身長が自分よりも低い秋に目線を合わせた。互いに微笑み合った。
「あのお姉ちゃんがいるんだけどなぁ。ちぇ、これだから独身は寂しいんだ」
外野の声は気にしないで、秋との対話を楽しむ。言葉ではない、魂の対話を。
少し膨らしたお腹を撫で回す。そうすると、くつぐったいのか、声を出して笑った。もう、その明るい顔には涙は似合わない。未だに溢れる涙をわざと音を立てて吸い取る。
「これから時間がある。沢山、沢山。償う時間の合間にちょっとだけ、愛に溢れた日々があっても僕は良いと思う。それくらい、良いじゃないか」
「いっぱい、愛も知って。いっぱい、御免なさいする」
そうお互いに自分達の意志を確認し合う。これからはずっと、共にありたいと願うから。きっと、そこに本当の美しさがあるから。
唇と唇をくっつけて、互いに目を瞑って風の音を聴く。
風という名詞で現している僕達はなんて、幼いんだろう。風も、人間と同じなんだ。ほら、他の風に微笑みかけている。その微笑みに対して何がそんなに嬉しいの？　って返事を返している。君と一緒に過ごせて嬉しいんだよって返した。なんて、羨ましい会話だろう。僕はそう、想像したんだけど、僕の小さなお姫様はどう想像したのかな？　きっと、僕とは違うだろう。だけど、可愛らしい甘えんぼ気質の少女はきっと、優しい命と命の交流を小さなキャンバスに描いているのだろう。
そうだよ、秋。命はそこにただ、在るだけで美しい。それを汚すのは他者の命を侵害した一瞬だけにあるんだ。
少なくとも、今自分は風に教えてもらった。

と思っているだけだけどね。

＞五＜

終わったね。私の人生。あ、まだか、まだ時間がある。せめて、自分がしでかした改編の行方でも眺めて行こう。そう、素直に私は思った。

肩の荷が降りた。それはこういう時に使うのだろう。

私は誰にも別れを告げずに、葉楼が秋に口づけし始めたのを凝視するあざみという光景にチャンスを見出し、そっとその場を離れた。

何の後腐れもなくゆっくりと地面を踏みしめていた。だが、後から悲しみがやってきた。きっと、母と対話をする事はないだろう。寂しかった。悔しかった。

せめて、残りの時間、影から母の幸福を見守る事にした。

駆け足で木々の合間を縫うように走りながら、裁ち切り鋏で空間を裂いた。そのまま、できた穴の中へ駆け抜けた。

育ててくれてありがとう、私の母さん。幸福を、あなたが一番、望んでいた幸福をプレゼントできたでしょうか？　結局、私は母さんではないので、母さんの幸福が解りません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1872z/

醜美千秋

2011年12月10日23時50分発行